岡山県埋蔵文化財発掘調査報告101

米田遺跡

米田排水機場建設(湛水防除事業東岡山地区)に伴う発掘調査

1995

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告101

米　田　遺　跡

米田排水機場建設(湛水防除事
業東岡山地区)に伴う発掘調査

1995

岡 山 県 教 育 委 員 会

◀１．井戸ＳＥ01，
井側と井筒
（南から）

◀２．１区河道中層の土器
集中部
（東から）

◀３．３区土層断面５，
貝層検出状態
（西から）

小型卒塔婆（実物大，Ｗ１）

小型卒塔婆文字拡大
（W1）

墨書土器「牛」（７）

墨書土器「申」（８）

青磁皿（237）

平瓦（98）

序

遺跡の所在する岡山市の東郊一帯は、国道２号線・山陽新幹線・山陽本線・赤穂線など交通の動脈が幾重にも貫き、沿線は市内有数の商工業地帯として発展を遂げています。

また、宅地造成を中心とする開発も増加の一途をたどり、一戸建住宅の建設をはじめマンションなどの新築が盛んに行なわれています。このように、地域の発展や人口の大幅な増加に伴い、生活排水の増大が顕著となり、特に梅雨時期や台風シーズンの大雨に見舞われると、付近の用・排水路の機能が麻痺し、水田はもとより、住宅地にまでその影響が懸念されるようになりました。このため、地域住民の強い要望にこたえ、岡山県の湛水防除事業（東岡山地区）の一環として、排水機場の設置が計画されることになりました。これは、増水時に排水機場から送水管を通して湛水を百間川へ強制的に排水するものです。

岡山県教育委員会では、平成４年度に排水機場及び送水管埋設予定地内の遺跡確認調査を実施し、中世に比定される集落の一部が確認されました。この結果を受け、遺跡の保護・保存について関係当局と協議を行ないましたが、防災的な事業の性格や、設置場所が限定されることなどから、やむを得ず記録保存の措置を講ずる発掘調査の実施に踏み切ることになりました。

発掘調査は、平成５年度に二次にわたって実施しましたが、鎌倉時代を中心とする集落の一画が検出され、建物や井戸などのほか川に架けられた橋梁の一部も発見されました。一方、当時の暮らしぶりを示す出土遺物のなかには、備前焼のほかに遠く近畿地方で生産された瓦器をはじめ、中国製の陶磁器などもみられ、広範な地域との交易の実態を知る手がかりが得られました。本書には、発掘調査で得られた成果を収載しましたが、これらが、地域の歴史はもとより、ひいてはわが国の中世史の解明に役立つとすれば望外の喜びであります。

終わりに、発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の方々をはじめ、岡山県農林部、岡山地方振興局、建設省岡山河川工事事務所等関係各位からご指導・ご尽力を賜わりましたことを厚くお礼申し上げます。

平成７年３月

岡山県教育委員会

教育長　　森崎岩之助

例　　言

1．本書は、湛水防除事業東岡山地区の米田排水機場建設に伴い発掘調査を実施した、岡山市米田所在の米田（よねだ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、岡山県農林部の分任事業として、岡山県教育委員会が担当し、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

3．発掘調査は、排水機場建設部分を平成５年４月５日から11月26日まで、排水機場から百間川への吐き出し樋門・送水管部分を平成６年３月１日から同17日までの二次にわたって実施した。発掘面積は、あわせて2558㎡である。

4．発掘調査の実施にあたっては、岡山県文化財審議会委員　近藤義郎・水内昌康の両先生から現地指導ならびにご助言を賜わった。

5．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員　岡田　博・延堂　守が担当した。

6．発掘調査の実施や出土遺物の保管はもとより、洗浄・整理作業に際しても、百間川遺跡調査事務所スタッフの協力ならびに援助を受けた。

7．河道出土の人骨・獣骨については、京都大学霊長類研究所　茂原信生・獨協医科大学第一解剖学教室　櫻井秀雄両先生に同定を依頼し、玉稿を収載させて頂いた。出土木質遺体については、根岸宏明先生に依頼し、樹種の同定を行なった。

8．本書の作成・執筆は岡田　博が担当した。なお、出土遺物の実測図の作成については、伊原史子さん、遺物写真については、井上　弘氏の指導と援助を受けた。

9．出土遺物・実測図・写真類の記録は、すべて岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1．第１図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図（岡山北部・南部）をあわせて掲載したものである。第２図は、岡山市域図（１／2500）を浄写して縮小したものである。

2．掲載図に用いた北は、すべて磁北である。

3．掲載図の高度値は、海抜高である。

4．本書に掲載した遺構・遺物実測図についての名称・縮尺等は、百間川米田遺跡３（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74　1989年　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会）に極力準拠したが、版型がＢ－５版からＡ－４版となったため、必ずしも一致しない。河道以外の遺構の名称については、下記に示す呼称を用いて表記する。

　建物：ＳＢ、柱列：ＳＣ、溝：ＳＤ、井戸：ＳＥ、土壙：ＳＫ

5．本書に掲載した遺物の実測図の表記については、土器・瓦については、番号のみ付しその他のものについては下記の通り表記した。なお輸入陶磁器・小型の国産陶磁器については実測図の断面に網目、瓦・木製品・金属製品・土製品の断面には、斜線を入れた。

　土製品：Ｃ、石製品：Ｓ、金属製品：Ｍ、木製品：Ｗ

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境……1
第２章　調査の経緯……5
　第１節　調査に至る経過……5
　第２節　調査の経過……6
第３章　発掘調査の成果……9
　第１節　調査の概要……9
　第２節　一次調査（１～３区）の概要……15
　　１．河道……15
　　２．橋梁……40
　　３．掘立柱建物・柱穴列……43
　　４．井戸……45
　　５．溝・土壙……47
　第３節　４区の調査……50
第４章　結語……57
付載　自然科学分野における鑑定報告
付載１　米田遺跡（岡山県：鎌倉～室町時代）出土の人骨・犬骨……61
付載２　米田遺跡出土の獣骨……69
報告書抄録……vi

図　目　次

第１図　米田遺跡の位置と主要遺跡……1
第２図　米田遺跡周辺図と字名……9
第３図　発掘調査区配置図……10
第４図　１～３区古代遺構図・ＳＤ03・出土遺物……10
第５図　１～３区中世遺構図・ＳＤ01断面図……11
第６図　１～３区中世～近世河道・水田・出土遺物……12
第７図　土層断面図(1)１～３……13
第８図　土層断面図(2)４・５……14
第９図　河道出土遺物(1)白磁・須恵器……16
第10図　河道出土遺物(2)墨書・線刻土器……16
第11図　河道出土遺物(3)土師器……17
第12図　河道出土遺物(4)土師器……19
第13図　河道出土遺物(5)土師器・瓦……20
第14図　河道出土遺物(6)瓦……21
第15図　河道出土遺物(7)土師器……22
第16図　河道出土遺物(8)土師器……23
第17図　河道出土遺物(9)土師器……24
第18図　河道出土遺物(10)須恵器……25
第19図　河道出土遺物(11)亀山焼……26
第20図　河道出土遺物(12)東播系須恵器……27
第21図　河道出土遺物(13)瓦器……28
第22図　河道出土遺物(14)瓦質土器・常滑焼……29
第23図　河道出土遺物(15)備前焼……29
第24図　河道出土遺物(16)備前焼……30
第25図　河道出土遺物(17)白磁……31
第26図　河道出土遺物(18)青磁……32
第27図　河道出土遺物(19)国産陶器……32
第28図　河道出土遺物(20)土製円板・土錘……33
第29図　河道出土遺物(21)小型卒塔婆……34
第30図　河道出土遺物(22)木製品……35
第31図　河道出土遺物(23)木製品……36
第32図　河道出土遺物(24)木製品……37
第33図　河道出土遺物(25)石製品・鉄製品……39
第34図　橋梁……40
第35図　橋脚(1)……41
第36図　橋脚(2)……42
第37図　杭転用の櫂……43
第38図　３区河道南法面木材出土状態……43
第39図　掘立柱建物ＳＢ01・出土遺物……44

第40図　掘立柱建物ＳＢ02……44
第41図　柱列ＳＣ01～03・出土遺物……45
第42図　柱穴出土遺物……45
第43図　井戸ＳＥ01……46
第44図　井側転用材……46
第45図　ＳＥ01井筒……47
第46図　ＳＥ01出土遺物(1)……48
第47図　ＳＥ01出土遺物(2)……48
第48図　土壙実測図(1)……49
第49図　土壙実測図(2)ＳＫ04・出土遺物……50
第50図　土壙実測図(3)……51
第51図　土壙実測図(4)・出土遺物……52
第52図　１～４区縦断模式図……53
第53図　４区遺構図・ＳＣ04……53
第54図　４区東壁土層断面図……54

表　目　次

表１　土製品観察表……33
表２－(1)木製品観察表（河道出土木製品抄録）……38
－(2)木製品観察表（橋脚・櫂）……42
－(3)木製品観察表（ＳＥ01）……47

図版目次

巻首カラー
図版１－１　井戸ＳＥ01、井側と井筒
－２　１区河道中層の土器集中部
－３　３区土層断面５、貝層検出状態
図版２　出土遺物（小型卒塔婆・墨書土器・青磁皿・平瓦）

モノクロ
図版１－１　発掘調査着手前の遺跡
－２　１区低位部近世水田
－３　２区低位部近世水田
図版２－１　３区低位部近世水田
－２　１区微高地中央部遺構検出状況
－３　１区微高地西半部遺構検出状況
図版３－１　１区微高地東半部遺構検出状況
－２　１区微高地中央部ＳＢ01付近
－３　１区建物ＳＢ01
図版４－１　２区微高地遺構検出状況
－２　３区微高地遺構検出状況
－３　３区建物ＳＢ02
図版５－１　柱列ＳＣ01
－２　柱列ＳＣ02
図版５－３　溝ＳＤ01
図版６－１　土壙ＳＫ04
－２　土壙ＳＫ02
－３　土壙ＳＫ14
図版７－１　土壙ＳＫ20
－２　土壙ＳＫ17
－３　土壙ＳＫ12
図版８－１　井戸ＳＥ01上面
－２　井戸ＳＥ01井側上位部
－３　井戸ＳＥ01井側と井筒
図版９－１　井戸ＳＥ01井筒内部
－２　井戸ＳＥ01井側と横桟
－３　井戸ＳＥ01井筒に使用の曲物
図版10　井戸ＳＥ01井側材など
図版11－１　微高地上古代溝ＳＤ03
－２　土層断面４微高地部分
－３　土層断面３
図版12－１　土層断面２

報告書抄録

ふりがな	よねだいせき
書名	米田遺跡
副書名	米田排水機場建設（湛水防除事業東岡山地区）に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	101
編著者名	岡田　博・茂原信生・櫻井秀雄
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL　086-224-2111
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
よねだいせき 米田遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 よねだ 米田35番1 ほか	201		34度 40分 19秒	133度 59分 22秒	1993·04·05～ 1994·03·17	2,558	湛水防除事業、排水機場建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米田遺跡	水田か	平安時代	溝・河道	緑釉陶器	
	集落 河道	鎌倉時代 ～ 室町時代 （安土桃山時代）	橋梁・掘立柱建物・井戸・溝・土壙・柱穴群・貝塚	土師器・須恵器・備前焼・瓦器・瓦・輸入陶磁器・木製品・砥石・土錘・人骨・獣骨・鉄器・鉄滓・貝・桃核・宋銭	土器の中に、「牛」・「申」などの墨書土器。木製品の中に小型卒塔婆があり、墨書が残る。
	河道 水田	江戸時代 ～ 近代	溝	備前焼・陶器・寛永通宝・キセル・鉄釘・瓦	

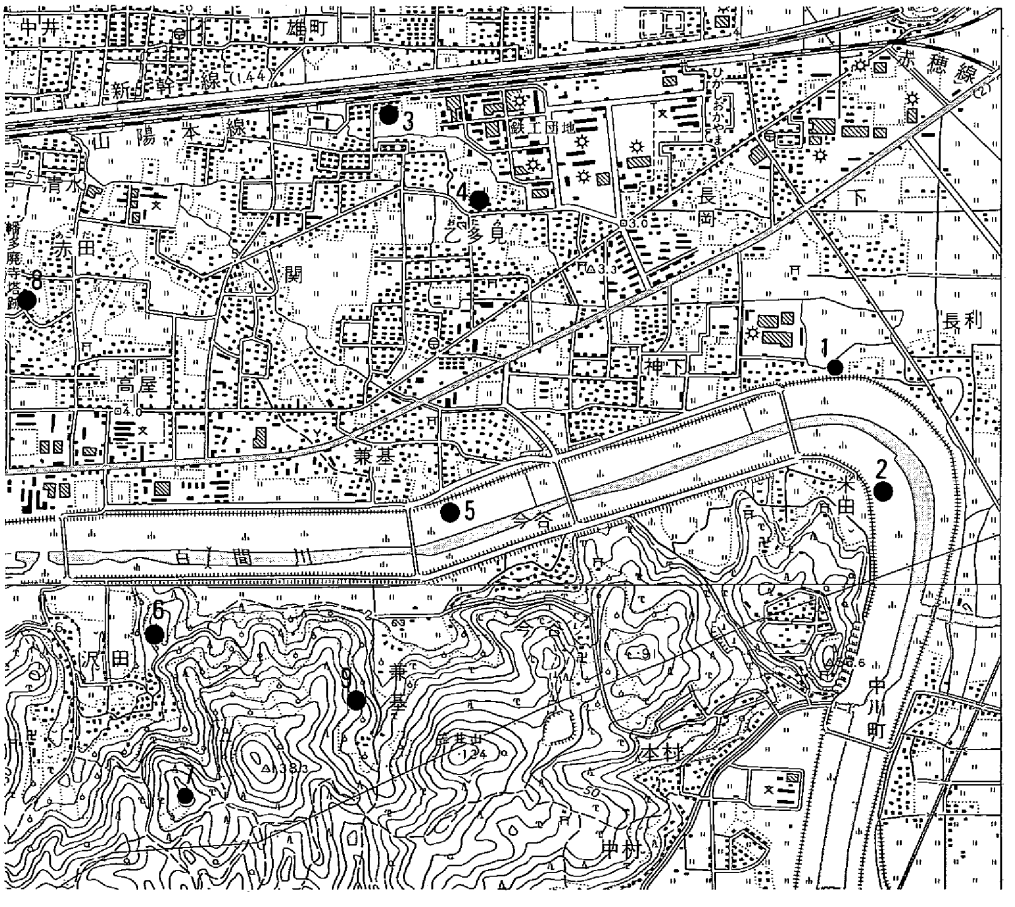
－２　土層断面４
－３　１区河道完掘状況と橋梁
図版13－１　橋梁遺構
－２　橋脚引き抜き作業
図版13－３　橋脚細部加工痕
図版14－１　橋脚水洗作業
－２　河道中層遺物出土状態
－３　河道中層遺物出土状態
図版15－１　３区河道掘下げ作業
－２　３区河道木材出土状態
－３　２区河道検出櫂転用杭
図版16－１　河道完掘状況
－２　３区河道に広がる貝塚
－３　３区土層断面５
図版17－１　２区河道内貝塚
－２　３区河道内貝塚
－３　貝塚上面
図版18－１　４区全景
－２　４区微高地部分と堤防断面
－３　４区微高地遺構検出状況
図版19－１　４区旧堤防南の石垣
－２　４区石垣と枕胴木
－３　４区低位部下層溝状たわみ
図版20　河道出土木製品ほか
図版21　河道出土遺物（石製品・墨書土器・瓦ほか）
図版22　河道出土遺物（土師器）
図版23　河道出土遺物（須恵器・陶磁器）
図版24　河道出土遺物（備前焼・土師器・瓦器）

第１章　地理的・歴史的環境

旭川の放水路として、寛文九年（1669年）から貞享４年（1687年）にかけて造られた百間川は、遺跡の南側で、流路を大きく南に曲折する。米田遺跡は、この曲折部の低位部や、すぐ南側の丘陵部分を含む広大な複合遺跡である。

旭川の東岸一帯に広がる旭東平野は、旭川流域の末端に位置し、しかも流域の最大の沖積平野といえる。平野の北側には竜の口丘陵、南側には操山丘陵が東西に伸び、高所にはそれぞれ湯迫車塚古墳（註１）や金蔵山古墳（註２）など有数の前期古墳の存在が知られている。南東方には、一際小高い芥子山を中心とする山塊が迫っており、さらに北東方には、北側から山王山丘陵が派生してくるが、平野の広がりを遮るものではない。この北東部の狭隘な丘陵の間を抜けると、かつての山陽道が存在した砂川流域の盆地に達する。この盆地の西側には、周湟を巡らす県下有数の前方後円墳、両宮山古墳（註３）が存在し、付近には備前国分僧寺・尼寺（註４）をはじめ、駅家遺跡と推定される馬屋遺跡（註５）が知られている。

旭東平野は、旭川から流れこむ大量の土砂によって肥沃な可耕地が形成され、古くは、縄文時代後



１．米田遺跡　２．百間川米田遺跡　３．雄町遺跡　４．乙多見遺跡　５．百間川兼基・今谷遺跡
６．沢田大塚古墳　７．金蔵山古墳　８．幡多廃寺　９．兼基遺跡

第１図　米田遺跡の位置と主要遺跡（1/25,000；岡山北部・南部）

期・晩期にさかのぼって人々の生活が営まれ始め、その形跡は長年にわたって続けられてきた百間川遺跡群の発掘調査によっても知られている。

旭川の支流や旧河道は、平野部をほぼ北西から南東方向に流れ、その周辺には、稲作に適した低位部が形成された。本格的に稲作を中心とする農耕が開始された弥生時代前期からは、微高地上には比較的規模の大きい集落も形成され、灌漑用水としての溝の開削が始まる。代表的な遺跡としては、百間川原尾島遺跡（註６）、百間川沢田遺跡（註７）、百間川米田遺跡（註８）雄町遺跡（註９）などがあり、とりわけ百間川沢田遺跡では縄文晩期の多くの知見が得られ、しかも弥生前期の水田も確認されている。さらに、前期中葉の環濠集落の一部が確認され、県内では初めての確実な検出例として注目されている。

続く中期になると、集落の規模も格段に大きくなり、拠点となる集落が現われてくる。雄町遺跡の南に位置する乙多見遺跡（註10）や、百間川兼基遺跡・今谷遺跡（註11）がその代表的な遺跡である。後者では、20数棟もの掘立柱建物群が検出され、付近からは多量のガラス滓が出土している。この遺跡の南の操山丘陵斜面からは３口もの銅鐸が出土している、兼基遺跡（註12）が知られている。後期になると、集落遺跡の数は一層増加するがそれらが占地する微高地の間の低位部では、水田開発が積極的に行なわれるようになり、灌漑用水として使用された大規模な溝が多数発見されている。百間川原尾島遺跡はこの時期の代表的な遺跡で、多数の住居や溝・井戸などが検出されている。後期後半に、水田の大半が埋没する大規模な洪水に見舞われ、集落とともに壊滅的な打撃を受けたようである。大量の洪水砂が旭川から流入・埋積したのである。この砂の堆積のおかげで、われわれは、水田の畦畔や水路あるいは、人の足跡まで鮮明に検出することができたのである。

古墳時代では、考古学的な知見は丘陵部に築造された古墳に視点が置かれやすいが、百間川原尾島遺跡では、住居のほかに運河のような河道から多数の木製品や、護岸遺構などが発見されており、先の大洪水という災害から、奇跡的ともいうべき復興のエネルギーが生み出されたことが推察される。出土木製品の中には田舟もみられ、積極的な湿田の開発が行なわれたことを示唆しているかもしれない。

古墳の築造は、周辺の丘陵部すなわち竜の口・操山のふたつの丘陵に集中する。前期古墳としては先述の湯迫車塚古墳や金蔵山古墳が有名である。後期古墳もやはりこれらの丘陵上やその周辺や谷部に、横穴式石室を内部主体とする群集墳が多数築造されている。しかし一方で、従来その存在がまったく予測されていなかった平野部にも古墳の築造が行なわれていたことがわかり（註13）、今後の大きな研究課題が提起された成果といえる。

飛鳥・奈良時代を代表する遺跡は、寺院跡であろう。とりわけ発掘調査が行なわれて成果があったふたつの寺院すなわち、賞田廃寺（註14）・幡多廃寺（註15）は当時の有力豪族の存在を如実に示しているといえる。

一方、備前国府はこの旭東平野に置かれていたといわれ、上道郷の中心に「国長」・「国府市場」などの地名が残され、至近にその存在を示唆するものであるが、国庁などの中心部の特定や、施設の全容の解明には至っていない。（註16）

百間川米田遺跡では、総柱の倉庫を含む掘立柱建物群の発見や、「上三宅」の墨書土器や「官」の刻印をもつ須恵器に加え、官人が凧用した銅製の帯金具の出土は、官衙的な性格の強い、倉庫群を備えた国府の「津」のような施設であった可能性を強く示唆している。

また、百間川原尾島遺跡では、「人形」や「斎串」などが溝から出土し、公的な「祓」が執り行なわれた可能性も指摘されている。

古代の文献資料のひとつ『大安寺伽藍縁起弁資財帳』（天平19年―747年）の「備前国水田」の記載があり、「上道郡五十町　大邑良葦原東山　西石間江　南海　北山」（註18）と記されている。この「石間」を現在の「岩間」（いわま）に比定できるとする有力な考察もあり、米田遺跡は、芥子山山麓にあった大安寺領と接近していたようである。（註19）

平安時代以降は、まとまりのある遺跡の存在は明確ではないが、奈良時代に引き続き百間川原尾島遺跡や百間川長谷遺跡（註20）・百間川米田遺跡などが知られる。いずれも瓦や土師器・須恵器のほか緑釉陶器の出土などがある。

中世には、百間川米田遺跡をはじめ百間川原尾島遺跡などが知られ、前者では丘陵上から低位部にかけての大規模な集落や、船舶も通れる運河を想起させる堀状の大溝が発見されている。後者では、やはり集落遺跡であるが、輸入陶磁器や和鏡が副葬された墓が検出されており農業や漁業はもとより、各地との交易を支える瀬戸内海を中心とした海運を基盤とした集落の発展や、中世世界の広がりが明らかにされつつある。

註

（註１）近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年。

（註２）西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」　倉敷考古館　1959年。

（註３）西川　宏「両宮山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986年。

（註４）伊藤　晃「備前―国府」『新修国分寺の研究』第４巻　山陰道と山陽道　吉川弘文館　1986年。

（註５）①椿　真治「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告20』　岡山県教育委員会　1990年。
②横山　定「馬屋遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査　岡山県埋蔵文化財報告22』1992年。

（註６）①江見正己ほか「百間川原尾島遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』　岡山県教育委員会　1980年。
②正岡睦夫・高畑知功・岡田　博・平井泰男・島崎　東・光永真一ほか「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』　岡山県教育委員会　1984年。
③柳瀬昭彦・平井　勝・江見正己・宇垣匡雅ほか「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88』　岡山県教育委員会　1994年。

（註７）①岡田　博・浅倉秀昭・二宮治夫・中野雅美ほか「百間川沢田遺跡２・長谷遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　岡山県教育委員会　1985年。
②井上　弘・柳瀬昭彦・浅倉秀昭・岡本寛久・江見正己ほか「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　岡山県教育委員会　1993年。

（註８）①松本和男・福田正継ほか「百間川当麻遺跡１ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46』岡山県教育委員会　1981年。
②井上　弘・岡田　博・二宮治夫・平井泰男・光永真一「百間川当麻遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52』　岡山県教育委員会　1982年。

③井上　弘・柳瀬昭彦・平井　勝・岡本寛久・平井泰男ほか「百間川米田遺跡（旧当麻遺跡）３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74』　岡山県教育委員会　1989年。

（註９）①高橋　護・正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１』　岡山県教育委員会　1972年。

②高橋　護「雄町遺跡出土の銅鐸」『岡山県立博物館だより25号』　岡山県立博物館　1986年。

（註10）正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴なう出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告３』岡山県教育委員会　1973年。

（註11）正岡睦夫・下澤公明・高畑知功・内藤善史ほか「百間川兼基遺跡１・今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』　岡山県教育委員会　1982年。

（註12）鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』　東京堂出版　1961年。

（註13）桑田俊明「中井・南三反田遺跡（備前国府推定地）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告92』岡山県教育委員会　1994年。

（註14）出宮徳尚・伊藤　晃・水内昌康「賞田廃寺発掘調査報告」　岡山市教育委員会　1971年。

（註15）出宮徳尚・根木　修ほか「幡多廃寺発掘調査報告」岡山市遺跡調査団　1975年。

（註16）①高橋　護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告１』　岡山県教育委員会　1971年。

②岡山市教育委員会『南古市場遺跡現地説明会資料』1992年。

（註17）岡本寛久「原尾島遺跡低水路調査区」『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査～岡山県埋蔵文化財報告19』　岡山県教育委員会　1989年。

（註18）「岡山県史　編年資料」第19巻岡山県　1988年。

（註19）巖津政右衛門ほか「岡山市史（古代編）」岡山市役所　1962年。

（註20）（註７）①文献所収。

第2章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

東岡山地区湛水防除事業の一環として岡山市米田地内に排水機場建設が計画された。これは、周辺や旭東平野全体で都市化が進行するにともない、梅雨時期や台風シーズンには、水田・畑は元より、宅地にまで多量の水が流入する危険性が高まってきたためである。大量に流入する水をいったん排水機場に集め、そこから百間川堤防の下部に排水管を通し百間川の低水路に強制的に排水しようというものである。

建設予定地は、米田橋の下流側、百間川が南方に流れを変換する部分の北側で、そこは弥生時代から近世にかけての複合遺跡として知られる、米田遺跡の北端にあたる。長年にわたって続けられてきた百間川改修に伴う発掘調査の成果（註1）によって、遺構の存在が十分に予測されたため、県文化課により、1992年（平成4年）9月28日から30日にかけて確認調査が行なわれた。（註2）

堤防北側の排水機場建設部分を1区（本調査の1～3区）、堤防の南側すなわち河川敷内を2区（本調査の4区南）としてトレンチ調査が実施された。まず1区では、おもに南側に設定されたトレンチで柱穴が検出され、北側では水田層が確認された。水田包含層からの出土遺物には、土師器・須恵器・備前焼が得られた。2区では、柱穴など集落の存在に直接結びつく遺構は確認されず、河道ないし氾濫原であったのではないかと推定された。したがって、北側の1区に存在が予測される集落の南の範囲は、確認調査が実施できなかった百間川の堤防下部に存在するのではないかと推定された。

以上のように、排水機場の本体建設予定地部分では遺構の存在が明らかとなり、埋蔵文化財の保護・保存の立場から原状保存が強く望まれたが、施設の性格上建設地点が限られ、しかも施設の有無が地域住民の生活や財産の保全、ひいては人命にまで関わることから、止むなく記録保存の措置が執られることとなった。

記録保存のための発掘調査は、1993年（平成5年）度に岡山県古代吉備文化財センターによって実施することが決まり、まず排水機場本体部分、ついで冬季に百間川の堤防と市道の付け替え後、吐き出し樋門・送水管部分の順で発掘を行なうこととなった。

調査体制

岡山県教育委員会

教 育 長	森崎岩之助		
教育次長	黒崎一秀	教育次長	岸本憲二

岡山県教育庁文化課

課　　長	渡辺淳平	課長代理	松井新一
課長補佐	高畑知功	主　　査	時長　勇
（埋蔵文化財係長）			
文化財保護主事	亀山行雄（確認調査担当）		

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	横山常實	次　　長	葛原克人
総務課長	北原　求	調査第一課長	正岡睦夫
総務課長補佐	小西親男	調査第一課長補佐	岡田　博（調査担当）
主　　査	石井　茂	文化財保護主事	延堂　守（調査担当）

第2節　調査の経過

発掘調査は、前年度の計画に基づき予定通り、1993年4月から岡田・延堂の2名の調査員の担当で開始した。確認調査の結果により、排水機場本体部分の微高地部分では、柱穴が検出されており、当然中世の集落の存在が予測された。発掘区の北側では、水田が検出されているが、その下層の状況は不明であり、本調査の課題となった。本調査では、市道・堤防部分の発掘調査も予定されており、その際当然のことながら市道の付け替えが必要で、まず排水機場部分の南側部分を先行して発掘調査を完了させ、その部分が利用されることとなった。排水機場本体部分の調査を一次調査、堤防・市道部分の調査を二次調査とし、前者の調査区では、発掘調査に伴う排出土の置場等の関係から1～3区と分割したが（第4図）、これは調査の順序をほぼ示している。

一次調査は、1区から着手した。これは、先に述べたように堤防下部の調査を行なう際、市道の付け替えスペースを確保するためである。調査は、まず重機により水田耕作土を除去し、2区から3区にかけての場所に移動した。表土を取り去った後、すでに遺構の存在が確認されている微高地部分の清掃、遺構検出作業に移行した。微高地上は、明るい灰黄色を呈した微砂層が、安定した遺構面を形成しており、比較的容易に褐灰色や黄灰色を呈した柱穴や土壙・井戸・溝などを検出することができた。また、1区の西側北半部では、近世の水田に続き下層から河道の存在が確かめられ、さらに東方に延びることが予測された。土層を精査するための側溝を掘り下げていたある日、先を尖らせた細長い木が出土した。よく見ると墨書があり、「南無大慈……」と書かれているではないか。これが小型卒塔婆の発見である。湿潤な細砂層からの出土で木の残りも良く、河道の全体を発掘すればかなりの木製品が出土するのではないかと考えられた。一方、発掘調査区の北半部にこのような大規模な河道が存在し、発掘するとなると、当面は2・3区に排出土を置けるものの、早晩土置場に困るようになることが予測され、この問題を解決するには、ひとまず南側の微高地部分の調査を完了し、そこへ河道から大量に掘り出される土を置くしかないと判断せざるをえなかった。微高地上の遺構群と同時に存在した河道と一緒に写真が撮れない、ある中世の一時期の生活空間を再現できないという欠点が生じるが、止むを得ない措置であった。

6月からは2区、8月からは3区と調査範囲を広げ、その都度重機により排出土の処理・移動を行なった。2区では、近世水田の調査に続き狭い範囲の微高地部分と河道の調査を実施した。北端では、水田より古い近世の川の一部も検出され、人工の川百間川の工事とそれに伴う堤防造成時期との関わりに注意された。また、河道の下位からは、夥しいハイガイから形成される貝塚をはじめ、多量の土器・獣骨・木製品などが出土したが、なかでも人骨（頭蓋骨）が出土した時には、一同仰天した。

9月からは、1区の井戸を除く中世遺構の実測・写真撮影などの作業が終了した、微高地の一部掘り下げを行い、古代、平安時代の溝などが存在することを確認した。10月には、1区の微高地で残し

ていた井戸（ＳＥ01）の精査を行い、稀にみる保存の良い木組みの井側を検出し、井底の井筒に使われた曲物や、井側の用材加工に中世の木工技術の粋を目のあたりにすることができた。井底から渾々と湧きでる清水は一見透明であったが、いわゆる「カナケ」で金属臭が抜けず、数日後には赤褐色に変色した。後に、井側の板材や木製品の洗浄に際しては、恵みの水となった。

10月から11月にかけては、３区の微高地部分以外は１区から３区を通しての河道の全掘作業に移行し、完掘状況の撮影等記録保存に腐心した。貝塚はもとより、杭や流木などの多くは残りが良く、河道が当時の生活に密着した存在であったことが、一層鮮明となった。

11月には、ほぼ河道を完掘したが、１区に気掛かりな太めの杭が４本残されていた。筆者が、周囲をスコップで80cmばかり掘り下げてみたもののますます太くなるばかりで、蹴飛ばしても揺さ振ってもびくともしない。ついに翌日、作業員持参の１トン用のチェインブロックを組み立てて、実に５人がかりでようやく引き抜くことができた。丸一日かけて引き揚げた４本の橋脚（アカマツ）をまじまじと見つめながら、調査担当者・作業員ただただ驚くばかりであった。「魚雷みたいじゃ。」と言った戦中派作業員の実感のこもった言葉は、妙に説得力があった。実測を担当した筆者は、魚市場に横たえられた「本マグロ」を連想したほどの巨大さであった。

11月26日、１～３区の調査のすべてを完了、発掘器材は、二次調査再開まで百間川事務所で保管することとし移送した。また、橋脚は１トントラックで二往復して、岡山県古代吉備文化財センター新収蔵庫の水槽に６人がかりで運び込んだ。ほかの出土遺物は、二次調査再開までの期間に洗浄作業を行なうため、百間川事務所で保管することとなった。

年明け早々に予定されていた二次調査の実施は、堤防部分の切断や市道の付け替えが大幅に遅れたため、結局３月１日から開始の運びとなった。この４区は１～３区の排水機場本体部分から吐き出し樋門を経て送水管が敷設される場所である。現堤防の下部で、微高地すなわち中世集落の端部が明らかになるものと予測していたが、市道直下の土層断面に現れた近世の百間川旧堤防に続き、石垣なども検出されるにおよび、百間川の中に延びていた微高地上面が削平され、その土でもって旧堤防が築かれていたことがわかった。堤防の真下では、中世遺構検出面の上に30～40cmの厚さの包含層の存在が確かめられ、しかも旧堤防の断面には多量の土師器などの中世土器片が含まれているのであった。つまり、１～３区の遺構面は30～40cm削平されていたことが判明したのである。したがって、確認調査が行なわれた４区の南方部分の一帯では、中世の包含層はもとより、遺構面を形成する基盤層そのものも堤防造成に使われた可能性がきわめて高くなったことが明らかになった。おそらく、現在低水路となっている部分に当時の河道が存在していた可能性があり、その対岸に百間川米田遺跡が存在することが推察されることになる。これらの諸問題については、現在もわが岡山県古代吉備文化財センターによって発掘調査が続けられており、新知見の増加や今までに積み重ねられた発掘成果の再検討・再評価によって、米田遺跡の全体像にいっそう接近することが可能となろう。

発掘調査の実施にあたっては、岡山地方振興局耕地二課　沼本吉男・山上裕愛氏、地元の土木委員　斉藤　操氏、とくに４区の発掘調査では、建設省岡山河川工事事務所をはじめ、元川建設　中浜工事課長ほかのご協力やご助力を賜わった。記して深甚の謝意を表する次第である。また、近所にお住まいの近藤義郎先生は度々来跡され、作業員・調査担当者を励ますのみならず色々ご教示を賜わった。厚くお礼申し上げる次第である。

最後に、発掘作業に参加して頂いた作業員方々の中には、かなり遠隔地からの通勤を強いた方々も

多かった。また地元の作業員の方々には、台風来襲に備えて夜半排水ポンプを作動させたり、早朝より監視して頂くなど献身的なご苦労をかけた。調査担当者の印象に残る発掘調査であったことを書き加え、深甚の謝意を表する次第である。（岡田・延堂）

発掘作業員（順不同）

井上正志・黒田義孝・櫻井　勇・高畑　敏・高畑文彦・七村　一・米田純二・根岸宏明・尾西和美・黒田江美・中谷佐与子・藤田光子・野口恒子・林南津子・西田八重子・林　里美・片山幸子・元成美紀子

調査日誌抄

1993年４月　• 発掘調査準備。重機により１区の表土除去作業開始。12日、器材搬入。作業小屋、テントなど設営。発掘調査開始。

５月　• １区低位部近世水田検出作業。微高地上中世遺構群検出作業。２区重機により表土除去。

６月　• ２区発掘調査開始。北部近世水田検出作業。１～２区微高地上中世遺構群検出作業。

７月　• １～２区微高地中世遺構検出作業。２区河道掘り下げ。３区重機により表土除去。

８月　• １区微高地精査。２区河道掘り下げ作業。３区中世遺構検出作業。

９月　• ９月４日、台風13号による豪雨のため発掘現場水没。１区微高地精査。２区河道掘り下げ作業。３区近世水田・中世遺構検出作業。

10月　• １区河道掘り下げ作業。井戸精査完了。２区中世～近世河道掘り下げ。３区遺構検出作業。山陽新聞取材、清水玲子記者「700年の時超え水への思い深く」の見出しで、朝刊に取り上げられる。

11月　• １区橋梁遺構精査。２・３区河道完掘。11月26日、１～３区全調査完了。器材撤収。遺物運搬。

1993年11月27日～1994年２月28日

• 遺物洗浄、注記、復元作業。図面・写真整理作業。

1994年３月　• ３月１日、４区発掘調査開始。発掘器材搬入。微高地部分中世遺構検出作業。17日、調査完了。器材撤収。18～31日、遺物整理台帳作成。写真・図面整理。

註

（註１）米田遺跡については、前章註８に掲げた３冊の報告書が刊行されている。また、普及・啓蒙用の刊行物に「百間川の遺跡群」（岡山県古代吉備文化財センター　1989年）がある。

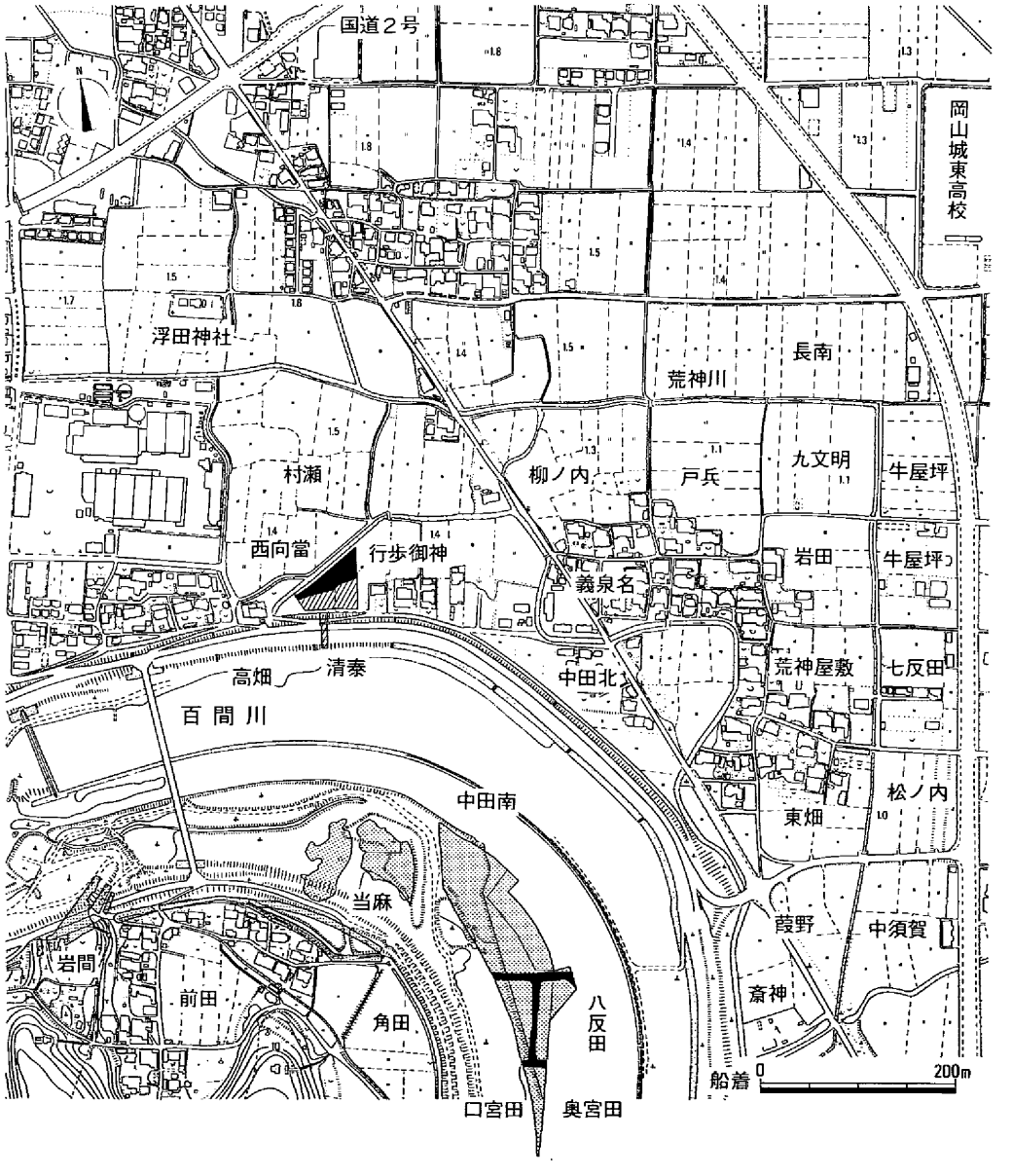
（註２）亀山行雄「米田遺跡発掘調査概要～米田排水機場建設に伴う埋蔵文化財確認調査」　岡山県教育委員会　1992年。

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の概要

遺跡地の北方は「竜の口丘陵」を望むことができ、また東方の芥子山山塊も比較的間近に見える。南方の操山山塊は、百間川の左岸堤防によって視野を遮られ、丘陵部分のほとんどが河川改修工事によって失われてはいるが、米田遺跡の全貌を見渡すことはできない。

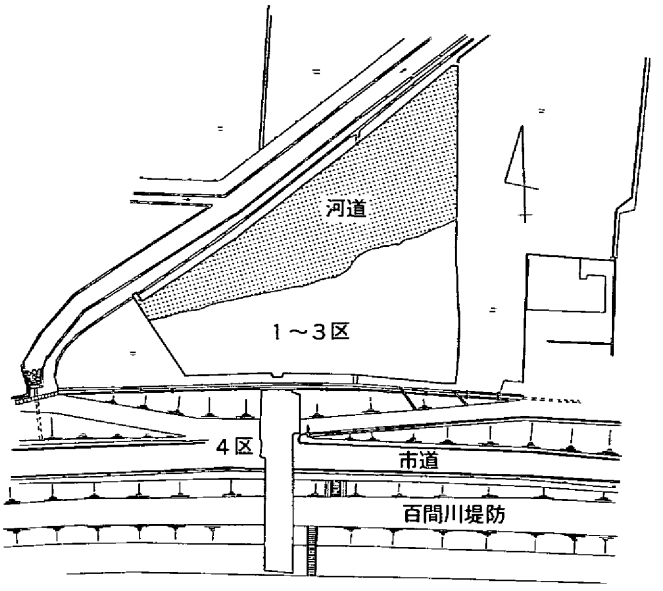
遺跡の北側には、西方から流れこむ排水路が合流して北東方に向かう。この水路は、古地形にも見られる小川の流路がそのまま踏襲されているようであり、後に触れる河道も規模こそ異なるものの、方向はほぼ同一の傾向がある。そして、現在の集落の北側「柳ノ内」・「戸兵」・「牛屋坪」・「七反田」を迂回する旧河道の痕跡と見ることができる。



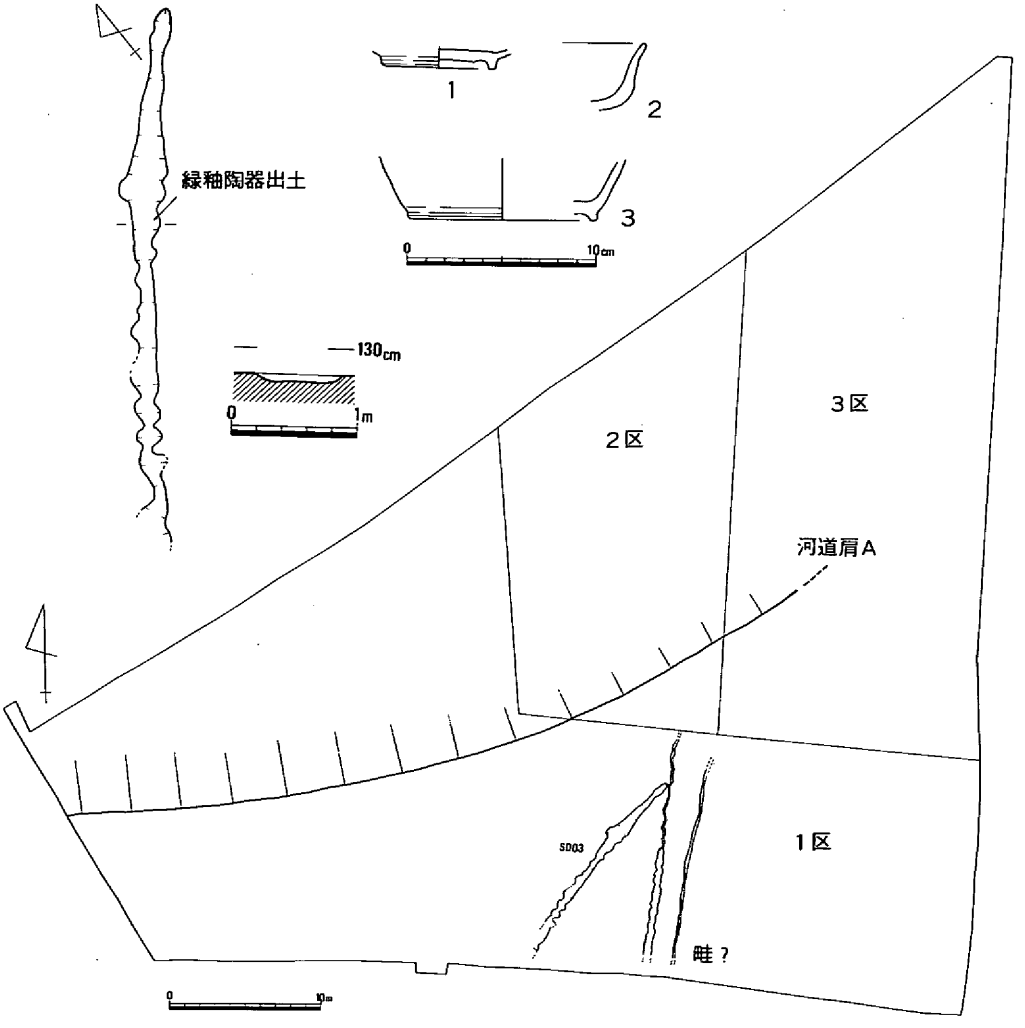
第２図　米田遺跡周辺図と字名
（米田遺跡；斜線，網目は百間川米田遺跡既掘区域，黒塗りは河道・溝；1/7,500）

遺跡の立地する水田は、近世以降比較的平坦な地形を呈しており、本格的な発掘着手前の重機による表土除去の時点で柱穴や土壙の平面形が現われるほど、遺構検出面までは浅い。水田耕作土の上面で海抜1.4m、遺構検出面では1.2mを測りほぼ平坦である。この遺構検出面は、明灰黄色微砂層の２層から成り、さらにその下層の明黄色土層とともに中世の生活基盤層を形成している。

しかし、後に４区の調査で明らかになるように、この中世遺構面は、百間川の築造・造成あるいは、それに伴う堤防の築成のために30～40cmの削平を受けていることがわかり、本来は、百間川米田遺



第３図　発掘調査区配置図（1/1,500）

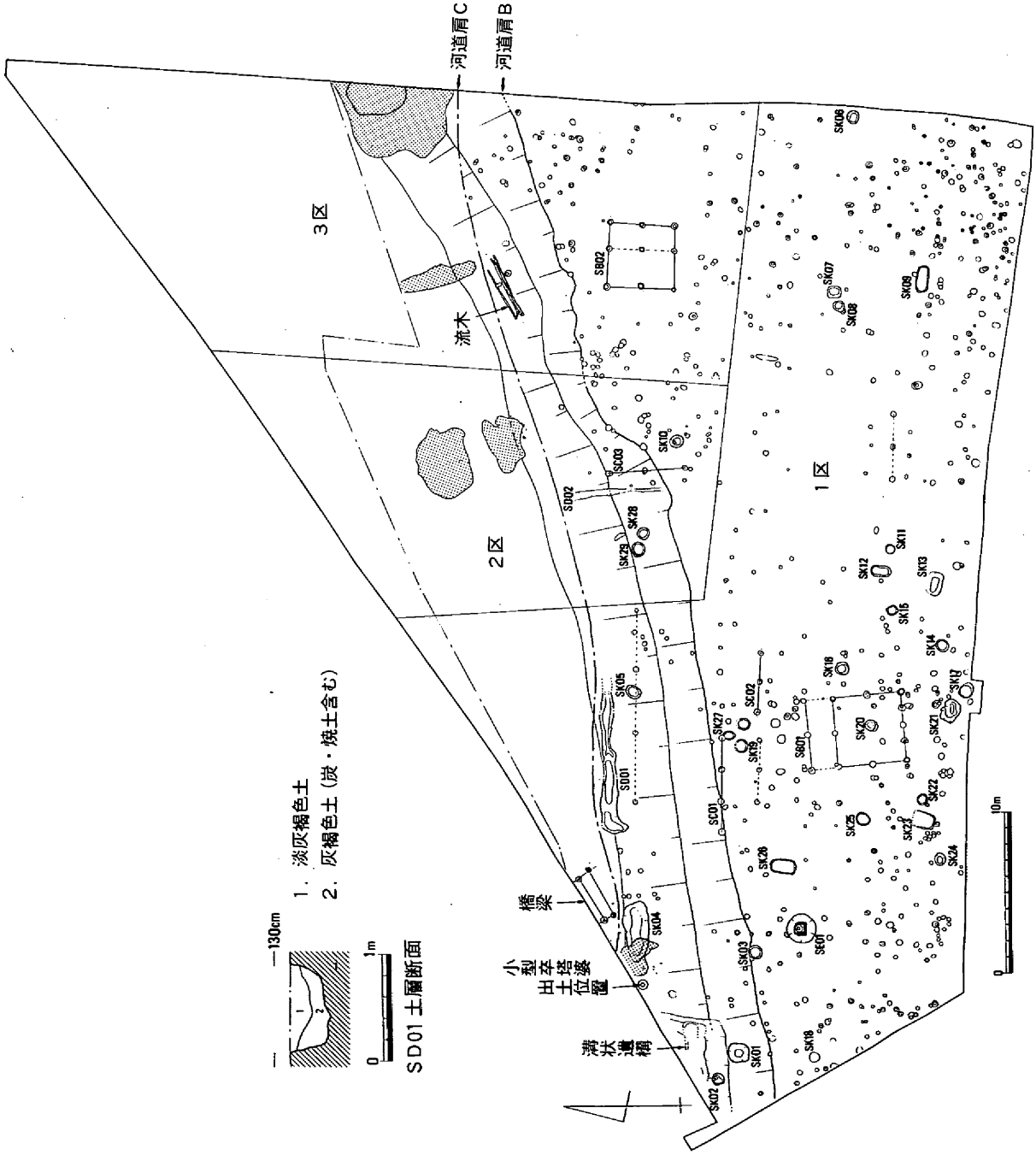


第４図　１～３区古代遺構図・ＳＤ03・出土遺物（1/500・1/200・1/4）

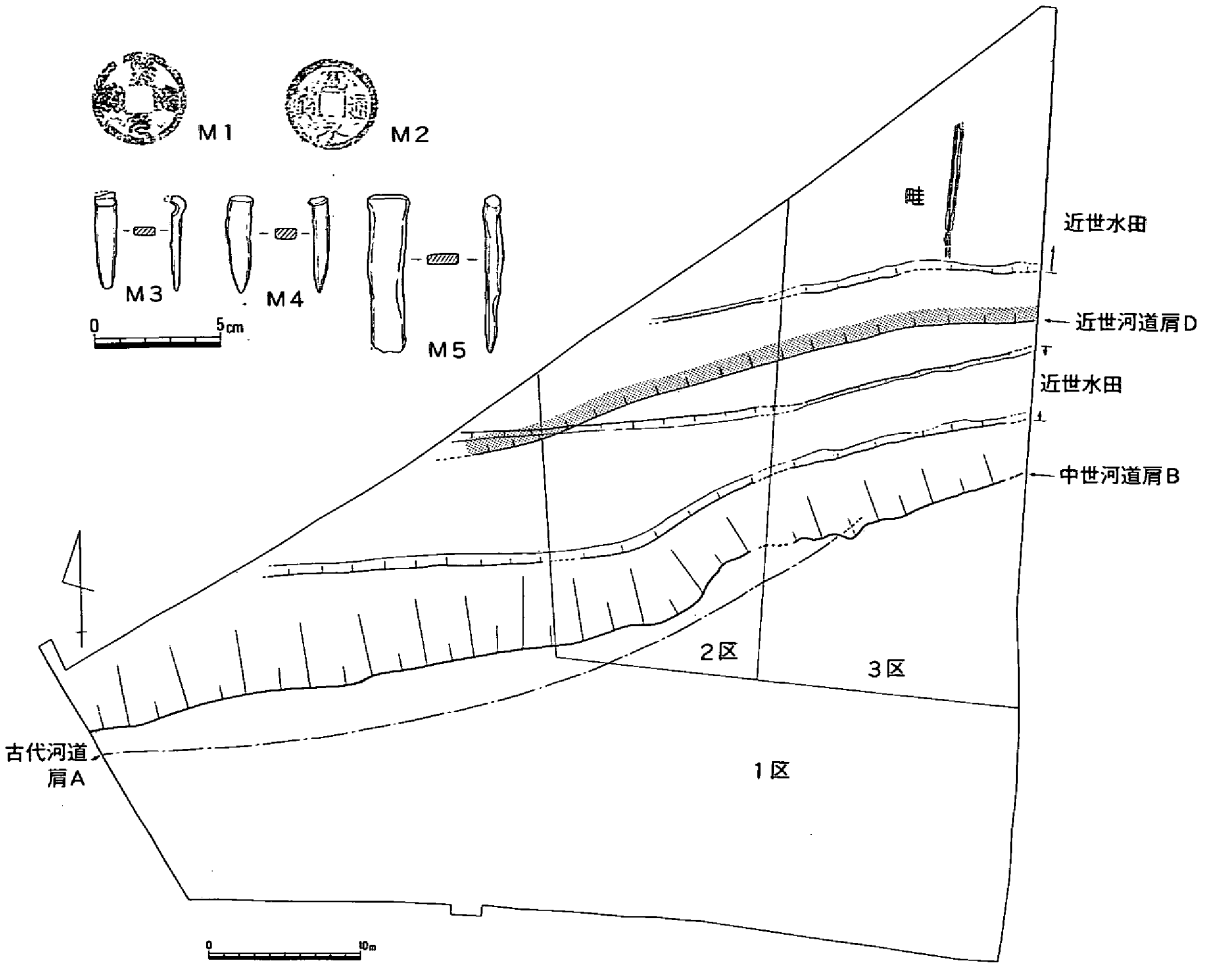
跡の遺構面より高位にあったことが推定できる。

1～3区の基本的な層位は、第7・8図に掲げるように、ほぼ水平堆積を示す沖積作用によって形成された微高地に遺跡は存在する。そして、古代以前の湿地状の地形から、古代・中世・近世へと変遷してきた足跡をたどることができる。土層断面2では、微高地部分の深部でかなり大きな流木が出土しており、もともとは巨大な旧河道が存在していたようである。

古代の地形は、第4図や第7・8図に示すように河道肩Aから北に河道が存在する。1区では、微高地上の中世遺構の記録採取作業を終えた後、SD03と畦あるいは、細い道状の高まりを検出した。前者からは、1の緑釉陶器が出土しており10世紀前半、平安時代に比定される。溝の性格は明らかではないが、農業生産に関わる遺構の可能性がある。さらに、1区微高地を中心に掘り下げを行なったが、遺物はきわめて少量で土師器細片にとどまる。これらの中には、丹塗りの杯片もあり、奈良～平安時代の集落に近かったことが考えられる。2・3は、近世水田掘り下げ中に出土したもので、前者



第5図　1～3区中世遺構図・SD01断面図（網目は貝塚；1/400・1/60）



第6図　1～3区中世～近世河道・水田・出土遺物 (1/500・1/2・1/3)

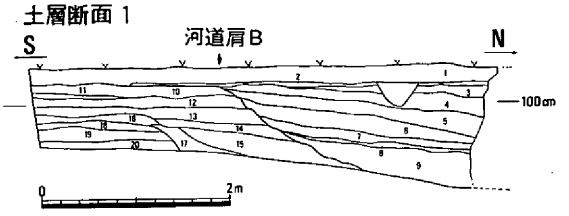
は丹塗りの土師器杯、後者は須恵器杯でいずれも細片である。

遺跡の中心をなす中世の遺構群は、多数の柱穴や掘立柱建物・溝・井戸・土壙などが微高地部分の全面で検出された。そして微高地の北側には、古代から徐々に北側に迫り出した河道が存在する。

微高地部分の平面空間は、大きくふたつの画期があり、土質・土色の違いが明瞭で識別が容易な河道肩Ｂと、遺構群の広がりと断面観察によって確かめられた河道肩Ｃに居住空間が制約されている。河道肩Ｂの時期は、ＳＤ01やＳＫ04などの遺構出土の遺物と、河道下層の出土遺物などによってほぼ、12世紀末から13世紀前半に限定される。したがって、河道肩Ｃはそれ以降すなわち13世紀中ごろから14世紀前半にかけて存在したことが推定される。この時期に、橋梁の架設が行なわれ、人々の往来に供したことは明らかであろう。これらの河道肩は、人工的に造り出されたものではなく、自然に形成されたものであろう。

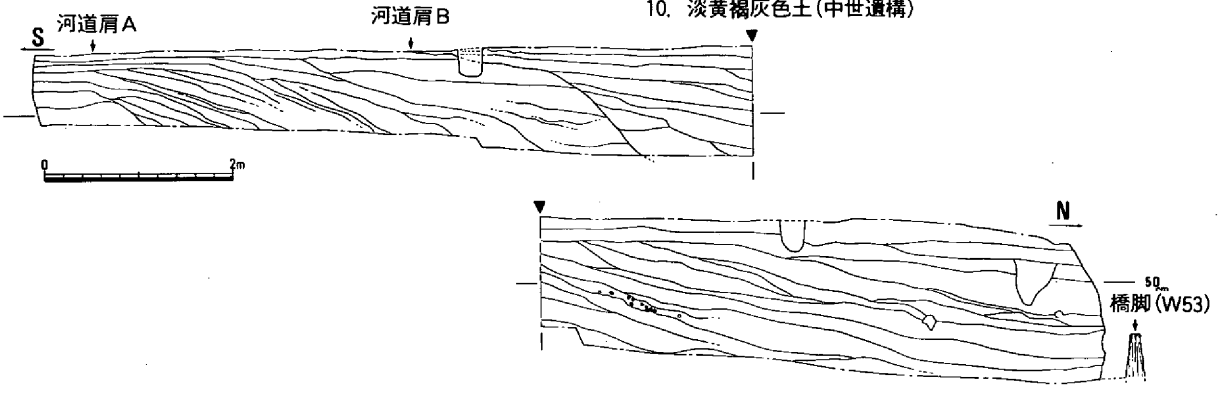
15世紀以降、中世末期から近世にかけての出土遺物の大半は１～３区の北側に集中する。微高地部分には、この時期の遺構はまったく存在していない。第６図に掲げるように、河道肩Ｃにつぐ河道肩Ｄが存在するが、微高地からはかなり離れ、しかも第８図土層断面４に示すように幅が狭くなる。この河道の出土遺物の中には、唐津の陶器や備前焼が含まれ、ほぼ17世紀中ごろには完全に埋没してしまったようである。その後、河道の方向に平行するように帯状の水田が形成される。水田間には幅

土層断面１

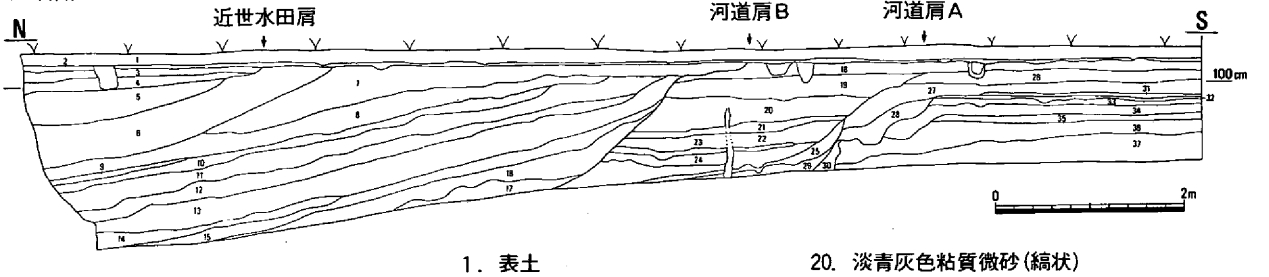


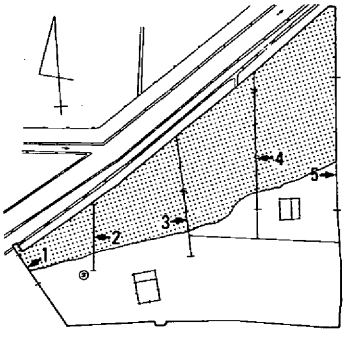
1. 表土(耕作土)
2. 淡灰色土
3. 淡灰褐色土(包含層)
4. 淡灰黄色細砂
5. 灰黄色土(褐色)
6. 淡黄褐灰色土
7. 黄褐灰色砂質土
8. 黒灰色細砂
9. 淡青灰色細・微砂～灰色微砂(縞状堆積)
10. 淡黄褐灰色土(中世遺構)
11. 明灰黄色土(古代水田層)
12. 淡灰黄褐色土
13. 灰褐色土
14. 灰色土
15. 暗灰色微砂
16. 灰黒褐色土(粘質土)
17. 褐灰～灰青色微砂粘土
18. 暗褐灰色土(砂質)
19. 黒灰粘土
20. 黒灰色微砂粘土(暗)

土層断面２



土層断面３

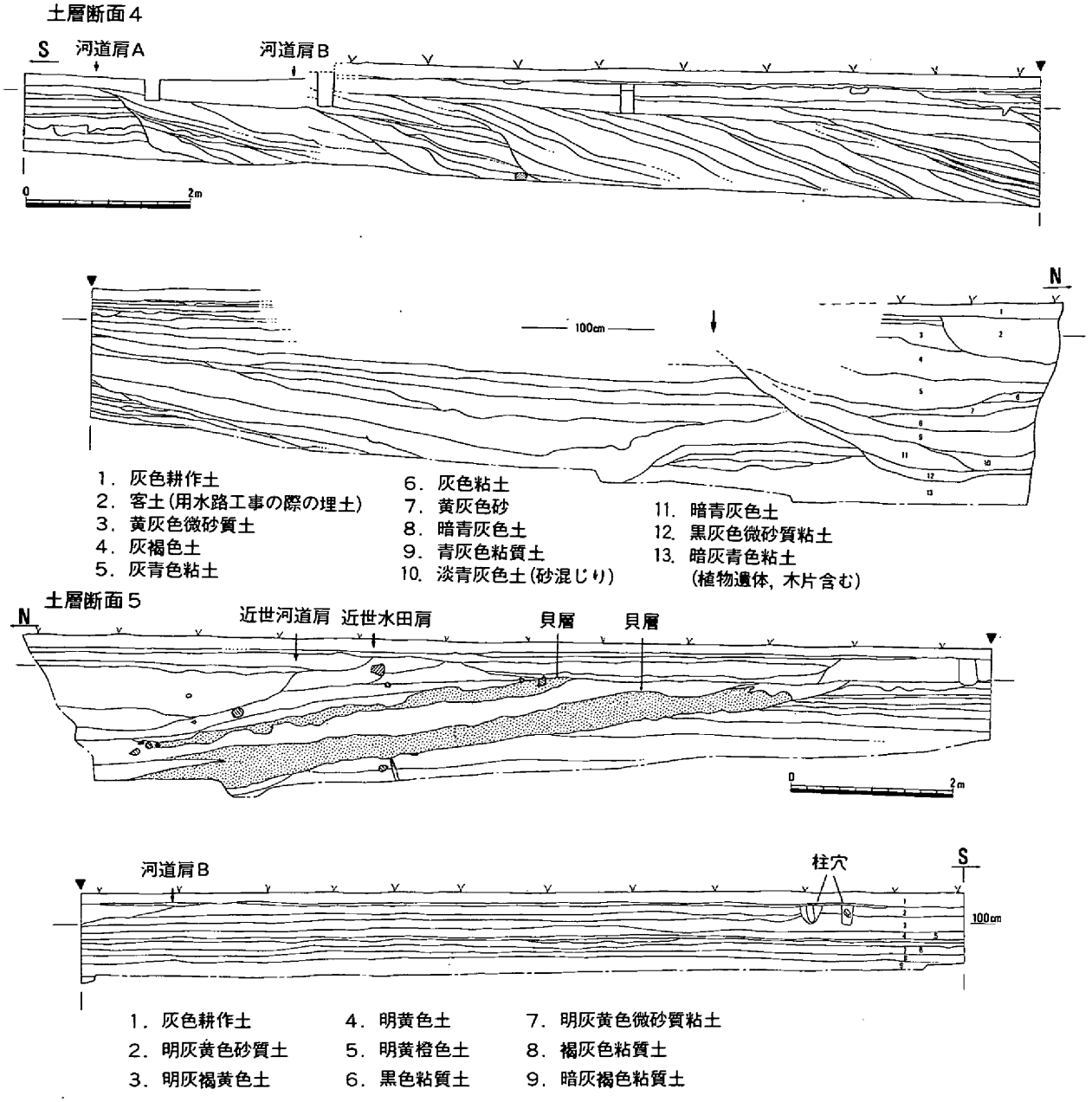




土層断面の位置(番号は図に対応)

1. 表土
2. 淡灰色砂質土
3. 淡灰色粘質土
4. 褐灰色粘質土
5. 暗褐灰色粘質土
6. 暗灰青色粘質土
7. 灰褐色微砂質土
8. 黒青灰色(木を多く含む)
9. 暗灰色砂
10. 暗灰青色砂質土
11. 灰黒青砂
12. 暗青灰色土
13. 灰青色砂
14. 淡灰青色粗砂
15. 灰黒色微砂
16. 明青灰色細砂(流木多く含む)
17. 黒灰色砂
18. 淡黄灰色(白っぽい)
19. 青灰色粘質微砂
20. 淡青灰色粘質微砂(縞状)
21. 黒灰色砂
22. 青灰色微砂
23. 淡灰色砂
24. 灰青色微砂粘質土
25. 黒灰色微砂
26. 淡灰黄色微砂
27. 淡灰黄色(やや粘質土)
28. 明白黄色微砂粘質土
29. 淡灰青色砂
30. 灰青色砂
31. 灰褐色土
32. 黄褐色土
33. 灰～暗灰色土
34. 淡灰色微砂粘質土(縞状炭化物)
35. 白黄色微砂質土
36. 黒灰色粘質土
37. 黄青灰色粘質土

第７図　土層断面図（１）１～３（1/80）



第８図　土層断面図（２）４・５（1/80）

５～７ｍの未開田部分がある。北側の水田には、南北に延びる畦が検出された。水田面には、東西方向の鋤耕作に伴うとみられる細い溝が多数検出されている。

この近世河道と水田を区分する時期的な画期は、おそらく百間川の築造・堤防の築成にあったと思われ、江戸時代の人工河川百間川が造られたことが契機となって、水田が新たに開発されたのではないかと推考している。出土遺物の時期も、ほぼそのことを裏付けているものと考えられる。

近世水田からの出土遺物は、染付陶器の細片がわずかに出土している以外、Ｍ１・２の銭貨２点とＭ３～５の鉄製品が主なものである。Ｍ１は宋銭であるが摩滅して、かろうじて○○元宝と読める。Ｍ２は、寛永通宝（初鋳年：1626年＝寛永３年）である。

４区では、１区につづく微高地部分が同様に検出された。すでに述べたようにこの遺構面は、さらに百間川河川敷内の南方に延びる可能性が強いが、旧堤防の築成により失われている。

以下、第２節一次調査と第３節二次調査に分けて検出遺構・出土遺物について述べる。

第２節　一次調査（１～３区）の概要

１．河道（第５・７～38図、図版11～17・20～24）

中世に比定される検出遺構の中で最大の遺構である。

調査区の北辺の１区から３区にかけての広汎な範囲で検出したが、２区から３区の北側縁辺部では、第６図に示すように近世の河道が重なる。微高地上の中世遺構群と共存することは確実であるが、第４図で示したように、古代にさかのぼる河道の肩も確認されている。その時期に比定される遺物は、河道の中では橋脚検出部分の河道底近くから出土した須恵器甕６などが認められるにすぎない。

河道の南側の法面や河底付近には、大小の杭が多数検出された。これらの多くは、先端を尖らせて打ち込まれた心持ちあるいは、ミカン割り材で、カシ・コナラなどの木が使われている。中には後述の櫂転用の杭もあるが、いずれも船舶の繋留・漁撈に伴う施設として存在した可能性もある。護岸等のために密集した箇所はない。対岸（北岸）にあたる部分は発掘調査範囲では検出されなかったが、橋梁の存在から考えても、当時の河幅は、かなり広かったことが推察される。

一方、河道のほぼ全域にわたって大小の貝塚が検出されており、ハイガイを主体とした貝殻が多量に認められている。（第５・８図）一度に多量の貝殻が投棄された状況を示す貝塚や、かなり長期にわたって大量の貝が捨てられた箇所も認められる。とりわけ３区の土層断面５に現われた扇形に広がる貝塚は、全容は明らかではないが、厚さ40cm前後、検出された範囲だけでも40㎡以上に達する。ハイガイ以外には、シジミ・カキ・ハマグリなどがみられる。橋梁近くの貝塚では、橋のたもとから棄てられたことも想像される。

いずれにせよ、橋が存在する場所は、当時の人々が多数集まり、行き交う場所と考えられるから、付近では、様々な品物の交易が日常的に行なわれていたと考えるべきであろう。河道も、河川交通に役立てられ、船によって貝などの海産物の搬入が行なわれ、売買などの商行為が日常的に行なわれた場所であったことも十分に推察される。

日常生活什器を主体とした出土遺物はかなり多く、遺跡出土の大半を占める。土師器・須恵器・瓦器・備前焼・瓦などの陶磁器のほか、木製品のほか各種の木片・流木や食料残滓である桃などの堅果類の種子や先に述べた貝殻・人骨・獣骨等の動植物遺体が数多く出土している。珍しい遺物としては、図版20に掲げるサルノコシカケなども数点みられる。樹木を腐朽させる木質のキノコであるが、これで細工物が作られたりするという。いずれも湿潤な状態や細砂に覆われた埋積条件が幸いして、土器類の器表面や、植物遺体の残りはきわめて良かった。

砥石・石鍋などの石製品をはじめ、鍛冶が行なわれたことを示す鞴の羽口片や鉄滓も少量ではあるが出土している。

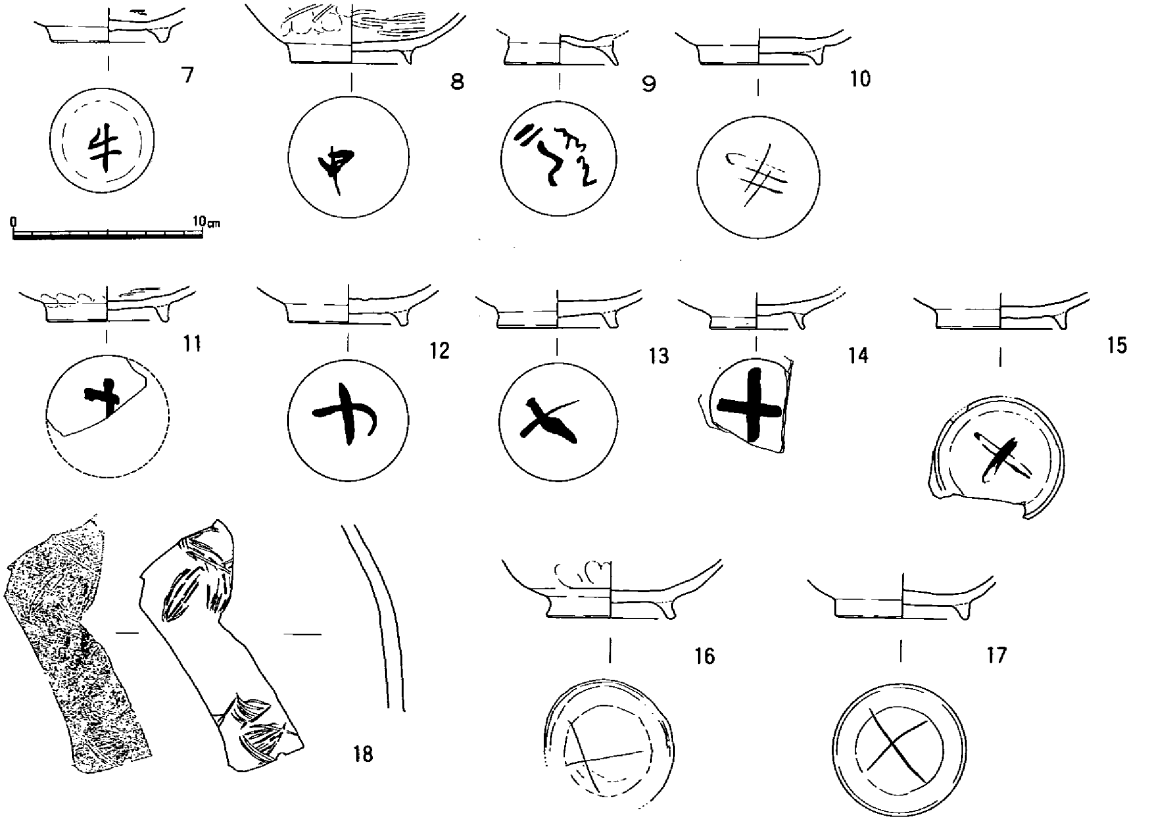
出土遺物の大半を占める土器類では、日常生活で使われる主に煮沸・炊事あるいは、飲食に使用される什器類がもっとも多く、竈をはじめ甕・椀・皿など大小様々な器形をもつ土師器がもっとも多い。ついで須恵器あるいは、備前焼・亀山焼・勝間田焼等の県内で生産された焼き物はもとより、東播系や常滑焼、瓦器など遠隔地から移入された製品も比較的多く出土している。また近世では、唐津の製品が多量にもたらされる。

輸入陶磁器としては、中国製の白磁・青磁の皿・椀がすべてである。白磁のなかでも、第９図４・５は、景徳鎮窯の生産品とみられるいわゆる青白磁である。わが国では、11世紀代の遺跡たとえば経塚などからの出土が多い。４は、型押しによる花文が描かれた小型合子の蓋である。５は小型の壺の体部の破片と思われるが、細片のため全形は不明である。いずれも精緻で華麗な花文が描かれ、青みを帯びた白色を呈する。

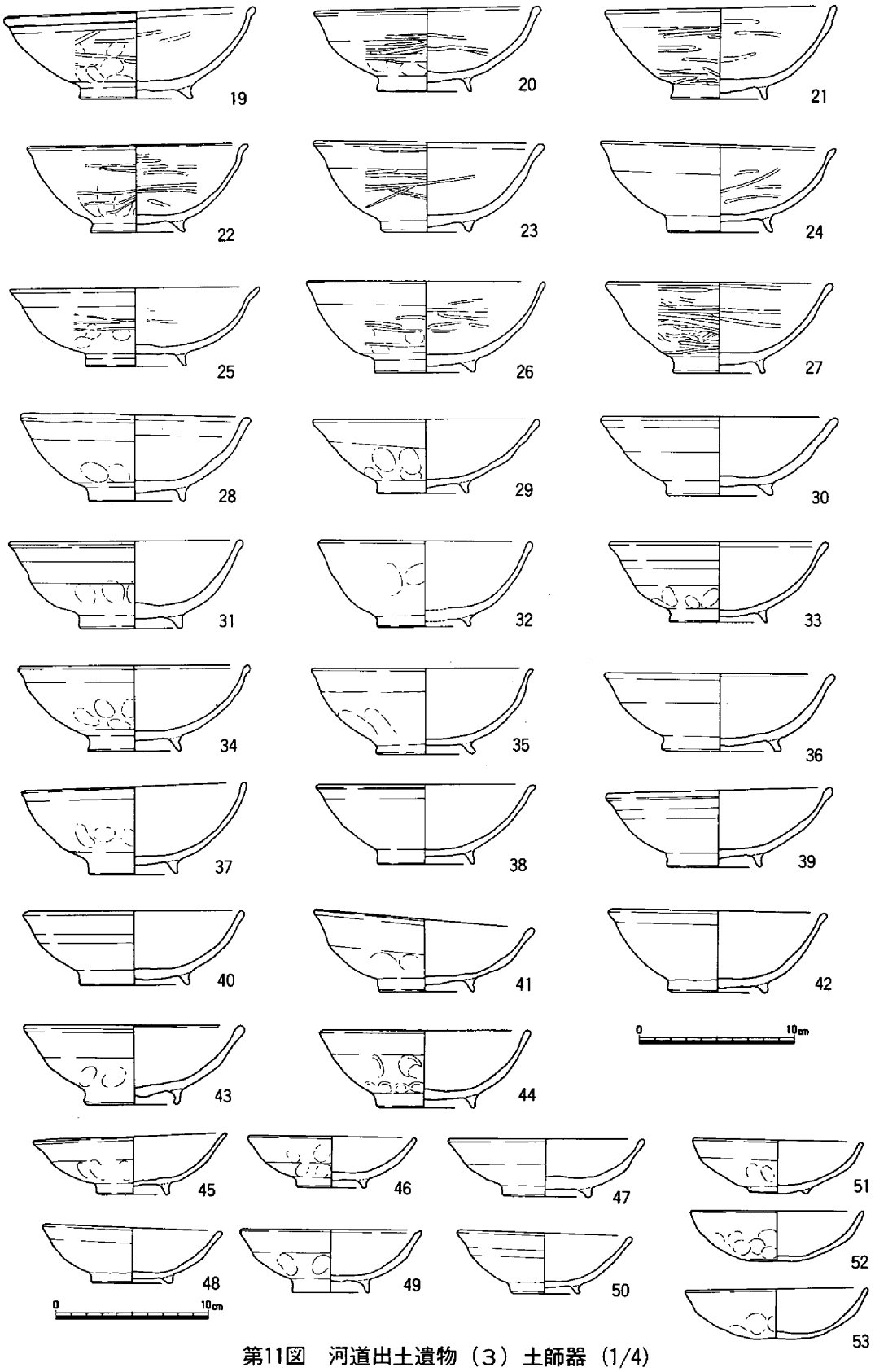
土師器の多くを占める器種は、従来「早島式土器」と呼称されてきた土師質高台付椀の出土が目立つ。（註１）ついで、小型の皿が多い。皿の中にはやや大型で杯として呼称すべきものもある。中型・大型の土師器では、鍋・甕・竈などの煮沸に使われる器種が多く、ほとんどの出土破片に被熱による赤変や器表面の剝落もしくは、著しい煤の付着が認められる。

はじめに、土師器の中でも椀だけにみられた墨書土器について述べておこう。第10図には墨書土

第９図　河道出土遺物（１）白磁・須恵器（1/4）



第10図　河道出土遺物（２）墨書・線刻土器（1/4）



第11図　河道出土遺物（3）土師器（1/4）

器・線刻土器を集成した。椀の外底部、高台の内側に書かれたものがすべてである。7は、比較的濃い墨で明瞭に「牛」と書かれている。古代から有用な家畜として飼育されてきた動物であり、その意味には注意すべきだろう。なお、遺跡の東方約500mには「牛屋坪」という字名が残されている。8は、「申」と書き慣れた筆致で書かれる。「もう（す）」か、「さる」と読むのかで意味が問題である。「牛」も「丑」であれば、いずれも干支の十二支のひとつと考えられて興味深い。

民俗例からも牛と猿の関わりは深く、関連性をもつ可能性を指摘しておこう。いずれも貴重な文字資料といえる。9は、数文字が草書風に連なるように書かれているが判読できない。10は、二と三が交差するように書かれる。文字というよりは、記号のようにみえる。11～15のすべては「十」あるいは「×」と読め、数を示す文字『じゅう』と読むのか記号の『ばつ』なのかいずれかであろう。16・17は、先端が鋭い工具か何かで描かれたものである。前者は焼成後に描かれた可能性がある。18は、備前焼の可能性がある壺で、須恵器質の体部に草花文風の模様が複線で描かれる。全容は不明である。

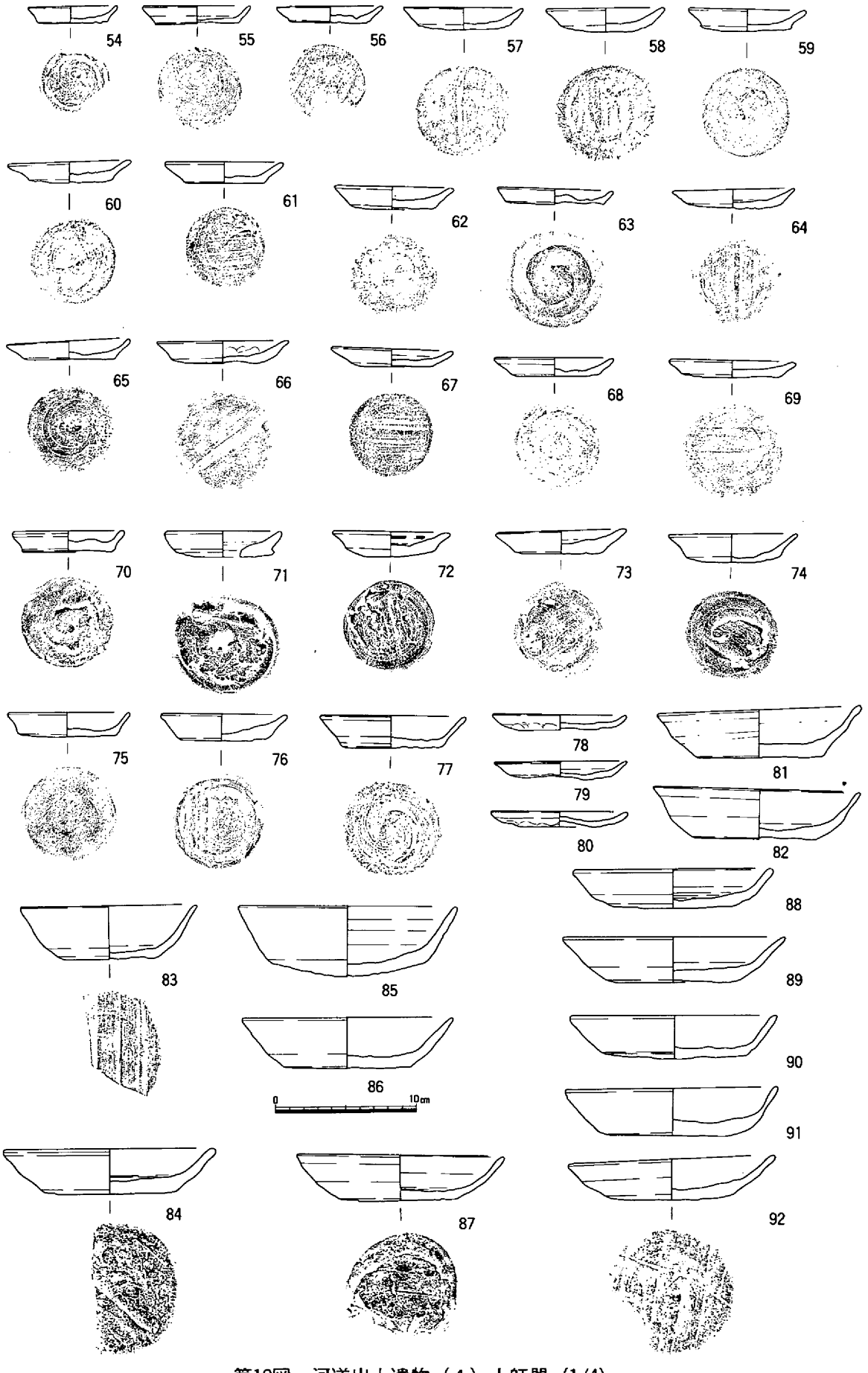
土師器の中でもっとも多い椀については、従来「早島式土器」と一般的に呼称されてきたものである。発掘調査報告書などでは、併用して土師器とも土師質土器とも統一されずに記載されているが、本稿では、百間川米田遺跡の最新の報告書に準じて土師器とする。

大半は、精良な均質な粘土が用いられ、白色あるいは、灰黄白色を呈する器表面は、外面に押圧痕を残すものの比較的平滑な調整が行なわれている。内面はスプーン状の工具を使用してナデ仕上げが行なわれているものが多い。また体部上位に、内型による成形部分と口縁部との接合部があるのが特徴的である。口縁端部は玉縁状に丸くおさまるものが普通で、底部には、通常輪状の高台が貼り付けられる。内面底部には、重ね焼きによる高台付着痕跡が残されるものが多い。従来の発掘調査結果や研究によって（註２）、体部内外面の器面調整に瓦器にみられるような篦磨きがもっとも古い段階で、口径も大きく、時代が降るにしたがって法量の縮小に伴う小型化が進み、最終的には、高台の簡素化や省略が進み皿ともいうべき器形になることが判明している。19～27などは、篦磨きが加えられた古い段階すなわち、12世紀末から13世紀前半頃に比定される。28～44は、つづく13世紀前半から中頃、45～50は13世紀後半頃、51～53はほぼ同時期かそれにつづく14世紀前半にかかる時期を想定する。

土師器皿は、いわゆる小皿とそれがやや大型化したものがあるが、一方で杯の系譜に置く器形もある。（81～86など）また、明らかに内型によって成形された底部丸底の皿（94～96など）もある。小皿の多くは、粘土紐巻き上げにより、ロクロを使用して製作される。外底部には、篦オコシの後板あるいは、植物繊維の圧痕を残すものが多い。底部切り放しでは、篦オコシのほか糸切り（55・60・77など）がある。78～80は、手づくねで扁平な作りを示す。

おもに炊事に伴う煮沸容器・道具としては、97の竈がある。破片の出土点数はかなり多いが、復元実測に耐えるものはほとんどない。

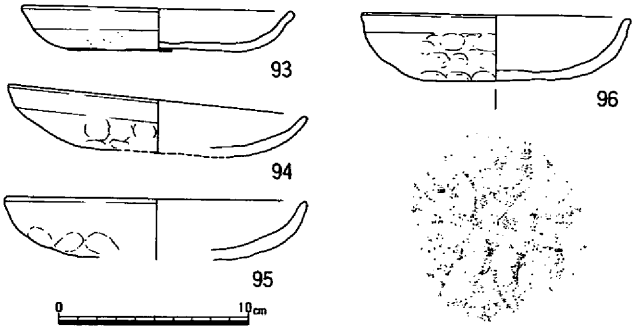
大型の土師器の多くは、鍋である。内外面の調整には、多様な刷毛調整が縦・横位に施される。頸部から体部上位にかけては、指頭押圧痕が目立つ。器形的には、体部が直線的で底部付近で曲折するもの（110・115・124など）、丸みをもった体部がそのまま丸底の底部に至るもの（111～113、119・122など）、やや長胴化の傾向があり甕と呼んでも差し支えないもの（117・118・123など）である。体部外面には黒色の煤が付着しているものが大半である。また被熱によって赤変したり、ヒビ割れをおこしこれらの中には、108・109のような器体を支える鼎となる支脚が取り付けられるものもあるが、

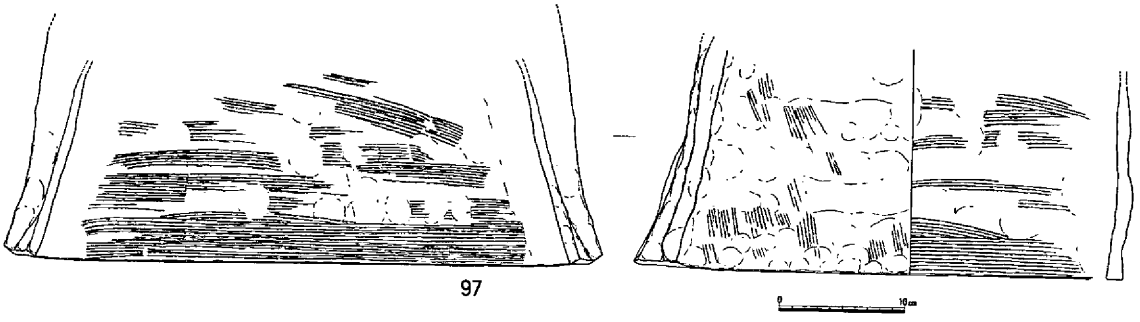


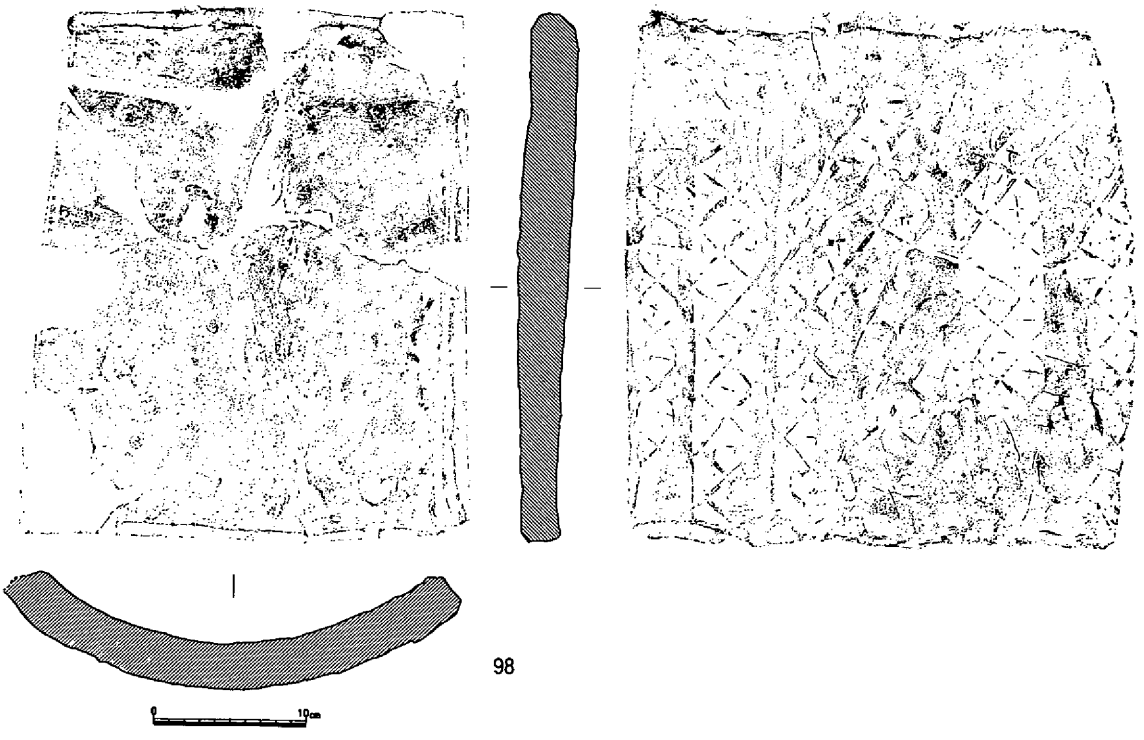
第12図　河道出土遺物（4）土師器（1/4）

竈の出土からも大型の鍋には支脚が取り付けられた痕跡は少ないようである。

瓦の大半は平瓦である。98は、ほぼ完形品で凸面には格子目タタキが施され、その中に「十」の文様が加えられる。99は、瓦当に唐草文が施された須恵質の軒平瓦である。100は、灰黒色を呈する亀山焼の軒平瓦で、瓦当には小さな三巴文



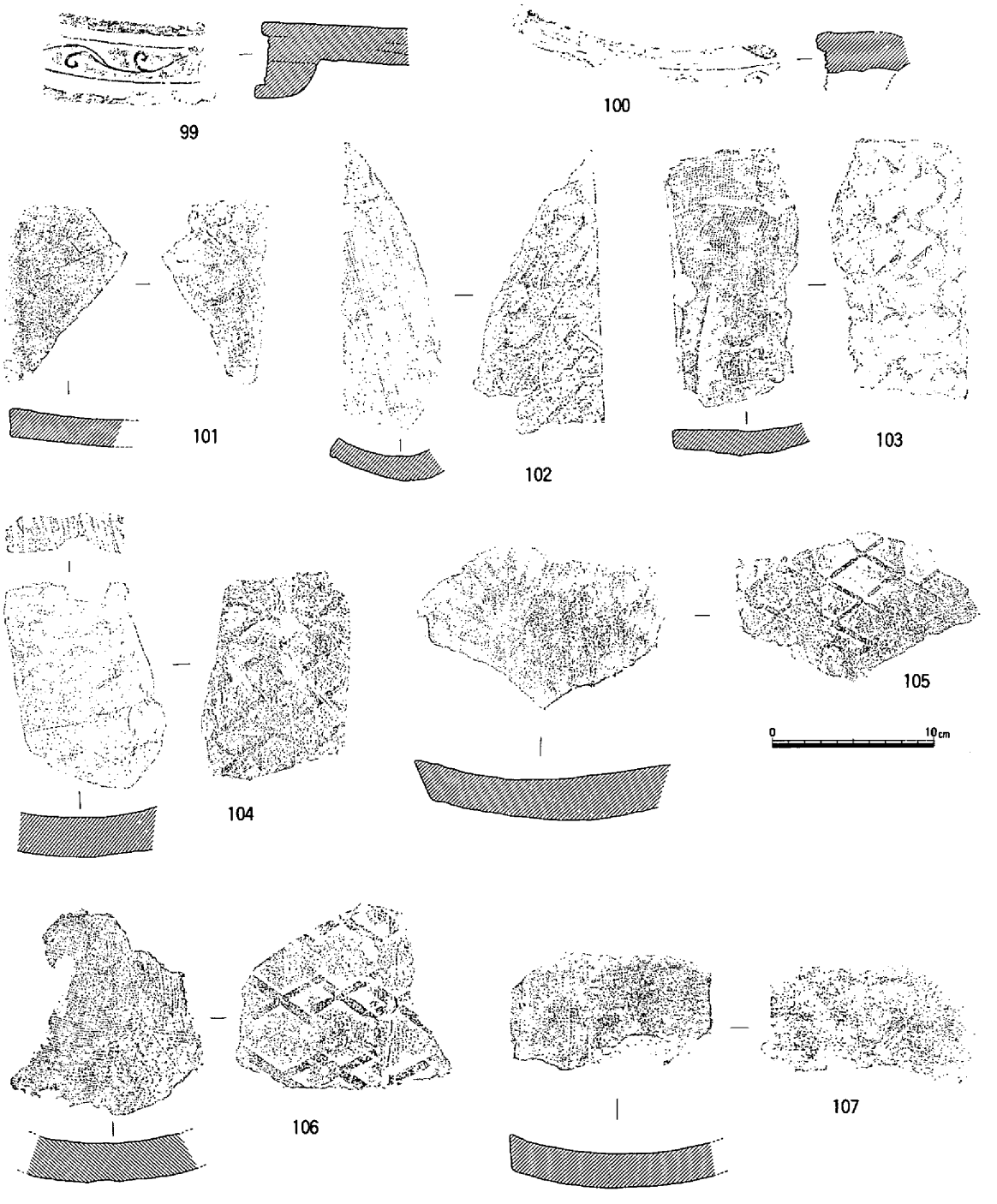




第13図　河道出土遺物（5）土師器・瓦（1/4・1/5）

が並ぶ。（註3）101～107は、いずれも凸面に斜格子のタタキが施される。いずれも凹面には布目圧痕が明瞭に観察される。中には被熱によって変色した瓦片もあり、これらは火災に遭った瓦葺きの建物に使われていた可能性もある。丸瓦の出土は、きわめて少ない。また、中世後期、室町時代後半の燻し瓦片もわずかに見られる。

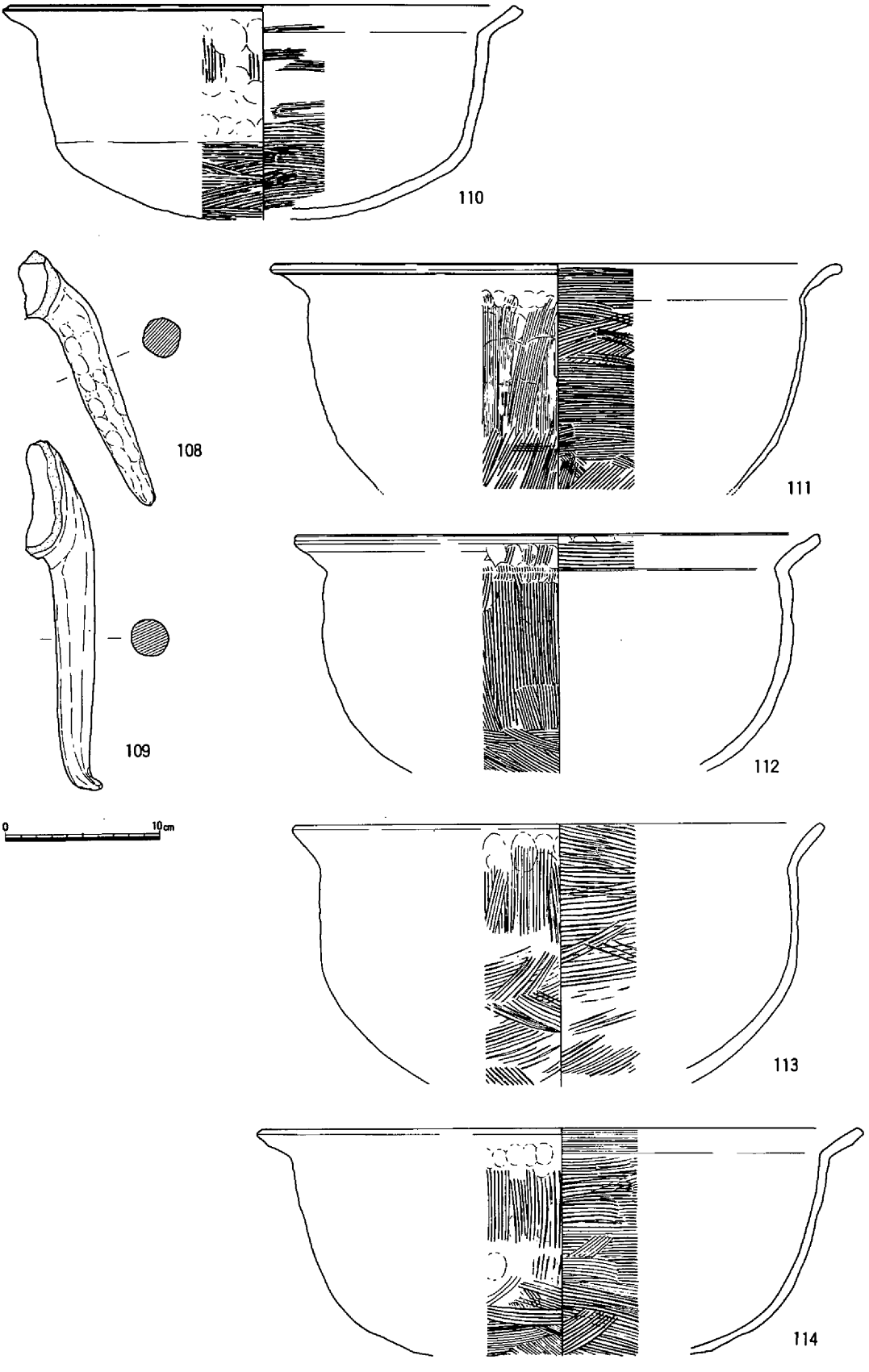
次に須恵器系の遺物について述べる。先に触れたように、須恵器系の土器には大きく県内産と県外



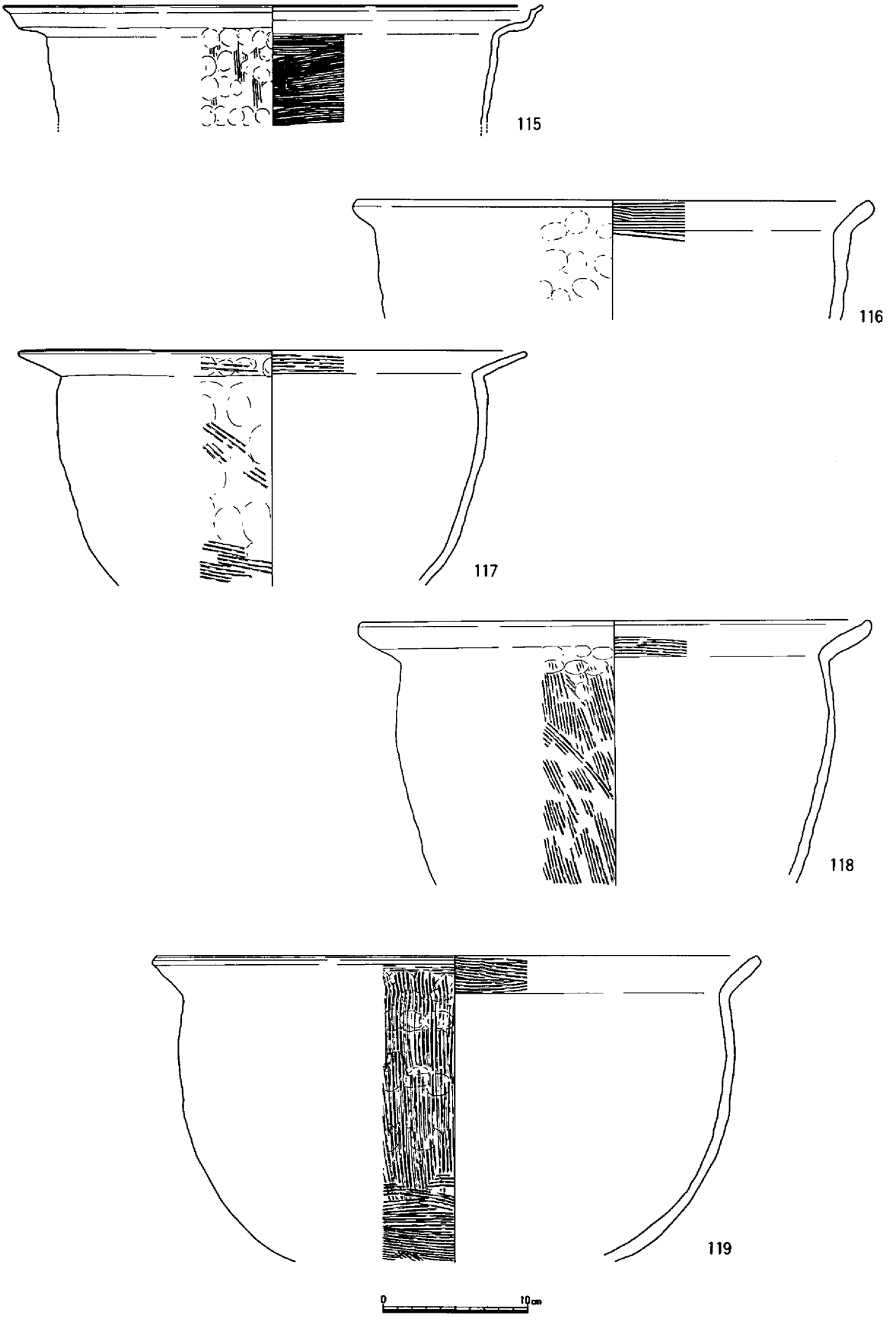
第14図　河道出土遺物（6）瓦（1/4）

産に大別できる。前者には、備前焼・亀山焼・勝間田焼、後者には隣の兵庫県明石市周辺で生産された東播系の須恵器がある。備前焼には、椀と皿がありどちらも底部は糸切りである。これらは、備前焼が擂鉢・甕・壺の代表的な三器種に生産が限定されてくる以前の段階のものと考えられている。（註４）

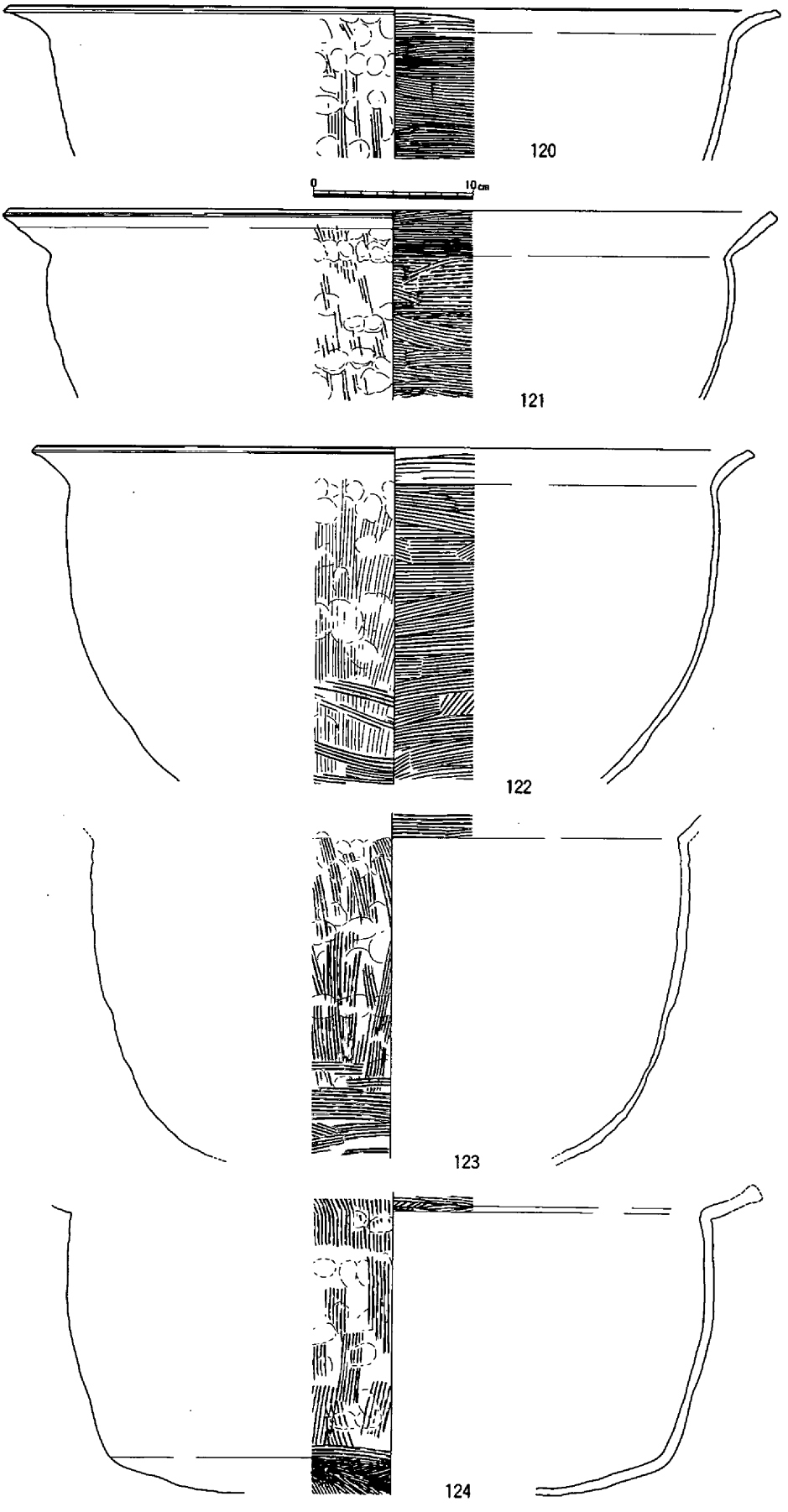
第18図には、それらの県内産の小型須恵器を掲載した。125・126・128・129・132・133・135・136～142などが、備前焼と推定される。いずれも淡灰白色ないし白灰色を呈し、須恵器の典型的な青灰色を呈するものは少ない。中には、口縁部外面に灰黒色の重ね焼によって燻された、特徴的な黒変



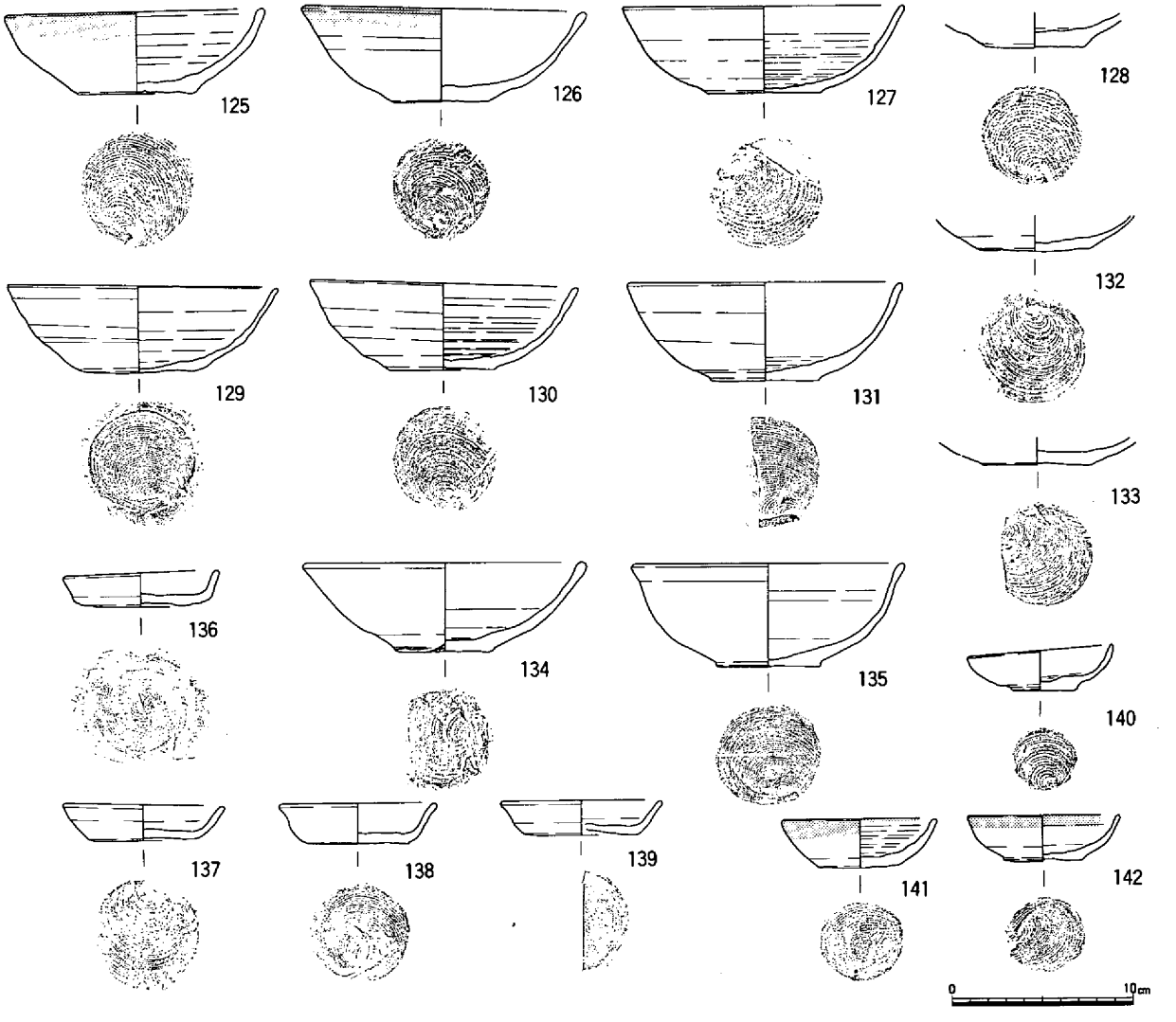
第15図　河道出土遺物（7）土師器（1/4）



第16図　河道出土遺物（8）土師器（1/4）



第17図　河道出土遺物（9）土師器（1/4）



第18図　河道出土遺物（10）須恵器（1/4）

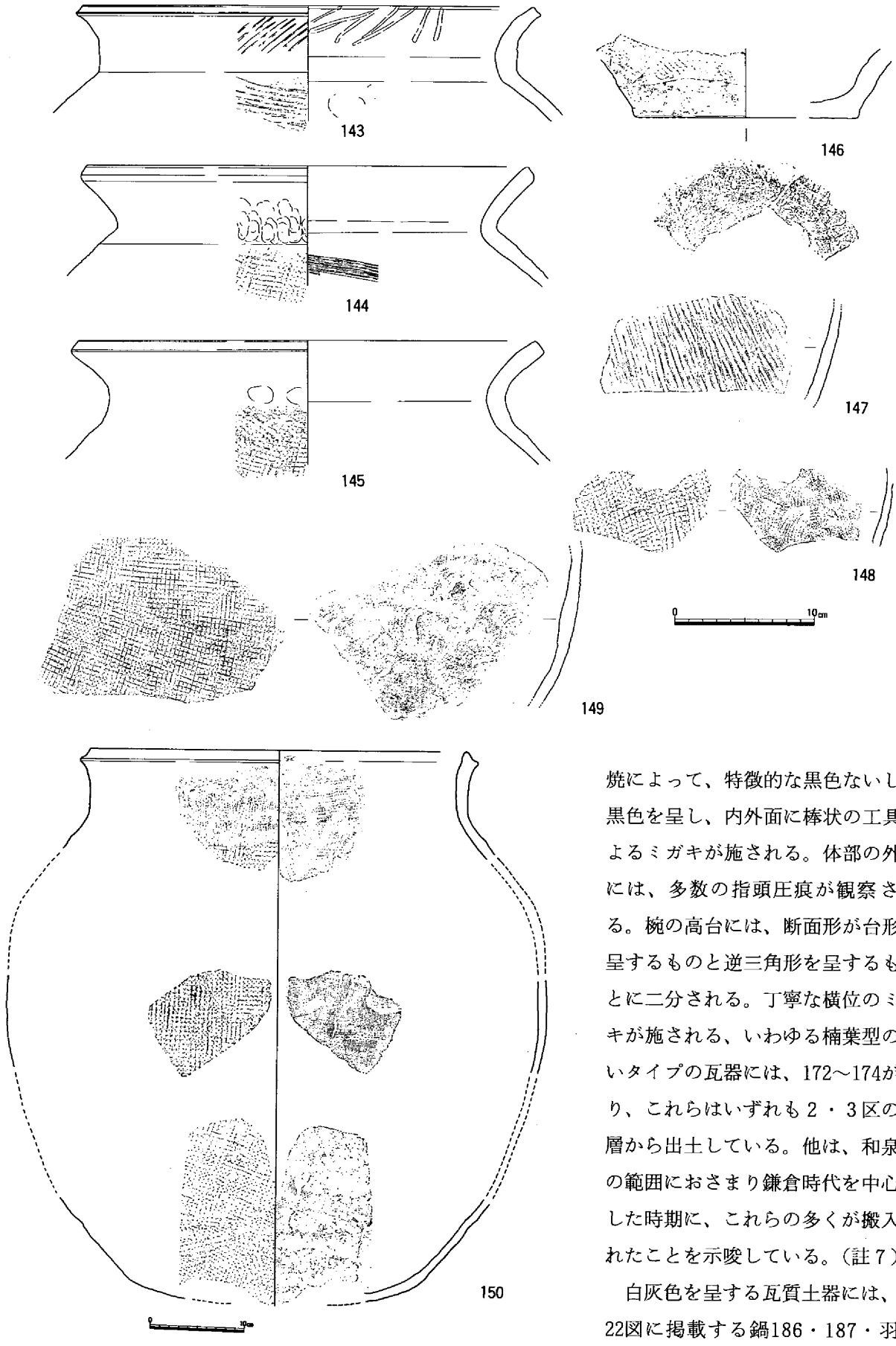
部分がある。141・142は、小型の椀のような形態を示す。

127・131・135は、県北の勝田郡勝央町で生産された勝間田焼（註５）と考えられる。百間川原尾島遺跡では、椀以外に甕なども出土している。暗灰色を呈するものが多いが、なお検討を要するものがある。

143～150は、倉敷市玉島周辺で生産された亀山焼である。擂鉢・捏鉢・甕・壺、瓦などが生産の中心で小型器種は少ない。出土しているものは、甕143～145・147～150で、体部外面には格子目のタタキあるいは、平行タタキが施される。内面には同心円のタタキが施されるのが一般的である。146は壺の可能性がある。150は、亀山焼でもかなり新しい段階のもので、安易に亀山焼と呼称すべきか筆者には疑問である。

第20図には、東播系の須恵器を掲載する。（註６）椀151～154、鉢155～160、甕161・162がある。椀の体部は、比較的直線的に外方する特徴がある。椀・鉢の外底部には、糸切りの痕跡が残される。鉢には、片口が作られる。甕は、薄手に作られ、体部外面には平行条線タタキが施される。

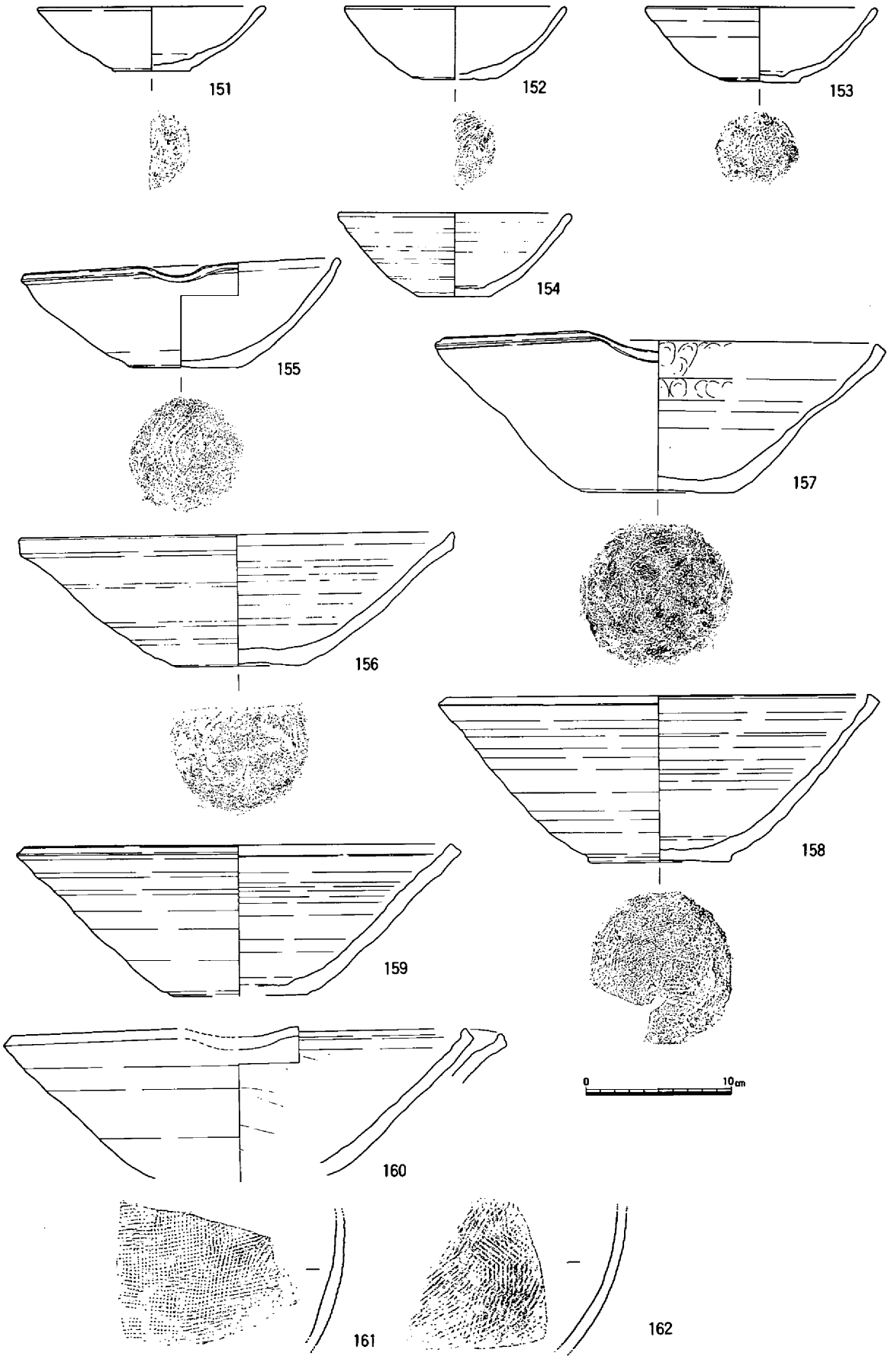
第21図には、瓦器を掲載する。出土した瓦器のすべては、小皿163～171・椀172～185である。燻し



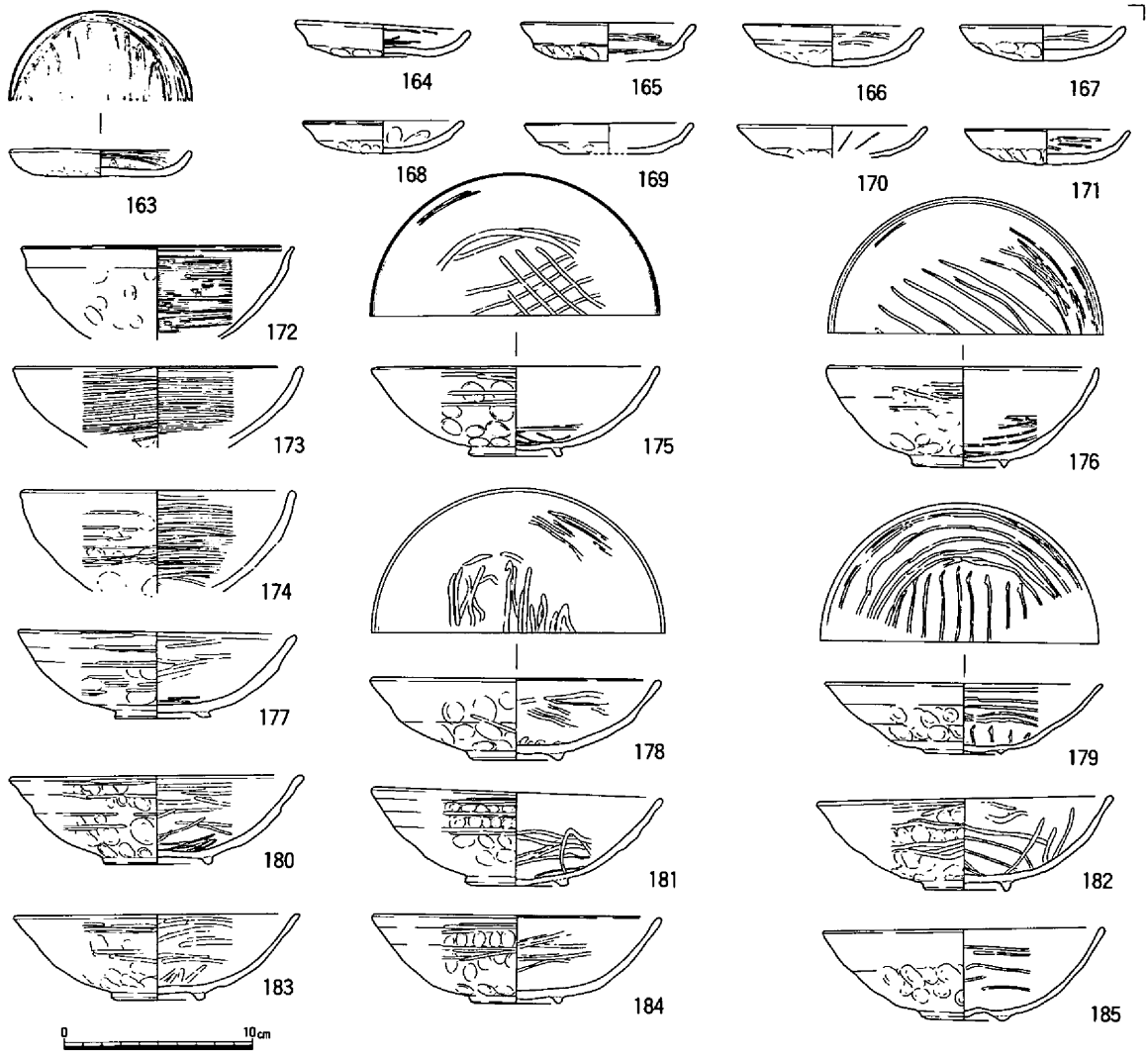
第19図　河道出土遺物（11）亀山焼（1/4・1/6）

焼によって、特徴的な黒色ないし灰黒色を呈し、内外面に棒状の工具によるミガキが施される。体部の外面には、多数の指頭圧痕が観察される。椀の高台には、断面形が台形を呈するものと逆三角形を呈するものとに二分される。丁寧な横位のミガキが施される、いわゆる楠葉型の古いタイプの瓦器には、172～174があり、これらはいずれも２・３区の下層から出土している。他は、和泉型の範囲におさまり鎌倉時代を中心とした時期に、これらの多くが搬入されたことを示唆している。（註７）

白灰色を呈する瓦質土器には、第22図に掲載する鍋186・187・羽釜188・189がある。土師器とは、器体



第20図　河道出土遺物（12）東播系須恵器（1/4）



第21図　河道出土遺物（13）瓦器（1/4）

の調整が異なる。前者では、内面にのみ横位のハケ調整が見られる。188・189は、内傾する口縁部のすぐ下位に鍔が貼り付けられる。出土点数は少なく、百間川原尾島遺跡でも同様である。（註８）

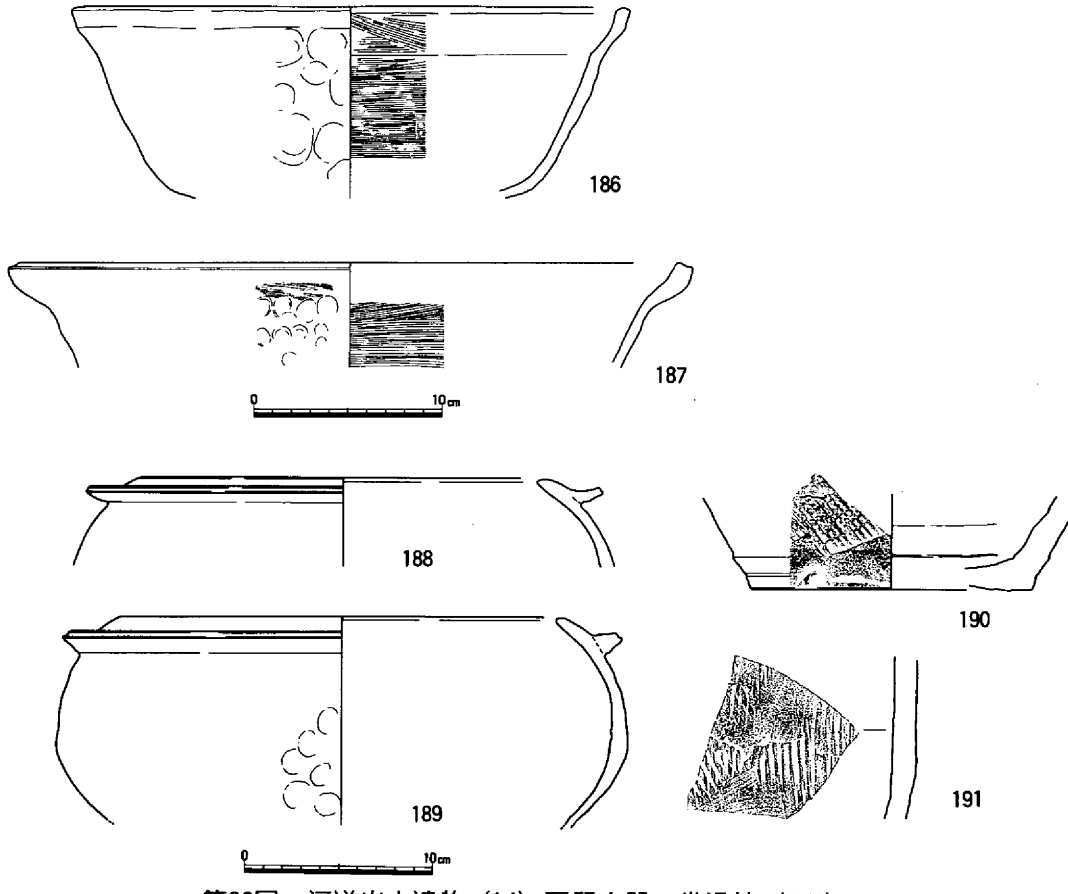
次に、いわゆる陶器について述べる。

190・191は、常滑焼の壺・甕である。特徴的な平行タタキが施され、灰赤色を呈する。細片を含め出土量はきわめて少ない。

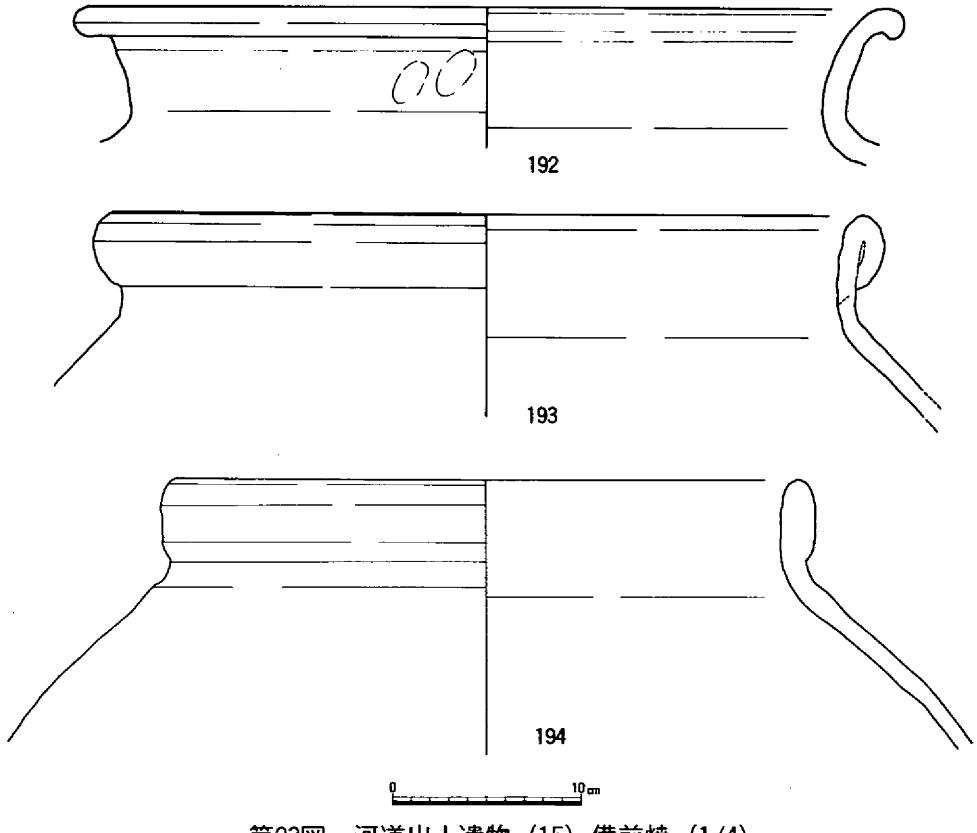
県内産の典型的な陶器である備前焼は、甕・壺・擂鉢が多数出土している。

１区よりも２・３区の河道からの出土が目立ち、河道肩Ｃの時期の河道におもに埋積した可能性が強い。192は灰色を呈する須恵質の大甕で、従来の編年研究（註９）に従えば、Ⅱ期に比定される。193はⅣ期、194はⅤ期の範囲に含まれる可能性がある。大甕の破片は、３区の水田遺構下部で多量に出土しているが、復元実測に耐えるものは、きわめて少ない。

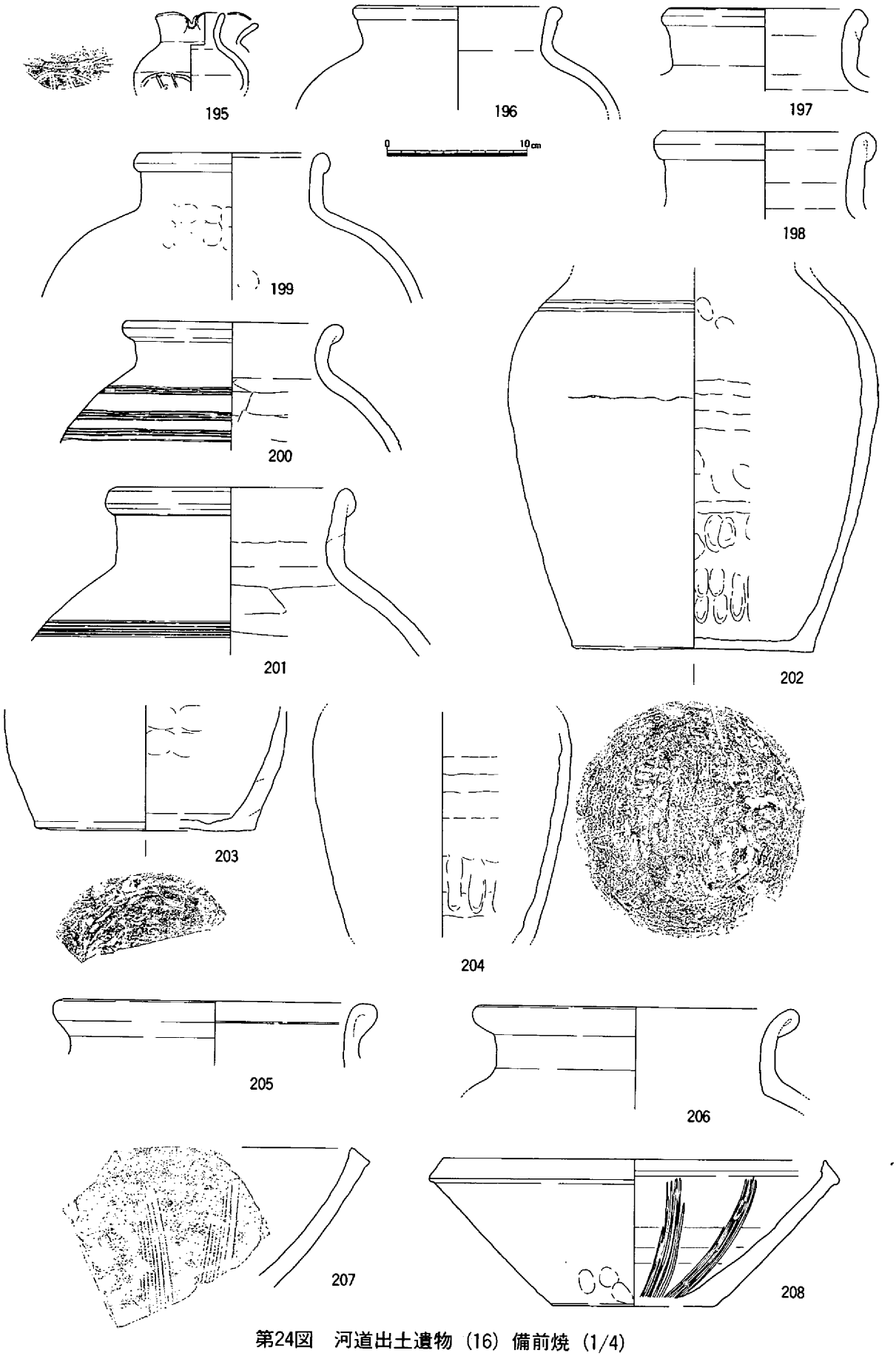
第24図には、壺・擂鉢を掲げる。195はいわゆる刻文片口小壺で体部に篦描きの文様がみられる196～206は大小の壺である。いずれも備前焼特有の赤褐色ないし黄褐色を呈するものが大半を占める。壺の口縁部は、玉縁状に肥厚する。200・201には、肩部に数条を一単位とする沈線が巡る。また、202は、灰青色を呈し頸部以下を完全に残し、肩部には２条の沈線が巡る。外底部には、ロクロの



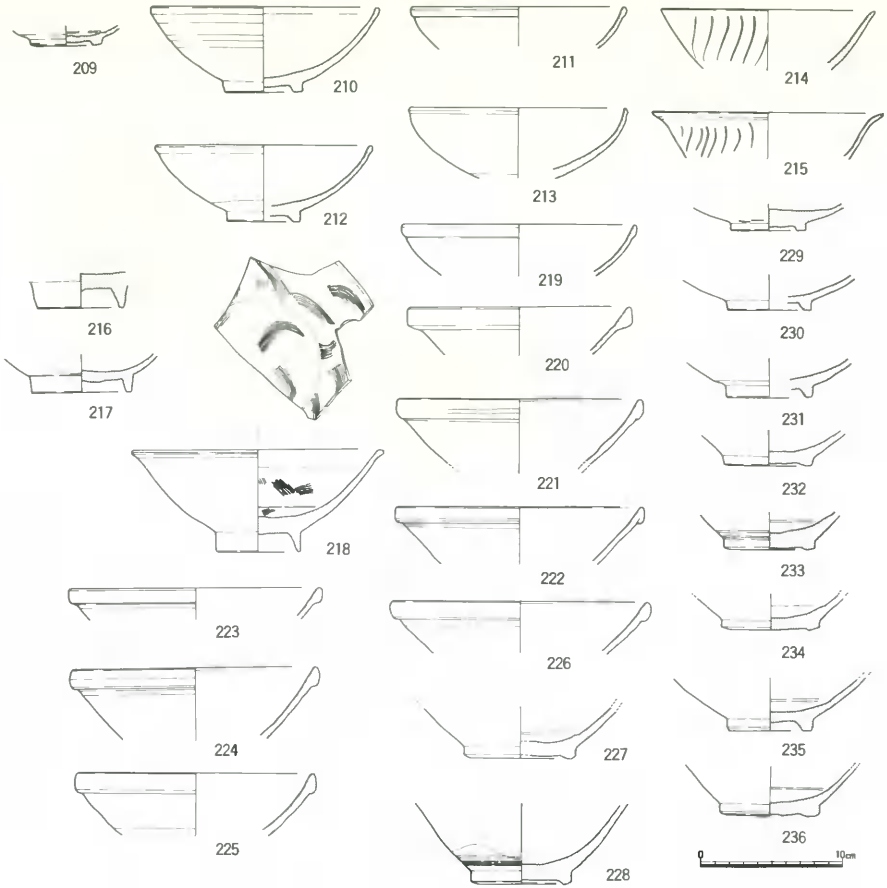
第22図　河道出土遺物（14）瓦質土器・常滑焼（1/4）



第23図　河道出土遺物（15）備前焼（1/4）



第24図　河道出土遺物（16）備前焼（1/4）



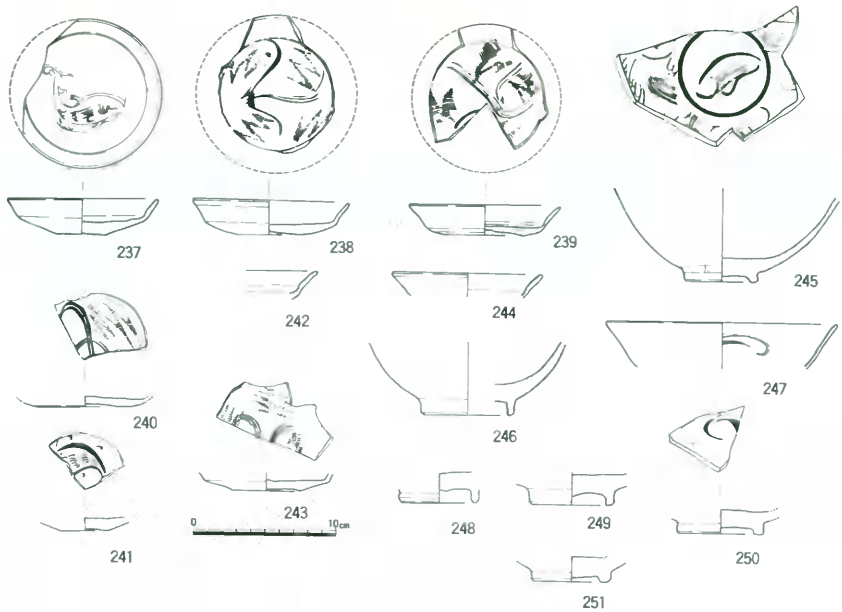
第25図　河道出土遺物（17）白磁（1/4）

下駄印が看取される。壺の多くは、Ⅲ～Ⅳ期に比定される。207・208は、擂鉢で内面に放射状の櫛目が施される。207はⅢ期、208はⅣ期に比定される。擂鉢の破片出土量は比較的多い。

次に輸入陶磁器について述べよう。これらはすべて中国製である。第25図には、白磁を掲載する。ほとんどは、碗であるが209はⅢと考えられる。無文のものが多いが、214・215には、体部外面に櫛目文が施される。218には、内面に櫛目の花文が描かれる。

白磁の碗の口縁部の形態には、218のように鋭く外方するものと玉縁を示すものとに大別され、後者は、さらに大小の違いがある。また、削り出しの高台には台形を呈する低平なものと、218のように直線的に高く作られたものがある。時期的には、12世紀代から13世紀代に生産されたものと考えられる。（註10）青磁に比べ白磁の方が出土量は多い点は時期的な現象であろう。しかも1区の河道部分からの出土が目立ち、河道肩Bの時期に多く流入埋没したことが推察される。

第26図には青磁を掲げる。青磁は、Ⅲ（杯）・碗がほぼ半数ずつ出土している。龍泉窯系と同安窯系とに分類できる。前者には、237・241・242・245・247～251などがある。237・241には、内底見込

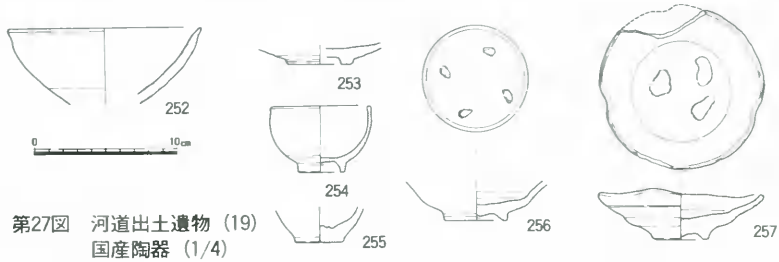


第26図　河道出土遺物（18）青磁（1/4）

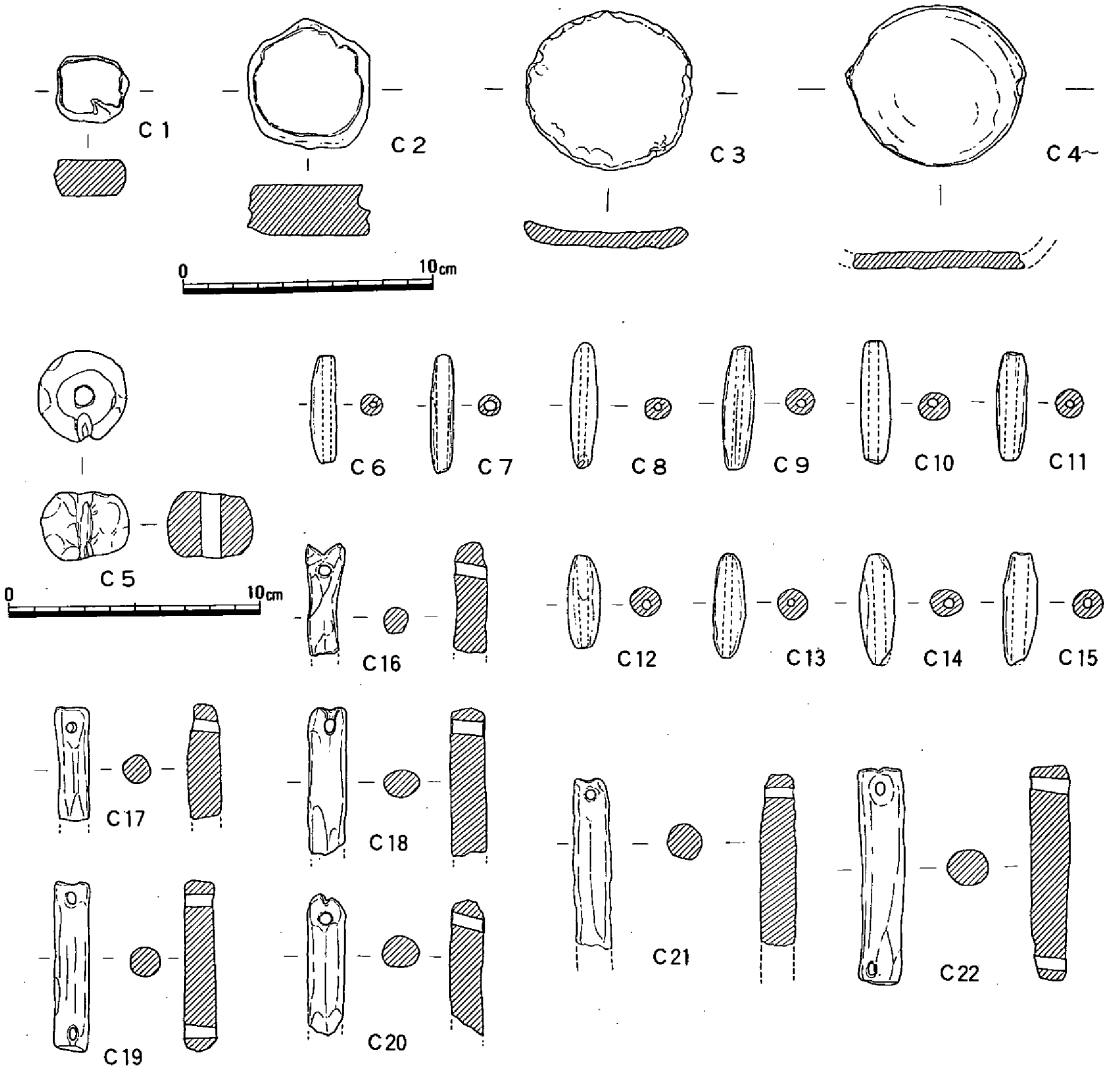
みに魚文が描かれる。245には、箆や櫛状の工具を用いて草花文が描かれる。これらは、いずれも特徴的な青みを帯びた灰緑色を呈している。後者には、皿が多い。内底見込みに櫛によるジグザグや、箆による片彫りによる文様が描かれる。釉面は、ガラス質でくすんだ灰緑色を呈する。

青磁碗の中には、鎬蓮弁が施される出土品は小片がわずかである。時期的に白磁とほぼ同様な時期範囲での使用が推定されるが、青磁の増加する時期は一般的にやや降ると見られる点で、河道の埋没過程の時期的変遷も端的に示しており、青磁の出土が２・３区に集中する事実は、これを裏付けている可能性がある。

国産の陶磁器は、河道の上層から近世水田の下層にかけて少数出土している。252・254・255は、鉄釉陶器で瀬戸産の天目とみられる。253は、皿で同じく瀬戸灰釉陶器であろう。256・257は、唐津で内底見込みに、重ね焼の際の「胎土目積み」の痕跡が明瞭に観察され、17世紀代に比定される。（註11）水田からは、染付陶器の破片が出土しているので、百間川築造時期の前後を示す遺物と考えてよいだ



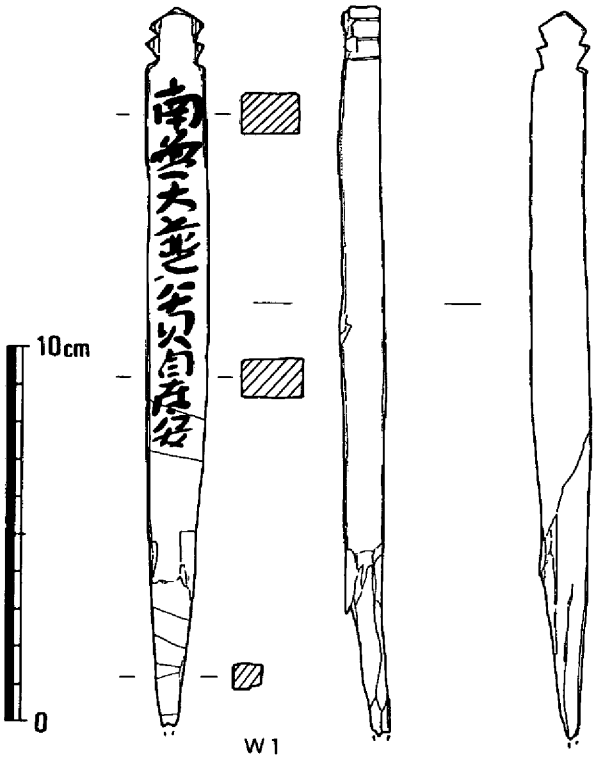
第27図　河道出土遺物（19）
国産陶器（1/4）



第28図　河道出土遺物（20）土製円板・土錘（1/3）

表1　土製品観察表

番号	出土遺構名	質(素材)	名　称	法量(cm) 長	幅(厚)	孔径	重量(g)	残存率	備　考
C1	3区河道	瓦	土製円板	3	1.5		13.45		打ち欠き
C2	〃	〃	〃	5.4	2		56.24		〃
C3	1区河道	土師質	〃	(最大径)6.6			—		土師器皿の転用
C4	〃	〃	〃	(最大径)7.1			—		〃
C5	3区河道貝塚	〃	土錘	3.6	2.6	0.8	33.51	完形	球状単孔土錘
C6	2区河道西半	〃	〃	4.2	1	0.3	4.28	〃	棒状単孔土錘
C7	1区河道上層	〃	〃	4.8	0.8	0.3	3.02	〃	〃
C8	3区水田	〃	〃	5	1.05	0.3	4.08	〃	〃
C9	1区河道下層	〃	〃	5	1.2	0.4	7.02	〃	〃
C10	1区河道	〃	〃	5	1.2	0.4	5.90	〃	〃
C11	2区河道	〃	〃	4.4	1.2	0.3	6.58	〃	〃
C12	〃	〃	〃	3.9	1.25	0.5	5.92	〃	〃
C13	1区河道下層	〃	〃	4.5	1.2	0.35	6.56	〃	〃
C14	2区河道下層	〃	〃	4.5	1.2	0.4	7.68	〃	〃
C15	3区河道	〃	〃	4.6	1.3	0.5	5.22	〃	〃
C16	1区河道下層	〃	〃	4.6	1.2	0.5	8.85	1/2	棒状双孔土錘
C17	〃	〃	〃	4.5	1.2	0.4	9.36	〃	〃
C18	1区河道	〃	〃	6.8	1.05	0.3～0.45	14.86	〃	〃
C19	1区河道下層	〃	〃	6.0	1.5	0.4～0.5	16.07	完形	〃
C20	1区河道	〃	〃	5.1	1.4	0.5	13.77	1/2	〃
C21	1区河道下層	〃	〃	6.5	1.4	0.4		〃	〃
C22	〃	〃	〃	8.7	1.7	0.55	27.24	完形	〃



第29図　河道出土遺物（21）小型卒塔婆（1/2）

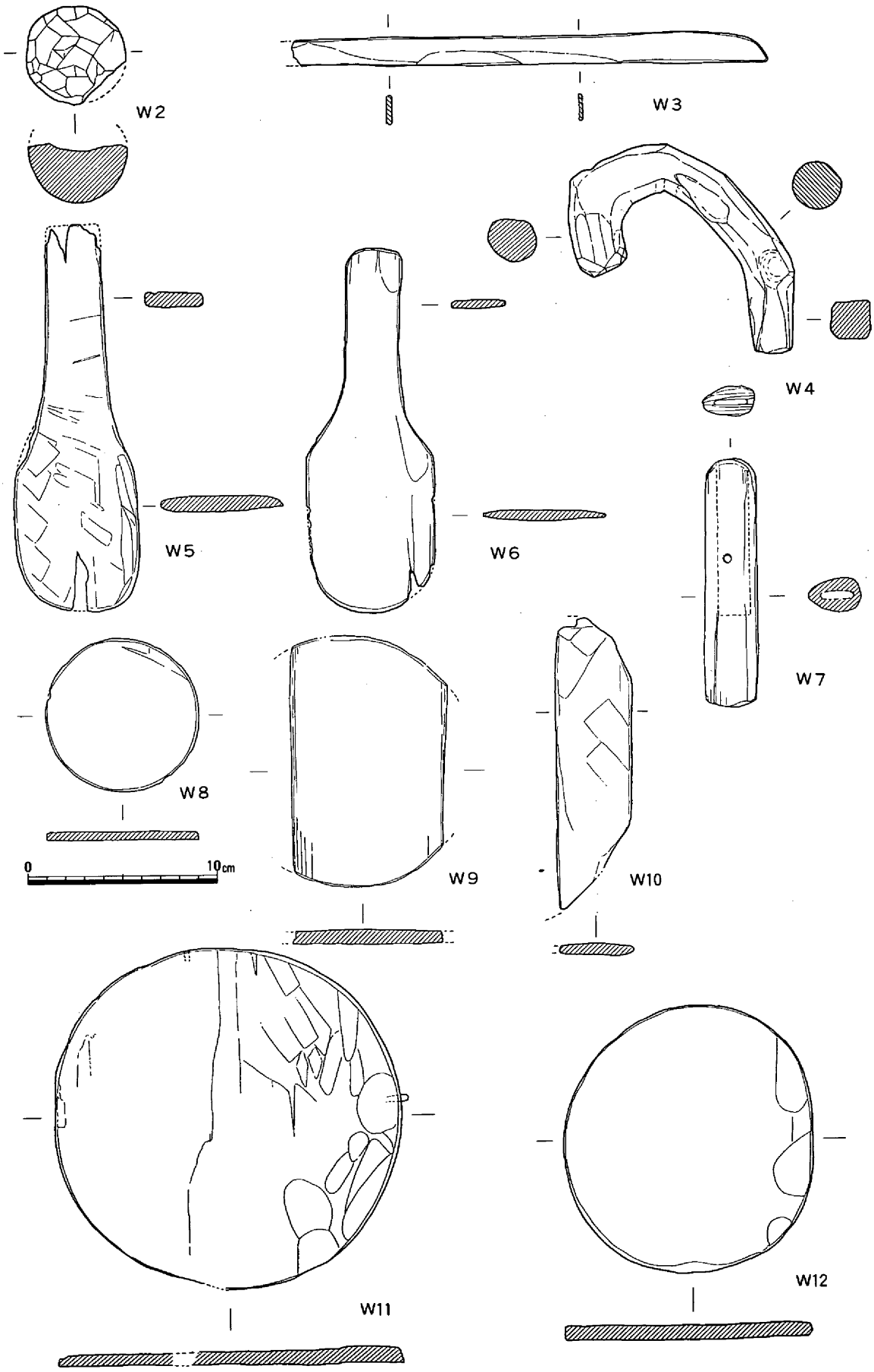
ろう。

土製品の中には、本来土器であったものが、人為的に打ち欠いたり、磨いたりして作られたものがある。C1～C4は、遊戯具と考えられる土製品である。多くは瓦や備前焼などの破片が使われるが、土師器の皿の転用は珍しい。

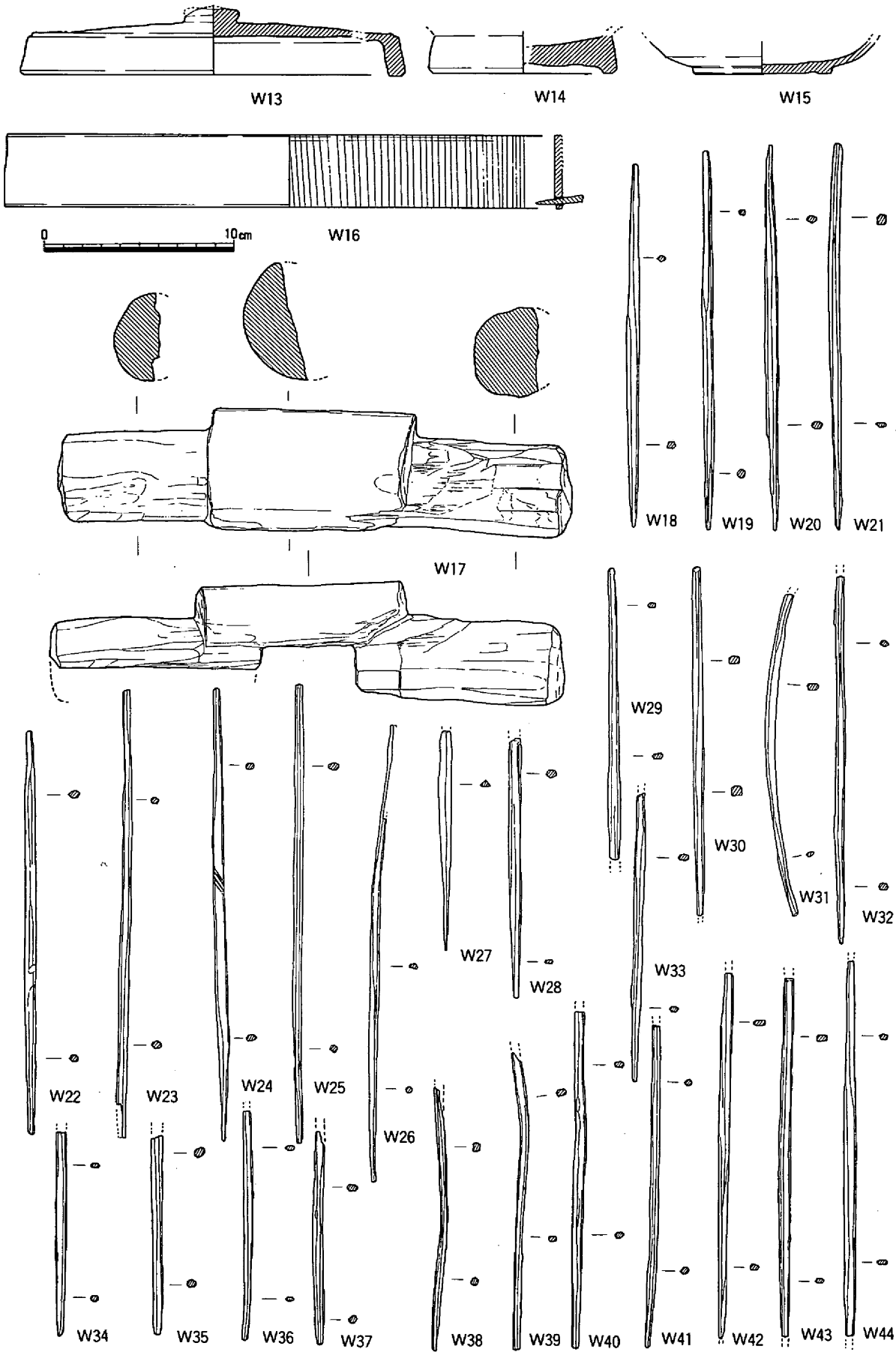
次に木製品について述べる。木製品のなかでも、第29図W1の小型卒塔婆の発見は、貴重な文字資料であるばかりでなく、当時の仏教との関わりや人々の信仰の一端を物語っている。上端は尖らせて左右二ヶ所ずつの切り込みが入れられ、下端は鋭く尖らせて終わる。おそらく、地面に突き刺して立てられたと考えてよいだろう。下端は、出土時にわずかに破損したが、ほとんど原形を残しているとみてよいだろう。

墨書文字は書き慣れた筆致を示しており、「南無大慈□（悲ヵ）自在安」と読める。出土地点は、第5図に示したように、橋梁遺構のすぐ近くであり、人々の往来が激しかった場所に立てられ、行き交う人の供養によって追善し、成仏させようとした習俗にかかわる遺物と考えられ、念仏宗の流行とともに広まったとされる。また、鎌倉時代以降盛んになるといわれる「施餓鬼会（せがきえ）」に関連して使われた可能性も強い。（註12）施餓鬼は、「盂蘭盆会」が期日を決めて祖先の霊に供物を捧げ、菩提を弔うのに対し、期日を選ばず行なわれたとされる。近世以降でも、天災や飢饉などで不慮の死を遂げた人々や多くの無縁仏のために、その冥福を祈るために行なわれたという記録も残されている。W2は、毬打（ぎっちょう）の毬と考えられる。毬打とは木で作られた杖で、やはり木の球を打ち飛ばす遊戯である。ケヤキの木の瘤の部分が使われ、丁寧な表面の切削が施されて球形を呈している。毬打は、「吉兆」に通ずるとされ正月中の遊びとして盛んだったといわれる。1月15日に正月のしめ飾りなどを焼く行事を、左義長と呼ぶところが多いのもこの呼称に由来するといわれる。W3は、刀形で祭祀に使われた可能性が強い。W4は、杖か何かの把頭のようにみえる。下端は、差し込む目的で四角に整形されている。W5・6は杓文字である。形は今のものと変わらない。しかし、現在では、スギが用いられることはほとんどない。W7は、包丁の柄（鞘）と推定され、茎部分を収めるために細長く削りこまれている。茎を固定するための目釘孔が1ヶ所貫通する。W8～12は、板状に整形された底板・折敷である。W12には、竹釘が残される。W13～15は、いずれも漆器である。W13は蓋で、ロクロが使われた、精妙な挽き物である。光沢のある黒漆が全面に塗られる。W14・15は椀である。低い高台が挽き出されるが、漆も木質部分の残りはよくない。前者は黒、後者はやや褐色を帯びた黒色の漆が使われる。

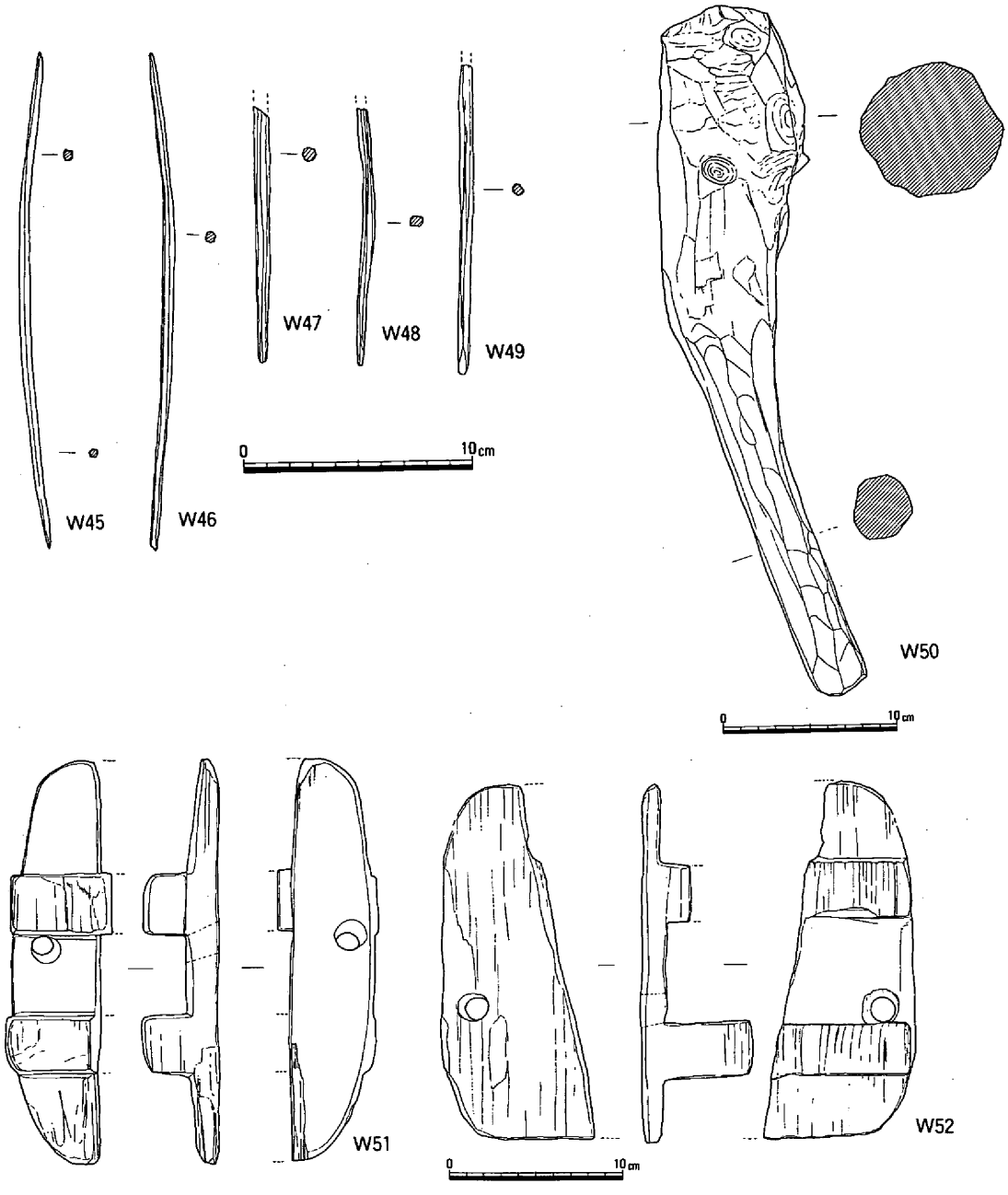
W16は、曲物である。本来底板が取りつくための竹釘が残っている。W17は、丸木の半分を利用して片方ずつを削りとって、連結具として使われたような形態を示す。1区の橋梁付近から出土してい



第30図　河道出土遺物（22）木製品（1/3）



第31図　河道出土遺物（23）木製品（1/3）



第32図　河道出土遺物（24）木製品（1/3・1/4）

るのであるいは、欄干などの橋部材に使われていた可能性もある。

W18～49は箸形の木製品である。もちろん箸として飲食に使われた可能性も強いが、祭祀にも使われた可能性もある。両端を尖らせたものが多いが、端が平らあるいは、丸くおさまるものが多いが中には鋭く尖っているものもある。（W45）また、W24の中ほどには、斜めに切り込みが３条入れられる。なお、W45～49は、３区のもっとも大きい貝塚からのみ出土したものである。

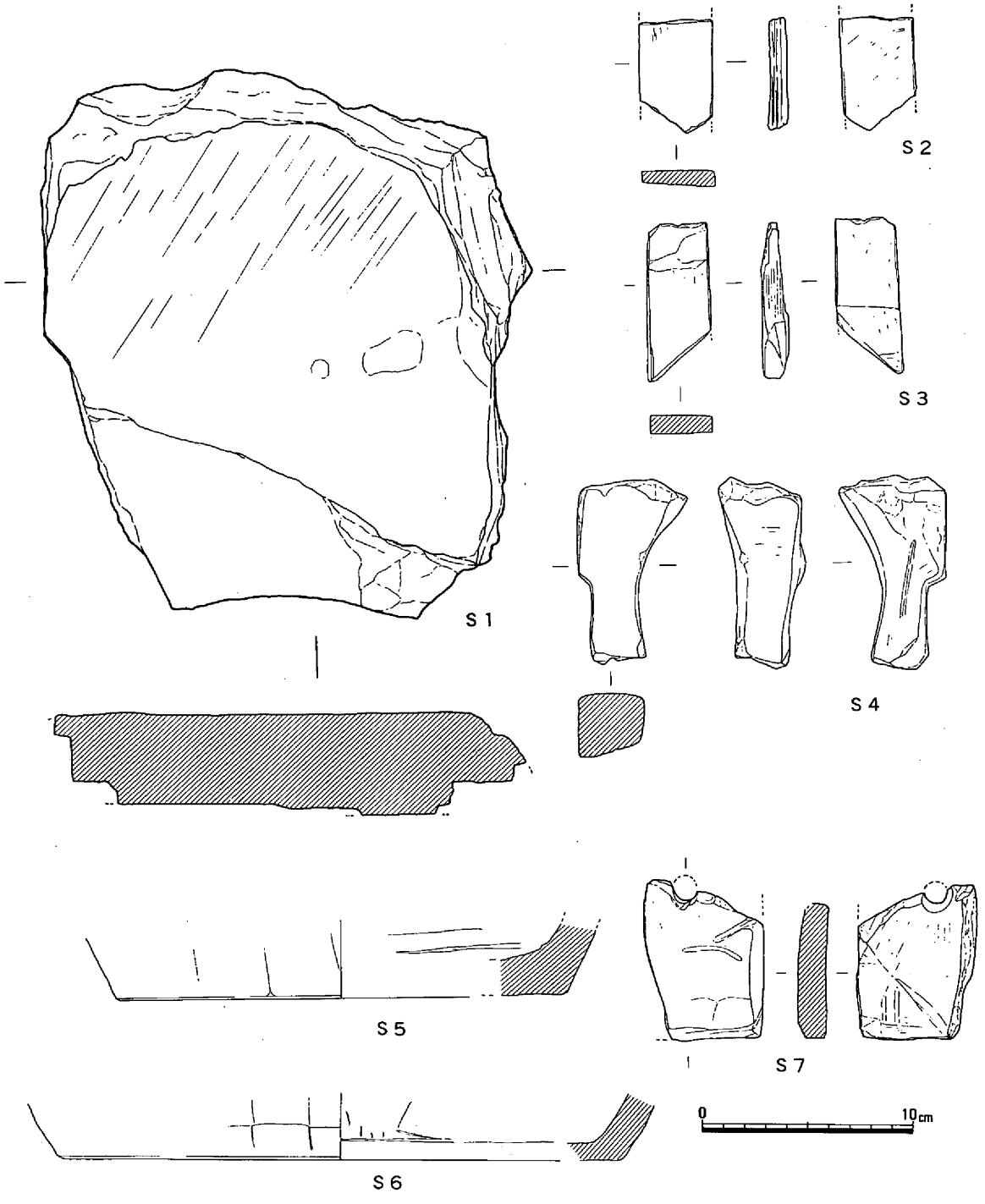
W50は、未製品で槌である。民具には用途に応じてさまざまな形態があるが、本例は豆打ち用とされるものにもっとも近い形状を示す。（註13）

W51・52は、下駄である。どちらも割れており、鼻緒孔はそれぞれ１個しか残されない。スギ材を使ったため、縦に割れるという結末を迎えたようだ。

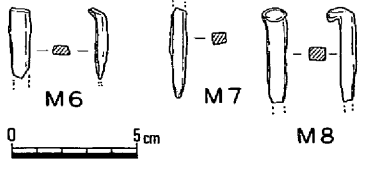
第33図のＳ１～４は、砥石である。Ｓ１は大型でしかも堅い粘板岩質の石である。固定して使われ

表２－(1)　木製品観察表（河道出土木製品抄録）

番号	出土地区・遺構(層位)	器　種	計測最大値（cm）			樹　種	備　考
			長(径)	幅(長)	厚		
W１	１区河道下層	小型卒塔婆	19.6	1.6	1.1	ネズコ	墨書，板目
W２	〃	毬	5.2			ケヤキ	心持ち
W３	１区河道最下層	刀形	24.5	1.7	0.4	スギ	板目
W４	３区河道	柄頭？		2.8	2.8	ツバキかサザンカ	心持ち
W５	１区河道	杓文字	20.4	6.5	0.7	スギ	板目
W６	１区河道（貝塚の上）	〃	19.2	6.6	0.5	スギ	板目
W７	１区河道下層	包丁の柄	13	2.8	1.2	スギ	柾目
W８	２区河道	底板	8		0.5	サワラ	柾目
W９	〃	〃	13.1		0.75	スギ	板目
W10	３区河道貝塚	折敷？	14.4		0.5	サワラ	板目
W11	１区河道橋脚付近	底板	18.1		0.6	スギ	板目
W12	３区河道貝塚	〃	13.9	—	0.7	スギ	板目
W13	１区河道橋脚付近	漆器（蓋）	20.1	—	—	ケヤキ	つまみ部分は完形，黒漆，板目
W14	３区河道	漆器（椀）	(高台) 9.6	—	—	ケヤキ	黒漆，板目
W15	３区河道上層	漆器（椀）	(高台) 7.2	—	—	ケヤキ	黒漆，板目
W16	１区河道最下層	曲物	29.5		0.4	スギ	竹釘遺存，柾目
W17	１区河道橋脚付近	不明	27.2	6.6		アカマツ	板目
W18	１区河道最下層	箸形木製品	19.4	0.7	0.55	スギ	板目
W19	２区河道下層	〃	20.2	0.6	0.5	スギ	板目
W20	１区河道最下層	〃	20.6	0.7	0.5	スギ	板目
W21	〃	〃	20.7	0.5	0.5	スギ	板目
W22	１区河道下層	〃	21.4	0.6	0.45	スギ	板目
W23	〃	〃	23.8	0.6	0.5	スギ	板目
W24	〃	〃	24	0.7	0.4	スギ	板目
W25	〃	〃	24.3	0.6	0.6	スギ	板目
W26	１区河道最下層	〃	24.3	0.5	0.4	スギ	板目
W45	３区河道貝塚	〃	21.5	0.5	0.7	スギ	板目
W46	〃	〃	21.5	0.5	0.6	スギ	板目
W50	１区河道砂層（下層）	横槌	40.1	8.2	8.2	アカマツ？	心持ち
W51	２区河道下層	下駄	23	4	4.2	スギ	板目
W52	１区河道	〃	20.4	8	5.6	スギ	板目

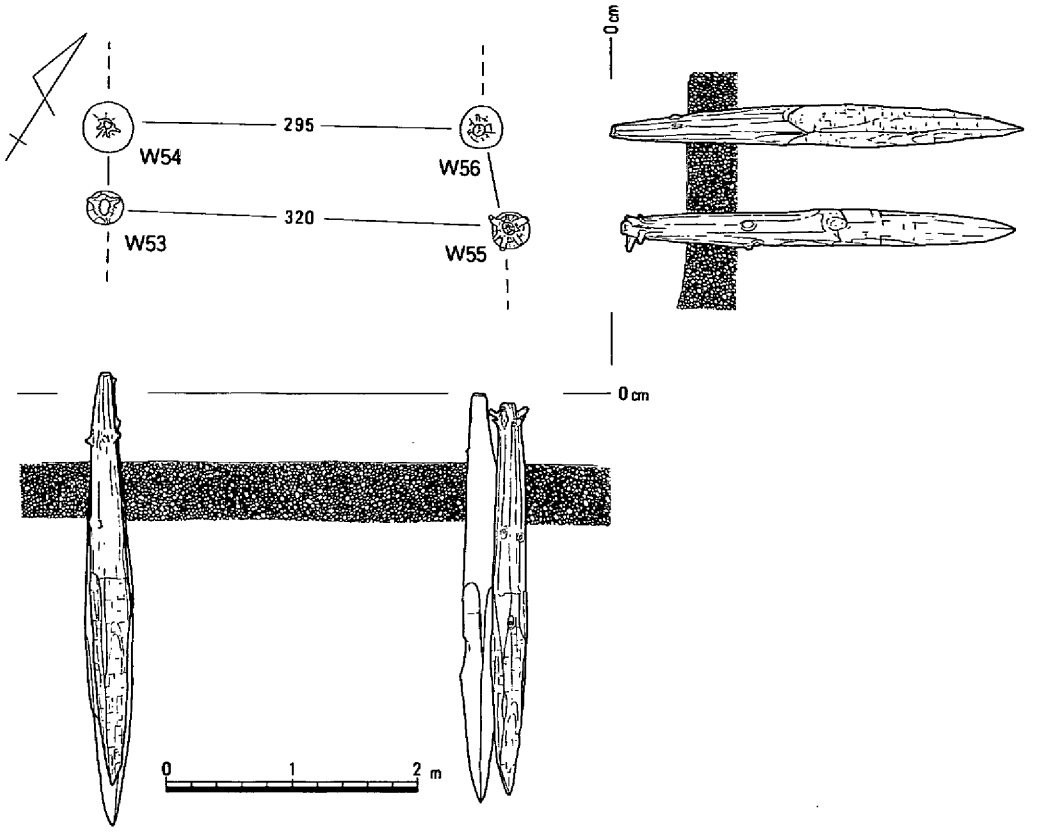


第33図　河道出土遺物（25）石製品・鉄製品（1/3）



た可能性が強い。Ｓ２・３は、薄い板状の砥石で凝灰岩の一種である。使用によって平滑になっている。Ｓ４は、４面が使用され撥形を呈している。石質は砂岩である。

Ｓ５・６は、滑石製の石鍋である。内外面に刃物状の工具による器面調整が行なわれている。Ｓ７は、壊れた石鍋の転用と推定され、保温性が高いといわれる滑石の特性を生かした「温石」として使



第34図　橋梁（1/60）

用されたものであろう。今日の携帯用懐炉のはしりといえる。

Ｍ６～８は鉄釘である。微高地も含め鉄製品の出土は少なかったが、鉄滓や鞴の羽口片の出土から付近で鍛冶が行なわれていたようだ。いずれも小型の部類に属す。

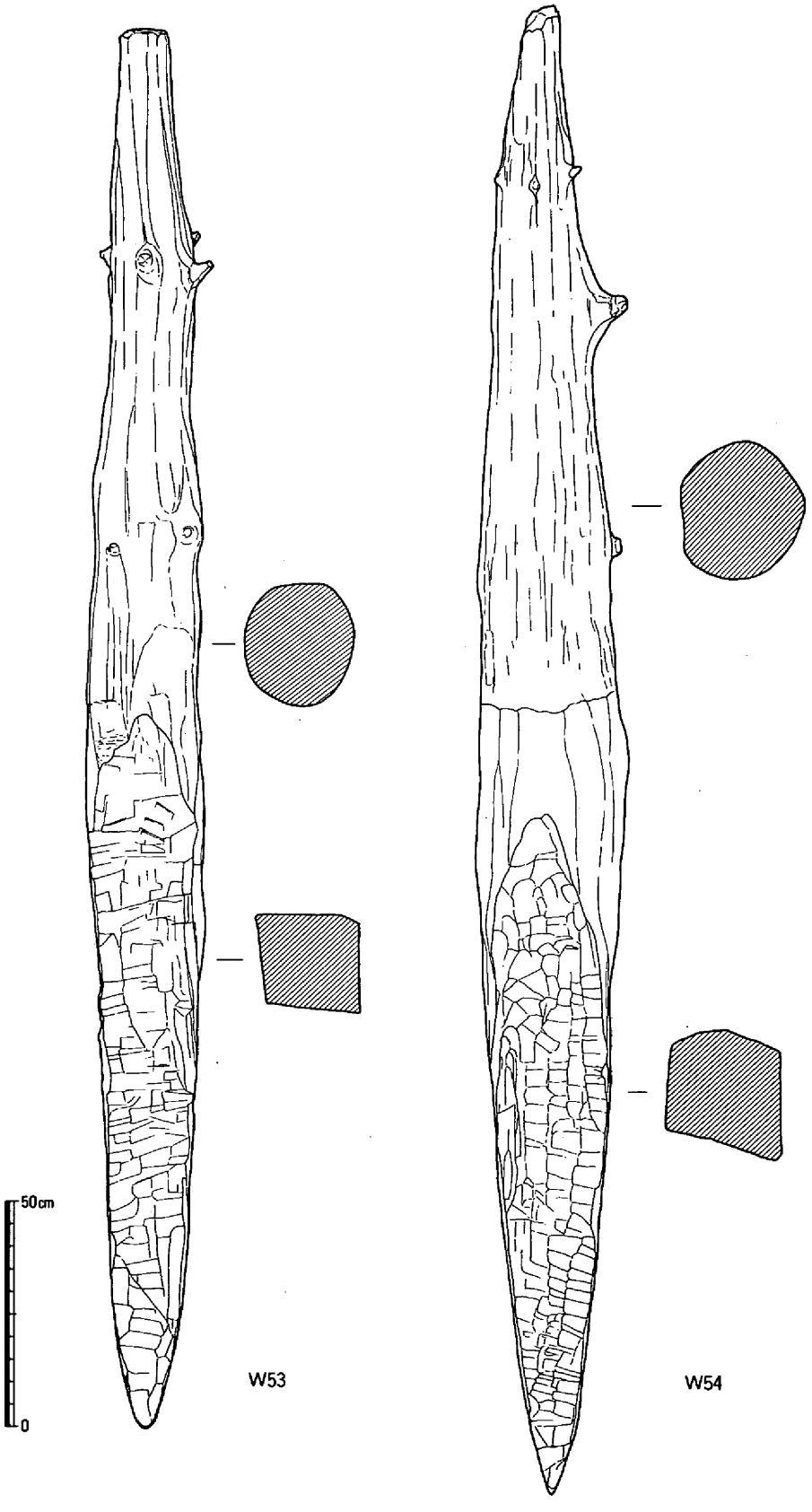
２．橋梁（第34～36図、図版13・14）

１区で検出された、河道に伴う巨大な遺構で、橋柱ともいうべき橋脚４本のみが遺存する。ＳＤ01とＳＫ04の間が南詰めとなることが、後になって判明した。第５図をみても、ＳＤ01の南辺には点線で示すように、柱穴列が並んでいるようにも見える。ＳＫ04との間の柱穴も門状となっていた可能性もある。橋脚には、アカマツが使用されている。当時としては、かなりの労力を注いで打ち込まれたことが推察される。橋梁の建築時期としては、河道肩Ｃの段階と考えるのが妥当であろう。ＳＤ01やＳＫ04、およびそれらの直下の河道出土遺物から推定すると、13世紀中頃から後半にかけての時期が考えられる。

橋梁は、W53～56の４本からなるが、大きさには多少のバラツキがある。W54が最大である。W55の上部には、アカマツ特有の枝が集中的に出る部位がある。本来は木表に隠れているものだが、水位の変化によって痩せたため露出したものであろう。

橋脚の樹皮は、ほぼ完全に取りのぞかれていたようである。下端は、４面の面取りが手斧によって丹念に行なわれ、先を尖らせている。橋桁がかかるとすれば、通行する橋上では優に３ｍ以上の幅が推定され、当時としてはかなり大きい橋であったことが想像できる。

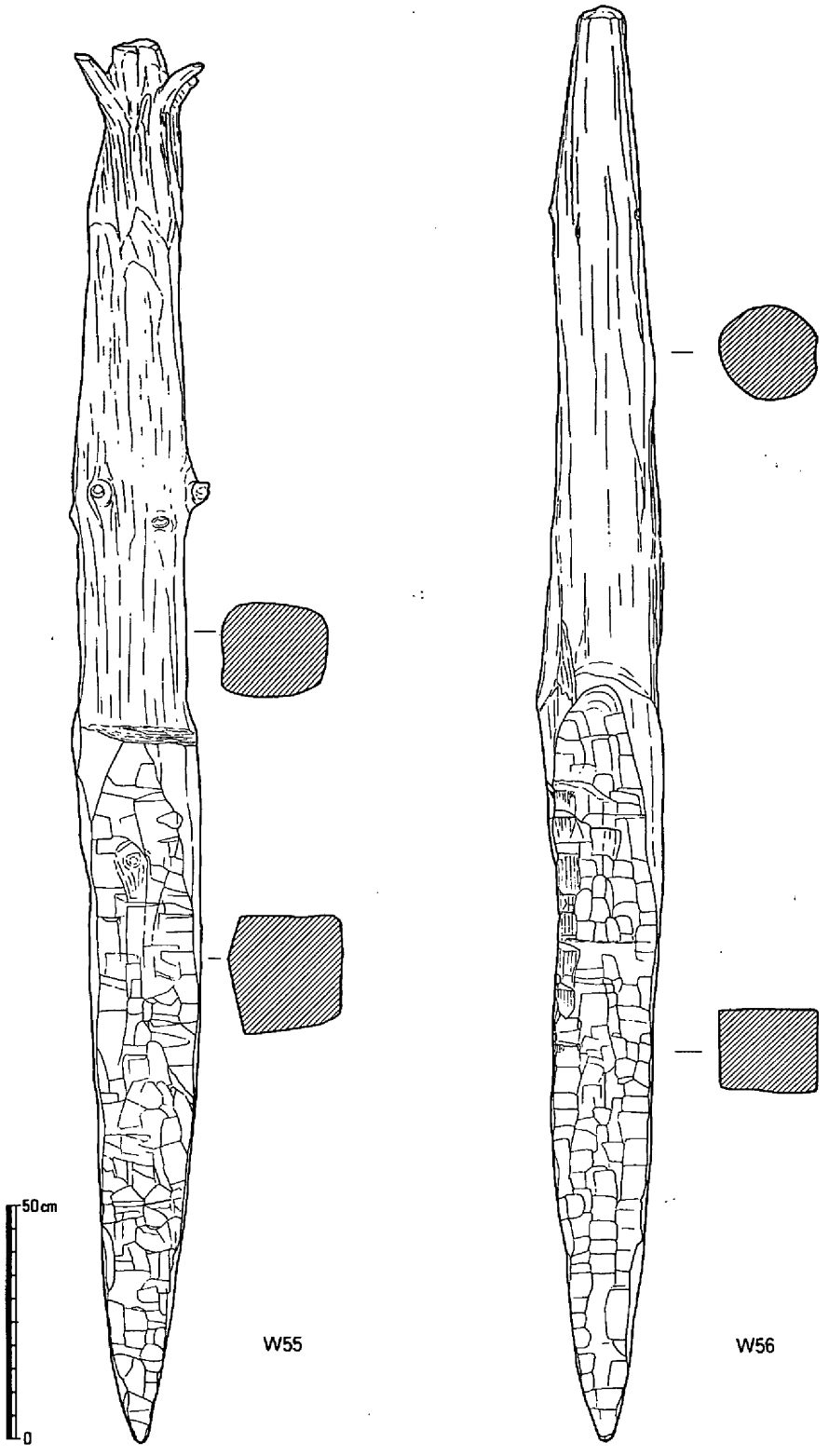
橋脚の１本の下部に、幅５cmほどのヒノキの樹皮を撚って作られた縄が絡みついていた。抜き取り



第35図　橋脚（1）(1/15)

の際に下部で確認したもので、西の方から流れついて絡んだ可能性がある。

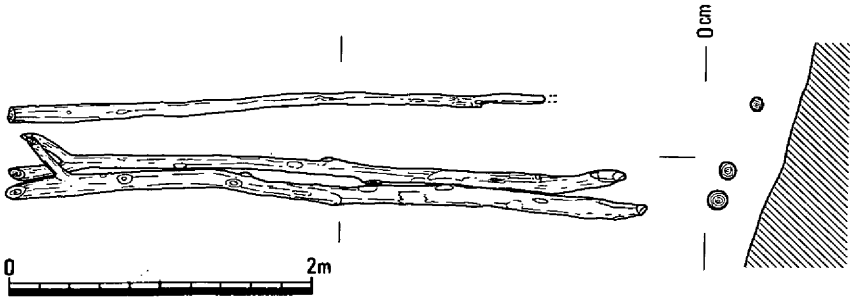
県内では、鹿田遺跡での検出例があるが、時期的にはこれに次ぐものである。(註14) また、河道内



第36図　橋脚（2）(1/15)

表２－(2)　木製品観察表

番号	出土地区・遺構(層位)	器　種	計測最大値（cm）			樹　種	備　考
			長(径)	幅(長)	厚		
W53	１区河道	橋脚	309	26.25	—	アカマツ	心持ち
W54	〃	〃	329.5	33	—	アカマツ	心持ち
W55	〃	〃	300.5	26.5	—	アカマツ	心持ち
W56	〃	〃	307	26	—	アカマツ	心持ち
W57	２区河道	櫂	97	10.8	3	クリ？	板目

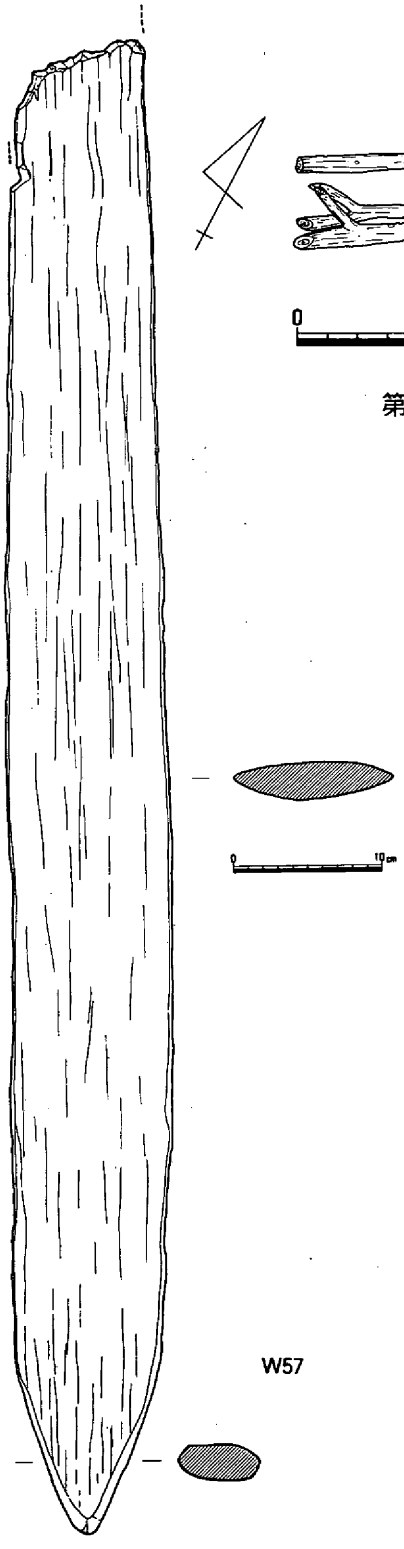


第38図　３区河道南法面木材出土状態（コナラ；1/50）

で多数確認された杭のうち、２区で見つかったW57（第37図、図版15－３）は、櫂の転用であることが推察される。さらに、河道内では、第38図に示すような流木もある。これは、樹皮を自然なまま残すがすでに枝打ちされて伐採されたものであり、上端は二股となっている。樹種は、周辺の山々で比較的多くみられるコナラである。（図版15－２）

３．掘立柱建物・柱穴列（第39～41図、図版３～５）

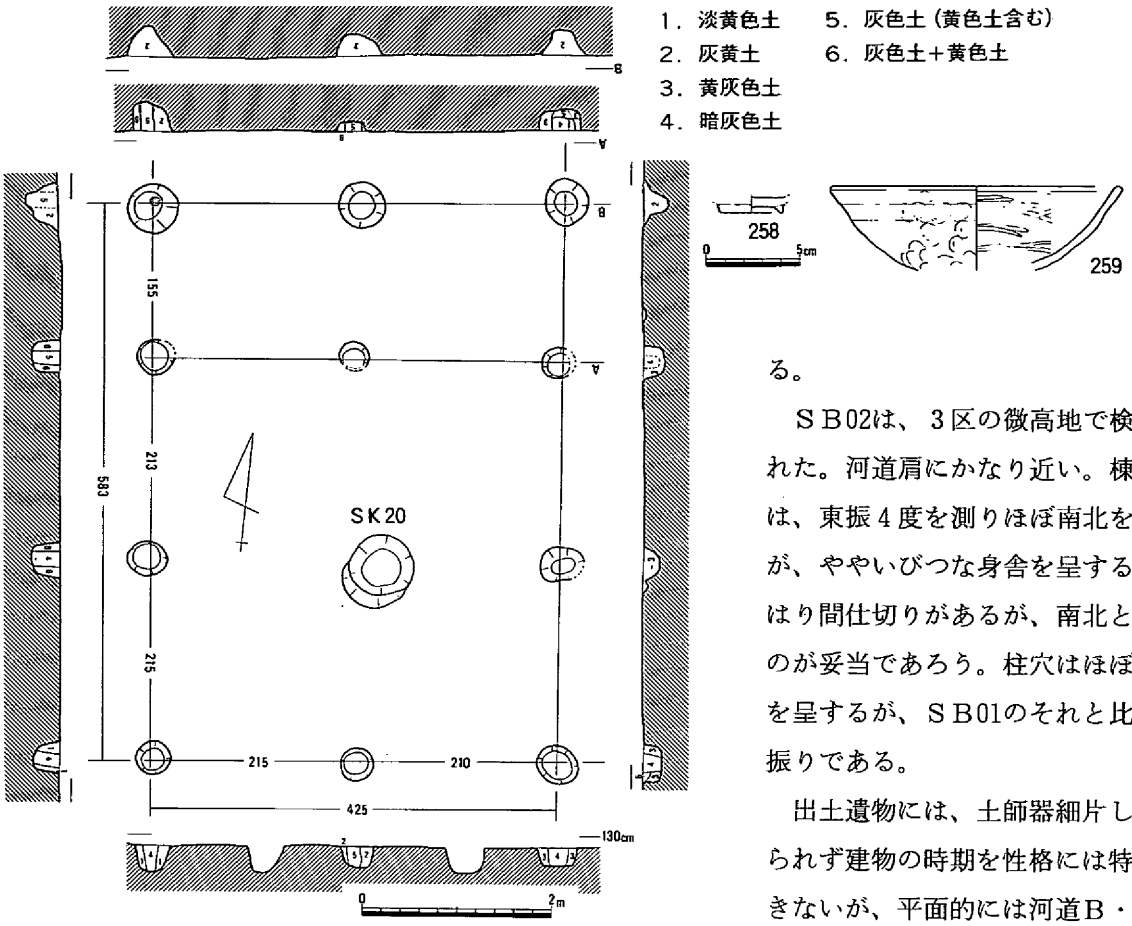
微高地部分から河道肩Ｃまでの広い範囲で多数の柱穴が検出された。当時、何らかの建物なり、塀や柵などの建築物を構成していたと考えられるが、建物を含めまとまりをもつことが確認されたのはわずかである。可能性があるものとしては、点線で結んだがせいぜい３本のまとまりがたしかめられるに過ぎない。その一番の原因は、すでに述べたように、微高地面は、百間川の築成・改修によって30～40cm以上の削平を受けておりかなりの柱穴が失われたことが推定される。おそらく、礎石などを使った建物があったとしても、その手がかりは完全に失われているとみてよいだろう。



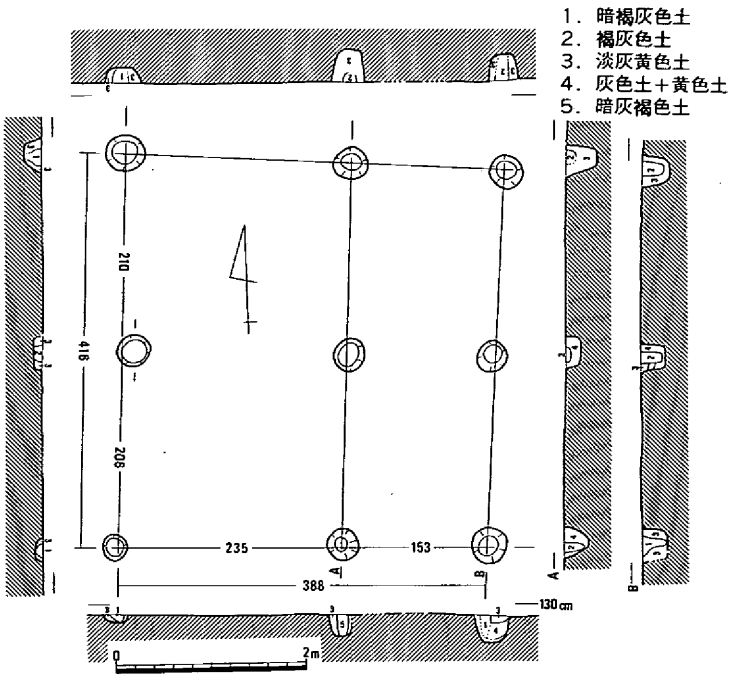
第37図　杭転用の櫂（1/5）

検出された柱穴のすべては、ほぼ円形を呈する。径約15～40cmほどのものがもっとも多い。半数以上に柱痕跡が残される。中には、抜き取り痕跡を残す柱穴もあるが、少ない。

ＳＢ01は、１区西方のやや柱穴の検出密度が高い部分でまとまった掘立柱建物である。柱穴はかなり不揃いであるが、柱通りは整然としている。規模は、桁行３間、梁間２間の一般的な住居と考えられる建物で内部に間仕切りがある。棟方向は、ほぼ南北であるが、５度西振する。ＳＫ20は、この建物の内部にあり、屋内土壙の可能性が十分にある。柱穴からの出土遺物には、258の土師器と259の瓦器がある。前者は、柱痕跡部分から出土したもので、建物の廃絶時期を示すと考えられる。したがって、鎌倉時代の終わり、13世紀末から14世紀初頭がその時期と推定され



第39図　掘立柱建物ＳＢ01・出土遺物（1/80・1/4）



第40図　掘立柱建物ＳＢ02（1/80）

る。

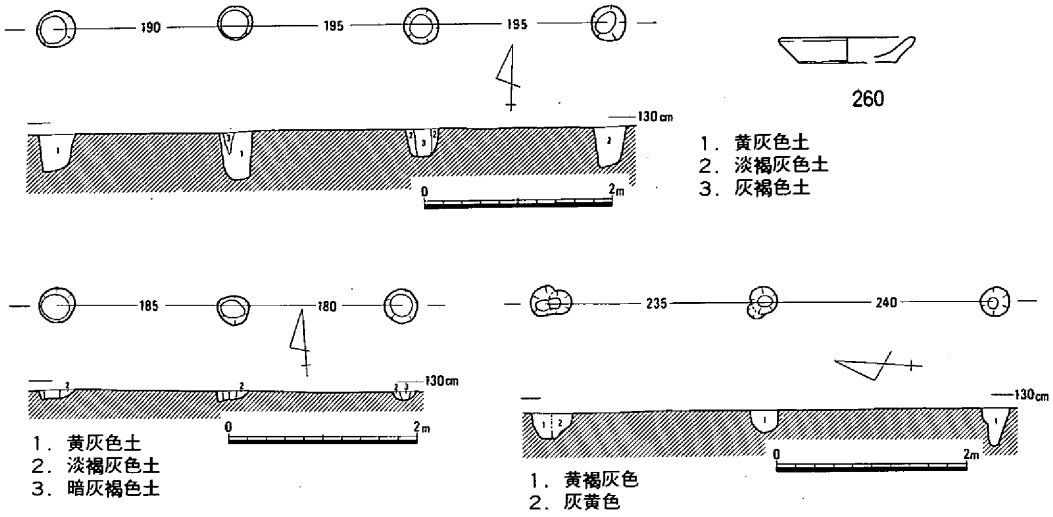
ＳＢ02は、３区の微高地で検出された。河道肩にかなり近い。棟方向は、東振４度を測りほぼ南北を示すが、ややいびつな身舎を呈する。やはり間仕切りがあるが、南北とするのが妥当であろう。柱穴はほぼ円形を呈するが、ＳＢ01のそれと比べ小振りである。

出土遺物には、土師器細片しか得られず建物の時期を性格には特定できないが、平面的には河道Ｂ・Ｃのどの時期とも矛盾しないが、削平を考慮するとやはりＳＢ01と同一時期に比定されよう。

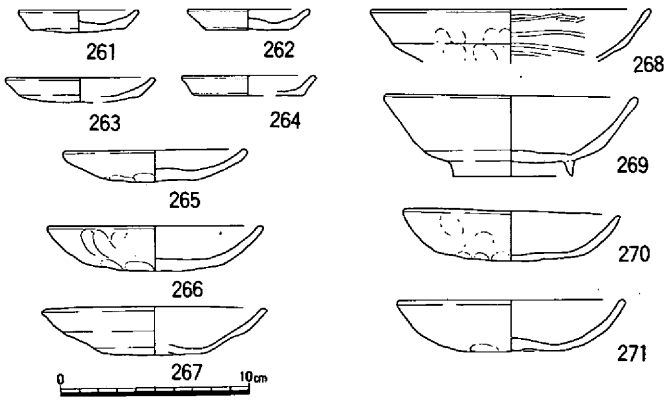
ＳＣ01は、ＳＢ01の北約６ｍに位置する、ほぼ東西を示す４本の柱穴からなる。柱穴は、直線的で塀あるいは、柵と想定される。出土遺物には、260の土師器小皿がある。

ＳＣ02は、ＳＢ01北側に位置する。３本の柱穴からなり、ほぼ東西方向に直線的に検出された。柱間距離は、６尺である。

ＳＣ03は、２区の河道肩に近い部分で検出された。河道肩Ｂよりも北に延びて検出されているので、明らかに河道肩Ｃの時期に伴う。西側で検出されているＳＤ02は、ＳＣ03が建物と想定した場合の雨落ち溝と考



第41図　柱列ＳＣ01～03・出土遺物（1/80・1/4）



第42図　柱穴出土遺物（土師器；1/4）

えることも可能である。河道に向けて流れているので、生活域からの排水溝とも考えられる。

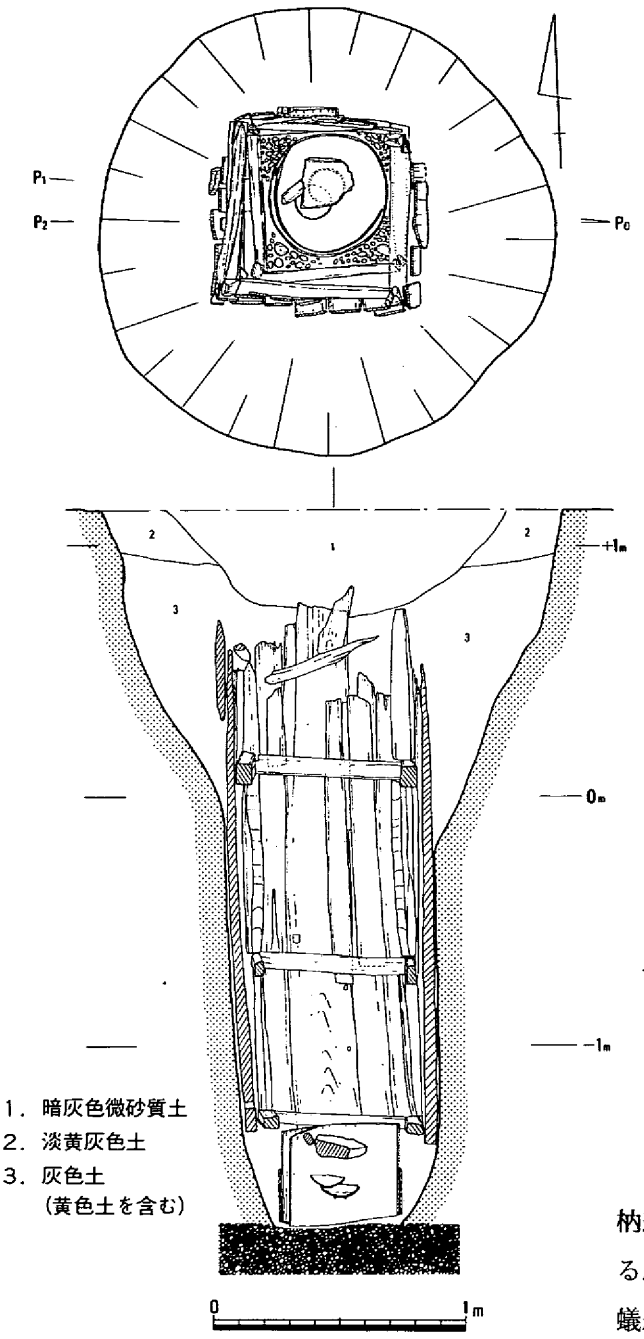
第42図は、すべて柱穴出土の土師器である。小皿261～264、皿265～267・270・271、椀268・269である。河道出土の遺物と時期的な範囲は包括される。なお、269・271は４区の柱穴から出土した遺物である。

４．井戸（第43～47図、図版８・９）

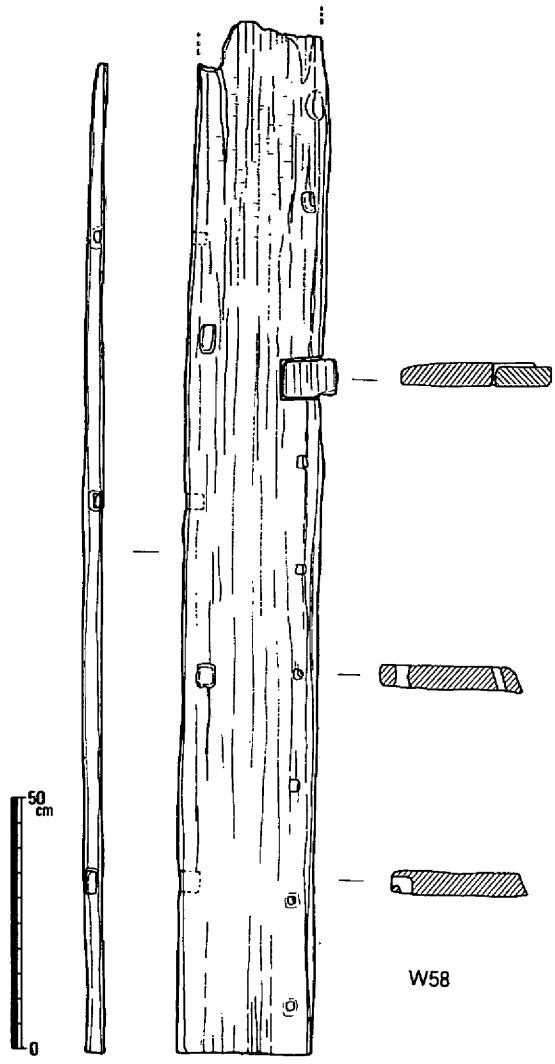
１区西端、ＳＢ01の西約10mで検出されたＳＥ01が唯一の井戸である。掘方は、ほとんど円形を呈しており、その大きさから当初より井戸の可能性が考えられた。掘方のほぼ中央に井側部分が木組みで構築されていた。平面形は方形で、いわゆる「方形隅柱横桟縦板型」と呼称される。（註15）この形式の井戸としては、百間川米田遺跡で検出されている井戸を含めても残存度がきわめて高く、深い井戸である。

深さや木組みの構造から、崩落の危険を回避するために、発掘には時間をかけ、まず井戸の最終埋没状況を確かめながら慎重に作業を進めた。井戸の掘方の南半分を階段状に掘り下げた後、先に南側の井側を取り外し、井底までの精査を行なった。最終埋積の状況は、第43図に掲げるように井戸上部の井桁は存在しないが、湧水の枯渇か何かが原因となって埋まり、井戸が放棄されたのち直上部分がたわんだようである。上位から落下した木材も何点か見つかっており、構築当初は、井側もさらに高く、横桟も上部にさらにもう一段あって、ようやく地表の井桁に到達したのではないかと推察する。

まず、井底から構築の順序を追ってみよう。湧水点を見つけ、３ｍあまりの深さまで掘り下げる。そして、転用された曲物を据え付け井筒とし、さらに細長い曲物を外側に箍状にはめこんで固定する。掘方下部と井筒の間に小礫を詰め、濁水の流入を防ぐ。井筒の上位の高さで、第一段目の横桟を



第43図　井戸ＳＥ01
(P_1-P_0は土層断面, P_2-P_0は井側断面; 1/30)



第44図　井側転用材 (1/15)

枘組む。その外側に井側の縦板材の一部を立てる。一段目の横桟の隅に隅柱を立てる。その際、蟻継ぎなどの手法はとられておらず、ただ上部を支えるだけの目的のようである。さらに上部に二段目の横桟を組む。さらに縦板を追加して井側を強化し掘方からの汚水の流入と井側の内傾を防ぐ。さらに三段目を組む。以上の作業工程の最終段階に、井桁の構築が行なわれる。

井筒の曲物以外に使用された木材は、すべてアカマツである。水に強いといわれ、橋脚材も同一である。W58は、井側の北側部分に使われた部材で、船舶の舷側に使われていたものが転用されたのではないかと推定している。井側の要となる部分にはこのような頑丈な木材が使われているが、隙間や裏側には、折板（剝板＝へぎいた）といわれる薄い板を上方から丹念に差し込んでいる。これらの板材は、合計30余枚を数える。

井筒W59は、元は大きな曲物として使われていたものが転用されたと推定され、井底の大きさに合

わせていったん切断し、外周に手ごろな大きさの曲物をはめこんで埋置されたものである。樺桜を使った製作時の綴じ合わせは元のままである。蒸煮したスギ材を折り曲げて製作され、下端には底板を固定する竹釘を打ち込んだ多数の孔が並ぶ。内面には鋭い刃物で無数の刻線が切り込まれている。出土遺物には、最終埋積の第１層と、掘方の埋め土、井筒内部の３種類に大別される。白磁272・瓦器273・278、土師器274～277、東播系須恵器279が第１層から出土している。掘方からは、白磁280、土師器281・282が出土している。上部から井底までの中間層からは目立った遺物はない。井筒の内部からは、瓦器皿283、土師器椀284、瓦器椀285・286が出土している。284・285・286は重なって出土している。また、三面の使用が顕著な、砂岩製の砥石Ｓ８も井筒内から出土しているほか、井筒内の埋積土を水洗したところ、巻き貝（タニシか）の蓋やカエルの骨が発見された。

井戸の年代は、最終埋積の遺物と井筒内の使用中の遺物とは大きな差はなく、鎌倉時代、すなわち13世紀中頃前後の時期が推定される。

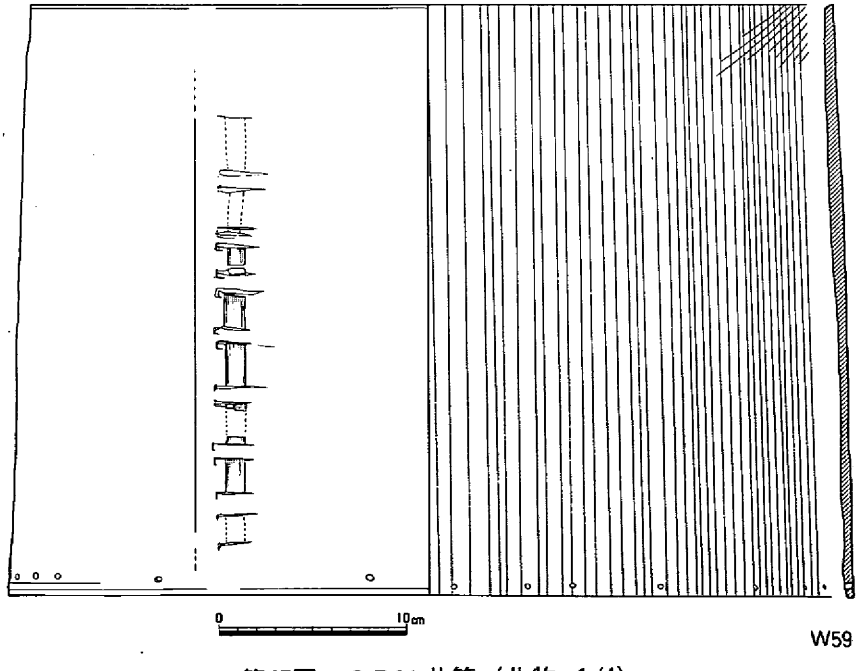
５．溝・土壙（第48～51図、図版６・７）

１区から２区にかけての微高地には、２条の溝と29基の土壙が検出された。また、第５図に示すようなＳＫ03に切られるＬ字形を呈する溝状遺構が検出されているが、性格は不明である。

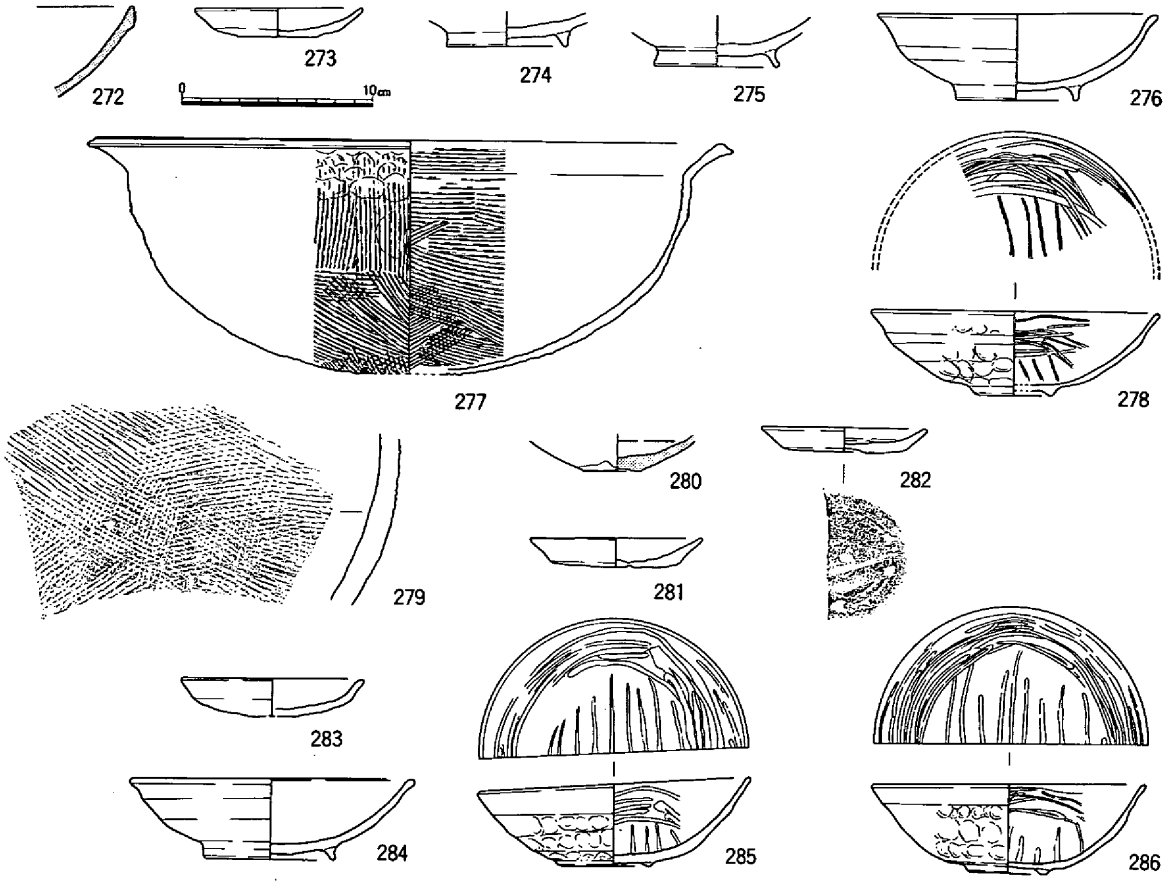
ＳＤ01は、すでに触れたようにＳＫ04との間にから橋梁が架設されていることから、河道から南側の集落を区画するような溝と考えられる。西端はやや屈曲するが、浅くなって終わる。東端は、徐々に浅くなって検出不能となる。微高地全体の削平を考えれば、たとえ存在しても検出困難であろう。東方の延長部の２区にＳＤ02が検出されている。ＳＤ01とほぼ直行し、ＳＣ02との関連もさることな

表２－(3)　木製品観察表

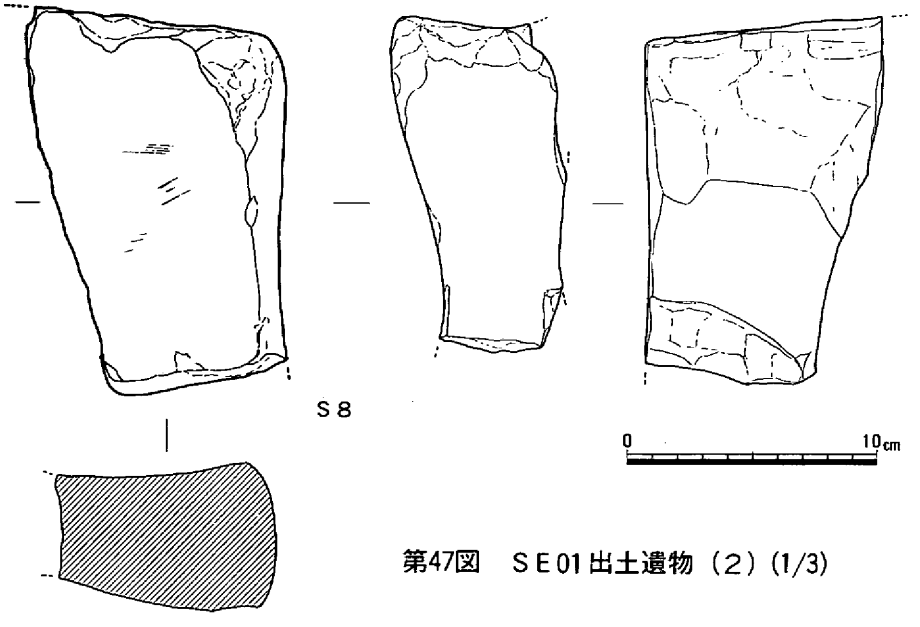
番号	出土地区・遺構(層位)	器　　種	計測最大値（cm）			樹　種	備　考
			長(径)	幅(長)	厚		
W58	１区ＳＥ０１	船舶材（井側転用）	207	27.5	5.3	アカマツ	板目
W59	１区ＳＥ０１下層	曲物（井筒転用）	45	31.5	0.6	スギ	板目



第45図　ＳＥ01井筒（曲物；1/4）



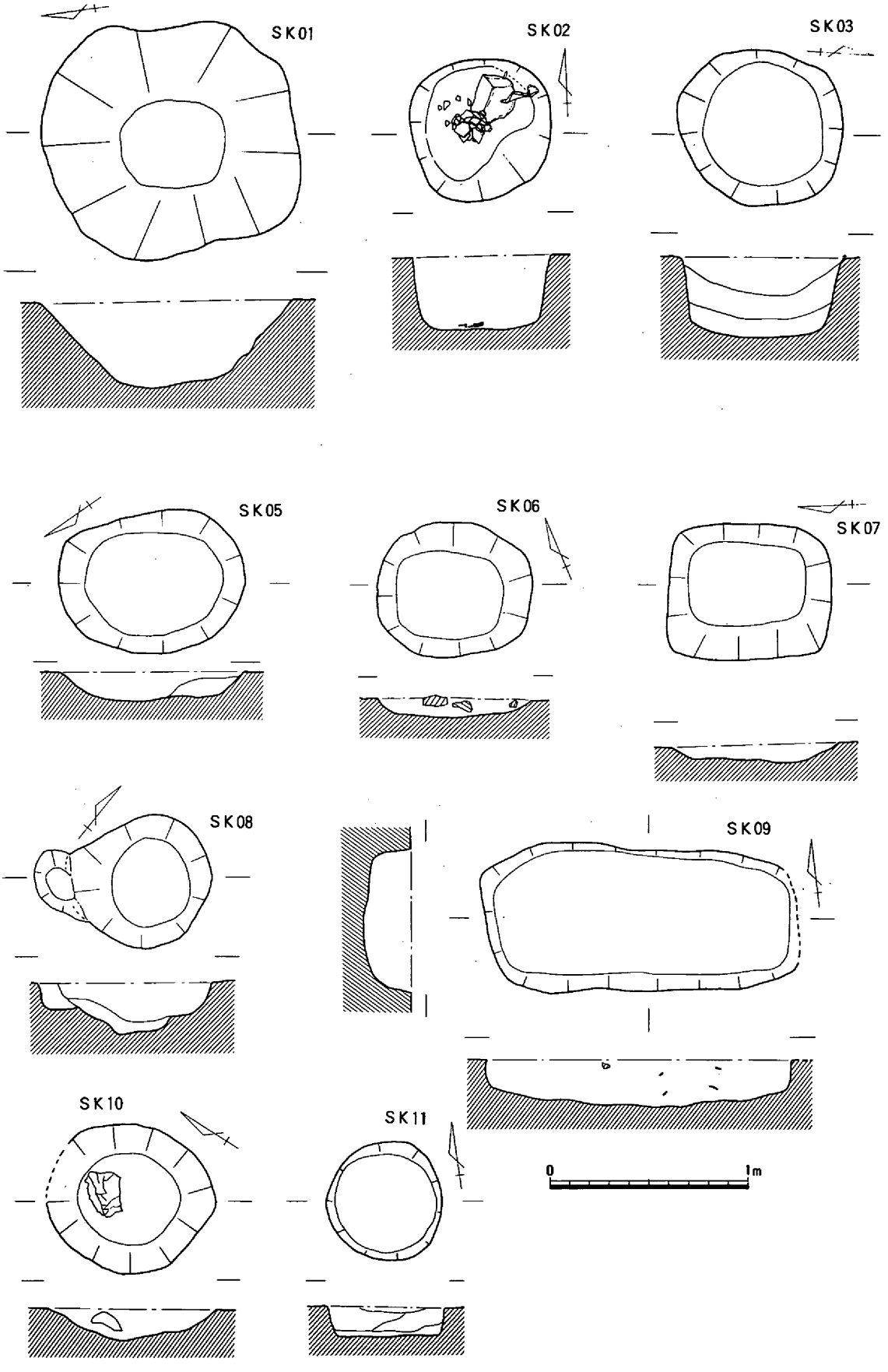
第46図　ＳＥ01出土遺物（１）(1/4)



第47図　ＳＥ01出土遺物（２）(1/3)

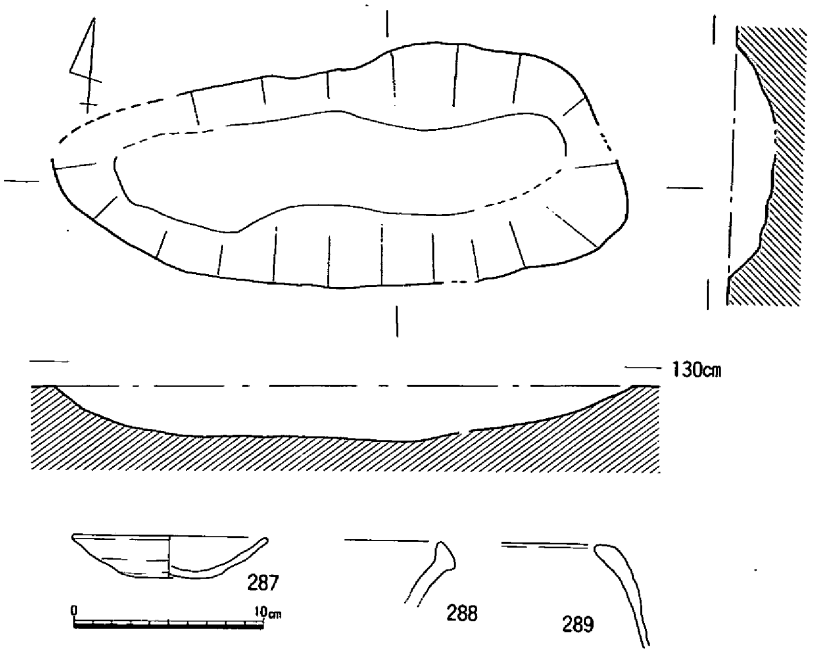
から、微高地から河道への計画的に配された排水溝の可能性がある。

土壙は、１区の微高地部分での検出がほとんどである。特に、ＳＢ01の周辺に多い。総数29基の土壙を平面形から分類してみると、Ａ：円形ないしほぼ円形を呈するもの、Ｂ：方形ないし隅丸方形を呈するもの、Ｃ：長円形あるいは、隅丸長方形を呈するものに大別される。うちＡにあたるのが22基



第48図　土壙実測図（1）（レベルは130cm；1/30）

あり、75%を占めている。Aに分類されるものでは、掘方が擂鉢状に窪むものと、ほぼ垂直に下降する、貯蔵穴のような形状を示すものに二分される。後者には、ＳＫ20のように建物の屋内土壙の可能性があるものや、ＳＫ17のような井戸の可能性がある物も含まれる。Bは、ＳＫ01・ＳＫ07など少数である。Cは、中世の遺跡でしばしば墓として検出される平面形であるが、いずれも埋葬の形跡や骨などの出土は確かめられなかった。なお、いずれとも分類しがたいものに、ＳＫ21があり、不整な平面形が観察される。



第49図　土壙実測図（２）ＳＫ04・出土遺物（1/60・1/4）

ＳＫ04は、検出された土壙のなかでは最大で、ＳＤ01や橋梁遺構と関連性をもつ。不整な長円形を呈し、底面は舟底状となる。西端へはやや細くなってゆくが、もう少し延びる可能性もある。出土遺物には、土師器皿288、東播系鉢288、瓦質の鉢289がある。

検出された土壙も、他の遺構と同様、40cm前後は削平を受けていることを考慮する必要がある。もっとも出土遺物が得られ易い土壙の上層が失われていることから、極端に遺物が少ない遠因であろう。出土遺物には、第51図に掲げるような土師器片が大半を占める。一般的に、土壙の埋積土中には炭や焼土塊・小礫の出土が目立つが、遺物はきわめて少量であった。

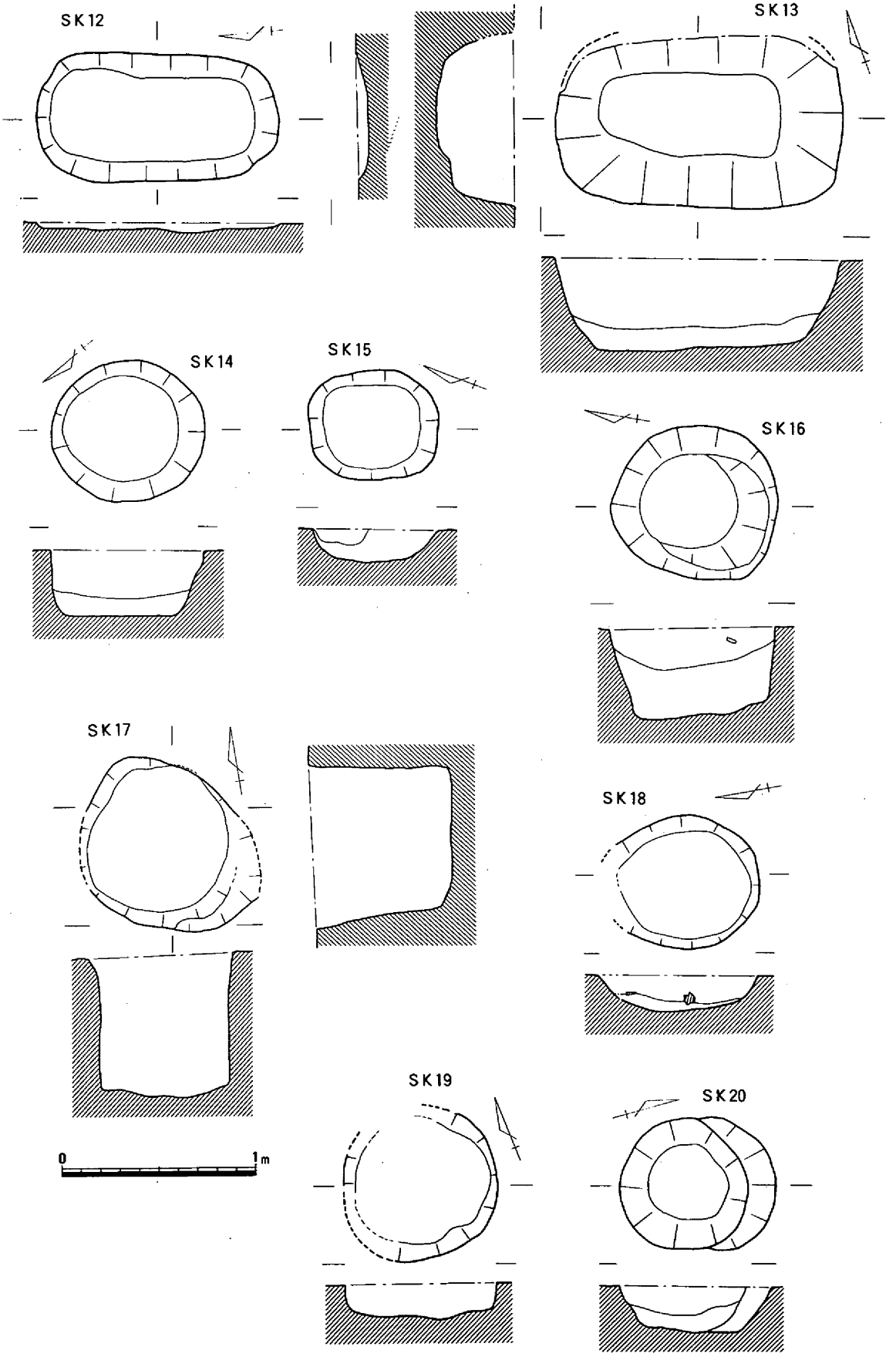
290～292はＳＫ03から出土した土師器椀である。291・292には、体部に篦ミガキが加えられており、13世紀前半に比定されるが、土壙が河道肩Ｂの北側で検出されていることから、河道肩Ｃの形成時期までの期間が比較的短期間であったことも考えられる。293はＳＫ09、294はＳＫ19、295はＳＫ21、296はＳＫ20から出土した皿・小皿である。

土壙や河道からは、しばしば鉄滓片や鞴の羽口の細片のほか、赤変した焼土の小塊が出土しているが、微高地部分で鍛冶炉や炉床などの施設の痕跡は検出できなかった。鉄滓は、錆付いたような赤褐色を呈するものが多く、小鍛冶に伴うものとみてよいだろう。鉄釘の出土はわずかであったが、河道出土のさまざまな木製品に見られる切削や加工を可能とする、各種の鉄製工具の存在が想定される。

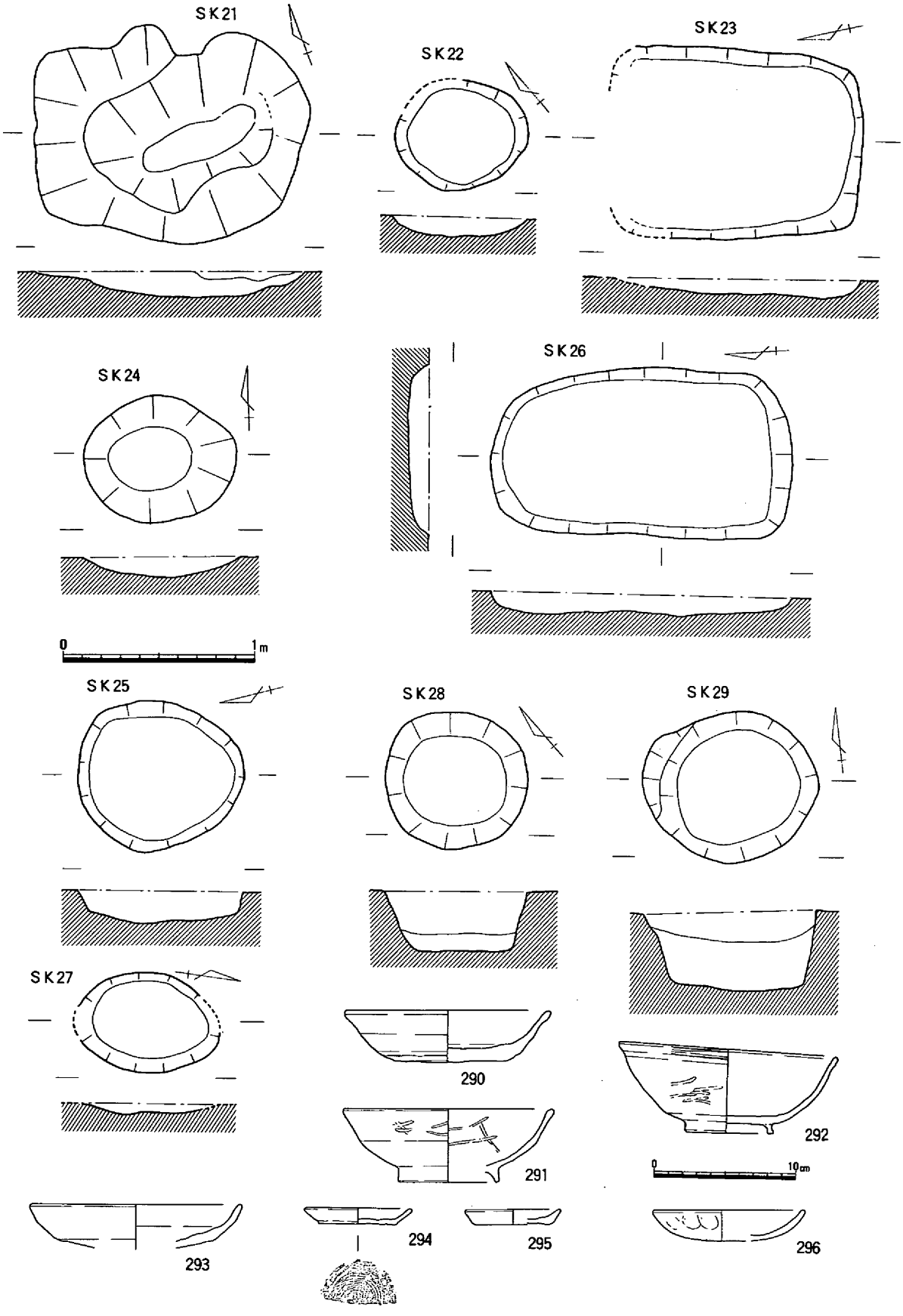
第３節　４区の調査（第52～54図、図版18・19）

４区には、１～３区に建設される排水機場からポンプで百間川の中に排水する、送水管と水量を調節する、吐き出し樋門が設けられる場所である。

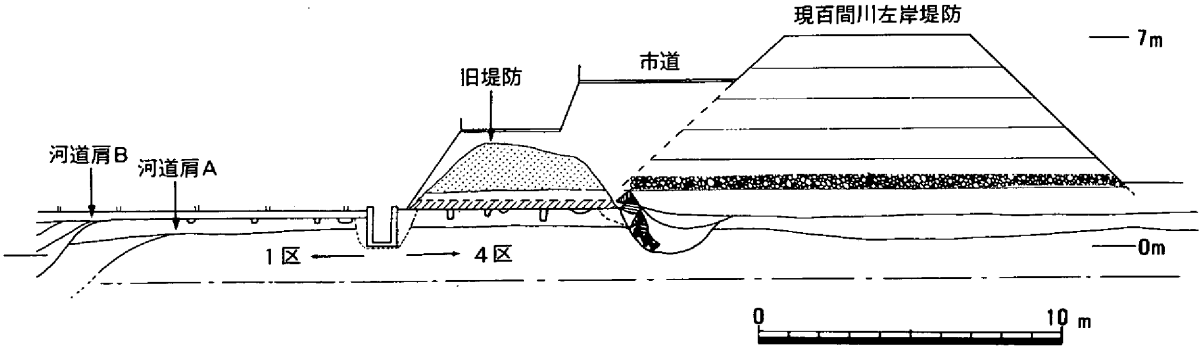
調査は、１～３区の調査終了後、堤防切断、市道の付け替え後まもなく実施する予定であったが、



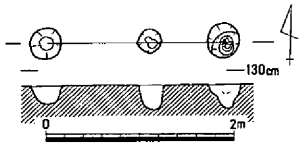
第50図　土壙実測図（3）（レベルは130cm；1/30）

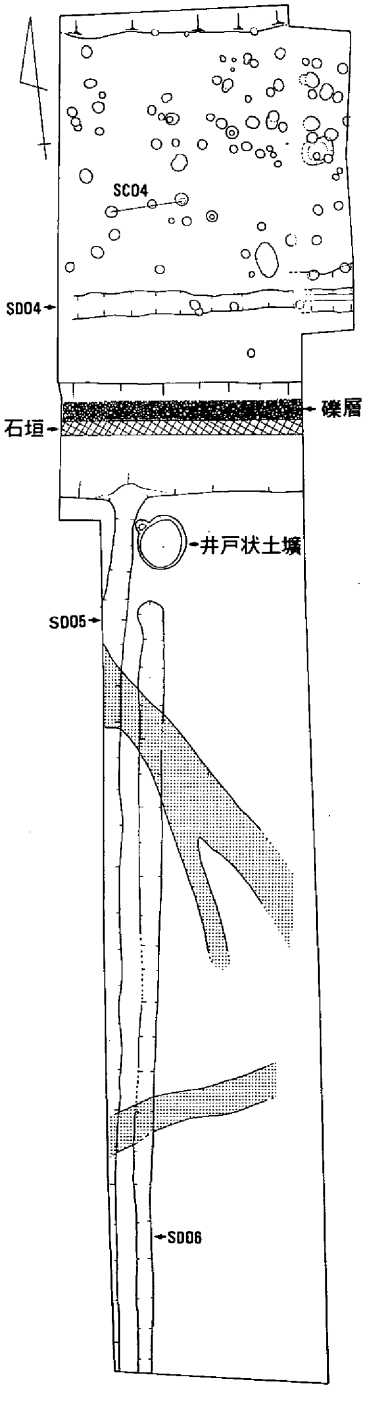


第51図　土壙実測図（4）出土遺物（レベルは130cm；1/30・1/4）



第52図　1～4区縦断模式図（1/250）





第53図　4区遺構図・SC04（網目は溝状たわみ；1/200・1/80）

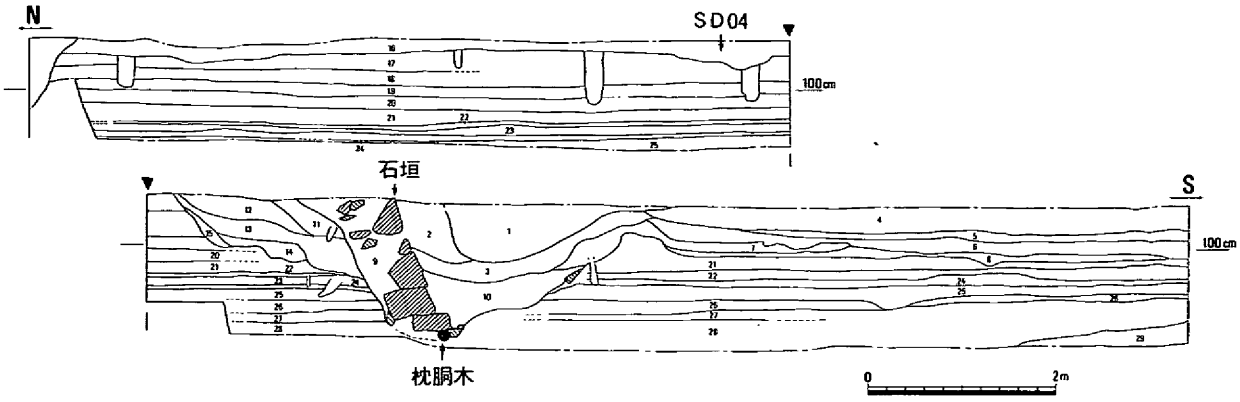
諸般の事情で延び延びとなり、年度末の3月になってようやく開始の運びとなった。

調査区は、北端の最大幅約8m、南端で約5.5m、全長はほぼ南北で36mを測る長細い調査区である。調査区の東西の両側は堤防・市道の断面が迫っており、北側には付け替えられた市道が供用されているため、排土場所は南端の道路部分の一ケ所のみに限定された。

調査は、まず重機による最初の遺構面ないし、包含層上面の確認作業を行った。この段階までは、施工業者には堤防内側の道路面までのレベルで掘削は終えられていた。

1区で検出された微高地が南へどこまで延びるかが、二次調査の課題でもあった。第52図に示すように、東側の市道・堤防の切断面には、古い時期の堤防がくっきりと現われている。現状で幅6m、高さ2m前後で黄褐色の土のみで形成される。この断面の表面には多数の土師器の破片が現われており、炭や焼土も含まれることから、北側と南側の微高地部分の表層すなわち、包含層が使われている可能性が強い。したがって、この旧堤防直下部分には包含層がほぼ完存しているのである。

この旧堤防から南側は、幾度となく襲った洪水や増水のたびに修復が行なわれた痕跡が残されている。上部は、新堤防建設の際破壊されて不明瞭であるが、いったん溝を掘った後、下部に枕胴木を敷いて根石を置き、その上に3～5段の石垣を積んでいる。石は花崗岩である。かつては、かなり上まで積み上げられていた可能性がある。石垣の南側には溝があり、排水のため（用水も兼ねるか？）機能していたようである。土層断面図には、徐々にう



1．淡灰褐色土(埋土)
2．青灰色土
3．灰青色土(縞状堆積)
4．暗灰色土
5．暗黄灰色土
6．暗褐灰色土
7．灰色土
8．灰色土(水田層)
9．暗灰色土
10．灰色土・黒灰色土・ブロック土
11．青灰色土
12．淡褐灰色土
13．褐灰色土
14．暗灰色土
15．灰褐色土
16．灰黄褐色土
17．淡灰黄色土(中世基盤層)
18．黄灰色土
19．淡黄灰色土(微砂)
20．明黄灰色土
21．灰青色粘質土
22．黒灰色粘土～青色粘土
23．暗黄灰色粘土
24．黄白色微砂
25．灰黒色粘土
26．黒青色粘土
27．青色粗砂
28．暗灰青色土
29．黒青色砂

第54図　４区東壁土層断面図（1/80）

まっていった様子がわかる。第54図の第10～３層にかけては、ガラス瓶・瓦片を含む近世～近代にかけての遺物が多く、後絵付けの陶磁器も目立つ。１層では、現代のごく新しい遺物が出土している。

微高地部分では、海抜1.4mの明灰黄色の微砂質土面が中世の生活面をなし、１～３区と同様である。しかし、レベルはかなり高く、柱穴など50cm以上の深さまで掘り込まれたものがある。この旧堤防下部は、本来の遺構面が良好に残されている部分といえよう。包含層も30～40cmあり、土師器椀・皿のほか炭・焼土片も多くみられる。概ね13世紀中頃から後半にかけて比定される。

ＳＣ04は柱通りが東西でサンプル的に実測したものである。両端の柱穴間は、７尺を測る。掘立柱建物の一部の可能性もある。

ＳＤ04は、ほぼ東西方向の溝である。断面形は凸レンズ形を呈し、浅い。東端の最大幅では１ｍ以上を測る。このような浅い溝は、１区では削平によって当然検出不可能であったと考えられる。出土遺物には、土師器細片のみが多数出土している。

石垣の南側では、それに伴う東西方向の溝から浅い溝ＳＤ05が派生する。暗青色の砂質土が埋積する。ＳＤ06は、農耕用の井戸（野井戸）から派生する溝と考えられ、南方に下降する。いずれも近代の遺構である。

網目で示す溝状部分は、かなり古い時期すなわち、弥生時代以前のたわみ状の溝と考えられ、増水・洪水などの出水が流れた自然流水路（水みち）の痕跡ではないかと理解している。深さはいずれも20cm前後で、埋積土の灰黒色粘土中には、出土遺物や炭などの生活遺物はまったく見当らない。この溝の検出面までの層序はほぼ水平堆積を示し、微高地下部とほとんど同一な土層である。このことから、４区の調査範囲では、中世の微高地から低位部あるいは、河道に地形が変化する部位は確認することができなかった。つまり、旧堤防の造成やそれに伴う土の集積作業は、周囲の中世包含層やその直下の黄色基盤層の土が使われ、遺構は削平されて消滅したのではないかと理解できる。

註

（註１）伊藤　晃「窯業－中世窯業生産」『岡山県の考古学』（近藤義郎編）吉川弘文館　1987年。早島式土器について、学史的に触れられ、製作技術にも言及される。呼称についてもさまざまであるが、本稿では土師器とする。製作方法について筆者は、瓦器椀と同じように内型による製作がなされたとする意見を支持するものである。詳細については、省略するが下記の文献などに、製作方法や分類・編年（時期区分等）研究が進められている。

①神谷正義「高台付椀に関する二・三の整理」『三手（庄内幼稚園）遺跡発掘調査報告』　岡山市遺跡調査団　1981年。

②福田正継「瀬戸内海中部北岸域の土師質椀について」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会　1985年。

③鈴木康之「鹿田遺跡の中世土器について」『鹿田遺跡Ｉ』「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988年。

（註２）（註１）文献参照。

（註３）岡田　博・福田正継・武田恭彰・田中　寿ほか「亀山遺跡発掘調査報告書」（山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69』　岡山県教育委員会　1985年。

（註４）備前焼については、下記の文献を参考にした。

①間壁忠彦・葭子「備前焼ノート(1)～(3)」『倉敷考古館研究集報第１・２・５号』　倉敷考古館　1966～1968年。

②伊藤　晃・上西節雄「備前」『日本陶磁全集10』　中央公論社　1977年。

（註５）（註１）伊藤　晃「窯業－中世窯業生産」『岡山県の考古学』（近藤義郎編）。従来の発掘・研究成果がまとめられている。

（註６）本稿では、東播系と総称するがおもに魚住焼である。下記の文献を参考にした。

①大村敬通・水口富夫「魚住古窯址群」『兵庫県文化財調査報告書　第19冊』　兵庫県教育委員会　1983年。

②寺島孝一「魚住古窯跡群発掘調査報告書」　明石市教育委員会・平安博物館　1985年。

（註７）瓦器については、下記の文献をおもに参考にした。

①白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究54号』　1969年。

②橋本久和「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』　高槻市教育委員会　1980年。

③尾上　実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』　藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会　1983年。

（註８）平井泰男「中世の遺構・遺物について」『百間川原尾島遺跡２』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56」　岡山県教育委員会　1984年。本書に原尾島遺跡出土の中世遺物についてまとめられ、他の遺物についても参考にし、比較・検討した。

（註９）（註４）および（註８）を参考にした。

（註10）下記の文献をおもに参考にした。

①横田賢次郎・森田　勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館　1978年。

②石松好雄・高倉洋彰ほか「太宰府市史－考古資料編」　太宰府市　1992年。

（註11）大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁資料館　1984年。

（註12）最近出土したものに、佐賀県神埼郡神埼町所在の城原三本谷南遺跡例がある。平安時代後期に比定される多数の卒塔婆が、小川か沼地のそばで出土している。表面にはすべて「南無」の名号が墨書されている。（佐賀新聞　1993年２．27報道）

（註13）渡辺　誠「ヨコヅチの考古民具学的研究」『考古学雑誌70－３』　1985年。

（註14）山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅱ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第４冊』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1990年。米田遺跡出土例よりも古く、全体に及ぶ面取りは細かい。橋桁を通す方形の枘孔が穿たれている。

また、各地で発見された橋梁遺構については、下記の文献も参考にした。有名な滋賀県瀬田唐橋遺跡についても「道路と交通施設」の項で触れられている。季刊考古学第46号（特集古代の道と考古学）雄山閣出版株式会社　1994年。

（註15）井上　弘により、米田遺跡で検出された井戸が分類・整理されている。「百間川米田遺跡検出の井戸について」『百間川米田遺跡（旧当麻遺跡）３』－「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74」　岡山県教育委員会　1989年。

第4章　結　　語

前章で今回の発掘調査の成果の概要を述べた。以下、それらの要約と、今後の問題点や課題について触れておきたい。

まず検出された遺構からみると、遺跡は河道とその南側縁辺に広がる、いわばウォーターフロントに形成された集落であるといえよう。当時は内陸深く入りこんだ瀬戸内海にも近い位置を占めており、大規模な貝塚の検出など漁業とも密接な、港にも至近な村落ともいえる。

本遺跡で検出された河道は、河幅は不明であるが、最大検出幅は約15～20mを測り、かなり大きい河道であったことが推察される。橋梁遺構の存在によってもその大きさが知れよう。橋梁の架設は、当時としては大変な労力を費やしたであろうが、集落の単位で労力が結集されて架設されたかどうか、今後の史的研究が待たれる。いずれにせよ、当時の土木・建築技術の一端を物語る貴重な遺構である。さかのぼって行基の実践的な布教行為を思い起させる構築物でもあり、古代末期の「末法思想」の背景も考慮すべきだろう。単なる建築遺構ではなく、宗教的な遺構、精神文化の側面からも接近すべきかもしれない。（註１）いうまでもなく、橋が架けられる場所は交通の要衝であり、それによって恩恵を受ける多数の住民が近くに居住していることなどがあげられる。人々が、日々頻繁に行き交う場であり、商業活動も行なわれる一方、出会いや別離の場でもある。橋梁近くから出土した小型卒塔婆は、往来の激しい場所に立て、大勢の人々の供養を受けさせ、成仏を願ったものであろう。（註２）河道はまた、タイムカプセルのように鎌倉～室町時代の多数の遺物を含んでいた。集落で人々が日常的に使用した数多くの土器類は、鍋・椀・皿などの什器のほか、中国製の陶磁器や瓦器・東播系須恵器を含み、外国航路と瀬戸内海の密接な関わりや、全国各地との盛んな交易を示している。

微高地上では、掘立柱建物は２棟検出されたにとどまったが、削平によりまとまりが把握できなかった柱穴が多い。ＳＢ01・ＳＢ02のような２×３間の小規模な建物が当時の一般的な民家であった可能性が強い。また、ＳＥ01は、残りの良い木組みの井戸で当時の優れた木工技術をあますところなく示している。河道出土の木製品とあわせ、目的・用途に応じて樹種を選択し、鉄製工具で加工する技術が完成されるのも、この中世であろう。

多くの出土遺物を目のあたりにしながら、細部に立ち入った編年作業については行なうことができなかった。150箱を越える土器についても、水洗・復元作業を経て実測に移行し、遺物写真撮影に至る報告書作成にかかる実務的な作業は、時間的制約の中では、さまざまな類例の検討や比較作業を行なう余裕はまったくなかった。このような状況で、できるだけ多くの原資料を掲載するという目標は達成されたと思う。遺物に関する評価や検討作業は、今後も百間川遺跡群の成果とあわせ、再評価をすべきと考えている。多くのかたがたのご教示を受けながら、種々の問題が残されている。これは、まずひとえに筆者の非力によるが、今後の課題として研究・調査に取り組みたいと考えている。

註

（註１）報告書作成中に、橋に関する興味深い書物と出会った。平林章仁「橋と遊びの文化史」である。実にさまざまな啓発を受けた。（白水社　1994年。）

（註２）澁沢敬三「新版絵巻物による常民生活絵引き」　平凡社　1984年。遺構・遺物の全般にわたって、座右に置き参考にした。さまざまな絵巻の中で、橋や卒塔婆が多く登場する。

付載　自然科学分野における鑑定報告

付載１　米田遺跡（岡山県：鎌倉～室町時代）出土の人骨と犬骨

京都大学霊長類研究所
茂　原　信　生

付載２　米田遺跡出土の獣骨

獨協医科大学第一解剖学教室
櫻井秀雄・茂原信生

付載1　米田遺跡（岡山県：鎌倉～室町時代）出土の人骨と犬骨

京都大学霊長類研究所
茂原信生

Ⅰ）はじめに

米田遺跡は岡山県岡山市米田にある遺跡で、鎌倉時代から室町時代にかけての遺跡であると考えられている。今回報告するのは、平成5年に岡山県教育委員会によって発掘調査された際に溝の中から多くの獣骨に混じって発掘された人の頭蓋骨とイヌの骨である。中世の人骨や犬骨は少数例しか報告されておらず、日本人や日本犬の歴史を知る上で非常に貴重なものである。人骨は頭蓋骨が2点、犬骨は頭蓋骨を含めて8点である。これらの骨の保存状態は良好であるが出土した量は少ない。イヌは埋葬されたものではない。

人骨の計測はマルチン法（馬場；1991）にしたがい、犬骨の計測は斎藤（1963）にしたがった。

Ⅱ）人骨の特徴

頭蓋冠の残った頭蓋骨と、頭蓋骨片が出土している。骨自身の保存状態はよい。切断痕などの人為的な傷はない。

No.114（2区河道）

前頭部から後頭骨の大孔にかけての部分が出土している。顔面や頭蓋底部はない。眉間部から左の頭頂骨後部にかけて表面の緻密質が摩滅によると考えられる侵蝕を受けている。眉弓はあまり発達していない。正中の眉間隆起部（グラベラ部）は摩滅して一部で前頭洞が露出している。鼻骨は失われているが鼻根部はさほど凹んでいない印象である。前額部は比較的立っている。外後頭隆起はやや発達しておりブロカのⅢ型である。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。側頭筋の付着していた上縁を示す側頭線は高くはないが比較的よく発達している。内面の中硬膜動脈溝は明瞭で深い。頭蓋骨最大長は推定で179㎜あり、頭蓋最大幅は127㎜である。したがって、頭蓋長幅示数は70.9で過長頭に近い長頭に属している。中世人骨は一般に長頭に属しており、この人骨もその例に漏れない。頭蓋の縫合は冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合ともに鋸歯状が明瞭であり、内板の癒合もない。さほど高齢ではなく、壮年程度であろう。

この人骨は乳様突起などは失われており断定は出来ないが、前額部の様相などから考えて女性の可能性が高く、壮年程度と推測される。長頭である。

No.20

左頭頂骨後半部である。骨はさほど厚くない。矢状縫合とラムダ縫合ともに外板・内板の鋸歯状は明瞭であり、かなり若い個体のものと推測される。縫合骨があったと思われるラムダ縫合の窪みがある。中硬膜動脈溝は浅い。先の頭蓋骨よりやや小さめと思われる。性別は不明である。

この人骨は成人にようやく達した程度の年齢段階と思われる。性別は不明である。

Ⅲ）人骨のまとめ

出土したのは２体分の頭蓋骨である。１体は頭頂骨だけである。比較的よく残ったほうは壮年の女性と推測され、頭型は過長頭に近い長頭で中世人骨の特徴を示している。鼻根部はさほど凹んでいない、すなわち顔面が比較的平坦であったようである。頭頂骨だけの個体の方はさらに若いと思われるが詳細は不明である。

Ⅳ）犬骨の特徴

頭蓋骨の前半部と左下顎骨、さらに四肢骨が数点出土している。頭蓋骨と左下顎骨は咬合状態が一致するので同一個体であるが、四肢骨はそれぞれ同一個体かどうかは判定できない。ただし、右の上腕骨が２本出土しているので最少個体数は２である。人為的な切痕と考えられる傷が何点かの骨に見られ、動物の咬痕も１点で観察された。

頭蓋骨

前半部と左下顎骨である。骨の保存状態は良好である。顔長は86.2㎜であり、縄文時代犬、弥生時代犬や現生シバイヌのオス（小野寺・茂原；1987）よりかなり大きい。中世犬骨のオスの平均値に近く、前回報告（茂原・他；1989）した同じ米田遺跡から出土したオスとほとんど変わらない大きさである。ただし、吻幅は32.3㎜と前回のもの（40㎜）よりかなり小さく、頑丈さは劣っている。前頭部から鼻先間での窪み、すなわち額段（いわゆるストップ）は残存部から推測するとやや大きめで、縄文時代犬などよりは明らかに大きい。吻長を長谷部（1952）の型区分にあてはめてみると中級犬ということになる。下顎骨は逆にさほど大きくはなく、弥生時代犬のオスの平均値よりも小さめである。下顎骨の厚さは縄文時代犬や弥生時代犬のオスの平均値より小さく、中世犬とほぼ同じ厚さである。したがって、頭蓋の大きさに比してやはり全体にきゃしゃになっていることが確認され、縄文時代犬などよりも現代犬により近い形態をしていることがわかる。下顎底部は丸みを帯びている。

歯は全歯が残っており、縄文時代犬のような破損や生前の脱落はない。しかし、前歯部の咬耗は比較的進んでおり、第１切歯や第２切歯は歯冠がかなり失われている。高齢とまではいかなくても成獣であることはまちがいない。小臼歯の咬耗は少ない。

四肢骨

肩甲骨１点（右；ほぼ完形）、上腕骨が２点（右側２本；完形）、尺骨が１点（右側近位部）、寛骨１点（右寛骨臼部）および脛骨１点（右側１本；完形）が残っている。骨の保存状態はよい。これらの四肢骨のうち部位が異なっているものが同一個体に属するかどうかは不明である。

肩甲骨は縄文時代犬や現生シバイヌよりも長く、江戸時代の三ノ丸犬骨とほぼ同大である。遠位部の一部が削られているように失われている。上腕骨は142㎜と145㎜で三ノ丸犬（オス；162.5㎜、茂原・他：1985）よりかなり短い。しかし、縄文時代犬や現生シバイヌよりは長い。出土した尺骨は小さめできゃしゃである。脛骨も縄文時代犬や現生シバイヌより長いが、江戸時代犬などと比べると短い。長谷部の型区分（1952）にあてはめると上腕骨も脛骨も中級犬に相当している。先の頭蓋骨と同大のイヌということになる。四肢骨の頑丈さはむしろ現生シバイヌに近くきゃしゃである。山内（1958）のイヌの体高推定式に基づいて計算すると上腕骨では44.6㎝と45.4㎝になる。

V）犬骨に見られる傷

イヌの出土部位のうち数点に人為的と考えられる傷が見られた。骨自体はかなり硬いものであるから発掘時についた傷とは考えにくい。下顎骨の下顎枝の内面と外面（咬筋窩の部分）に長さ2～3㎜の水平な軽く浅い傷が多数観察され、とくに内面に多い。咬筋をはがした際に形成された可能性がある。鋭い刃ものによる傷ではない。右肩甲骨は遠位部が6㎝程にわたって削られている。右寛骨は寛骨臼の下方に1㎝程の斜めの傷が2本と同方向の小さな傷が1本みられる。右上腕骨（標本番号28）の骨幹下方前面に数㎝に及ぶ削り後のような傷が見られる。近位部でとくに削り込まれており、遠位は関節に及んでいる。上方から切り下ろされた刃物が1㎝ほどやや深めに削り取った後流れて関節に及んだものと思われる。

もう一方の右上腕骨（標本番号98）の外面上方にも鋭い刃物によると思われる長さ数㎜の浅い斜めの傷があり、前内面中央付近にも同じような傷がみられる。また、寛骨臼のやや上方に浅い人為的な溝が1本ある。寛骨の傷は新しいものかもしれない。人為的ではないが、尺骨の遠位部（本来の中央付近）にイヌよりも小さな動物によるものと思われる咬痕が無数についている。

これらを総合すると、今回出土した犬骨はなんらかの理由で殺されたものの可能性が高い。ただし致命傷になるような著しい傷ではなく、解体か肉をそぎ取った際に出来た傷であろう。イヌの肉がそぎ取られる可能性としては、人の食用に供されたか、あるいは鷹など他の動物の餌にされたか、が考えられるが、資料が少なく今の時点では原因は不明である。

Ⅵ）犬骨のまとめ

米田遺跡から出土した犬は、大きさでは長谷部（1952）の型区分では中級犬に分類され、縄文時代犬や現生シバイヌよりは大きく、中世犬の特徴をよく示していると言える。縄文時代犬よりはきゃしゃになっているし、歯の脱落や損傷はない。前回報告した犬骨（茂原他；1989）とほぼ同大の犬である。人為的な傷や他の動物による咬痕がいくつか観察された。

参　考　文　献

馬場悠男（1991）：人骨計測法。人類学講座別巻1、「人体計測法」、江藤盛治編集；159―358.

長谷部言人（1952）：犬骨。埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」、文化財保護委員会、146―150.

森田茂（1950）：関東地方人頭蓋骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集　3；1―59.

小野寺覚・茂原信生（1987）：骨格による性の判別―シバイヌについて。解剖学雑誌、62(1)；19―32.

斎藤弘吉（1963）：犬科動物骨格計測法。私家版（東京）：1―138.

茂原信生・小野寺覚（1985）：仙台城三ノ丸跡出土の17世紀犬骨について。仙台市文化財調査報告書第76集、仙台市教育委員会；547―559.

茂原信生・江藤盛治・櫻井秀雄・芹澤雅夫（1989）：百間川米田遺跡（中世）出土の獣骨。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告、74；348―372.

鈴木尚（1956）：四肢骨特に大腿骨の形質。日本人類学会編「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」岩波書店；149—154.

山内忠平（1958）：犬における骨長より体高の推定法。鹿児島大学農学部学術報告、№7；125—131.

写　真　説　明

写真1：米田遺跡出土の人の頭蓋骨

A；頭蓋骨上面、B；頭蓋骨側面

写真2：米田遺跡出土の犬骨

A；頭蓋骨前半上面、B；下顎骨、C・D；上腕骨、E；尺骨、F；肩甲骨、G；寛骨、H；脛骨

写真 1

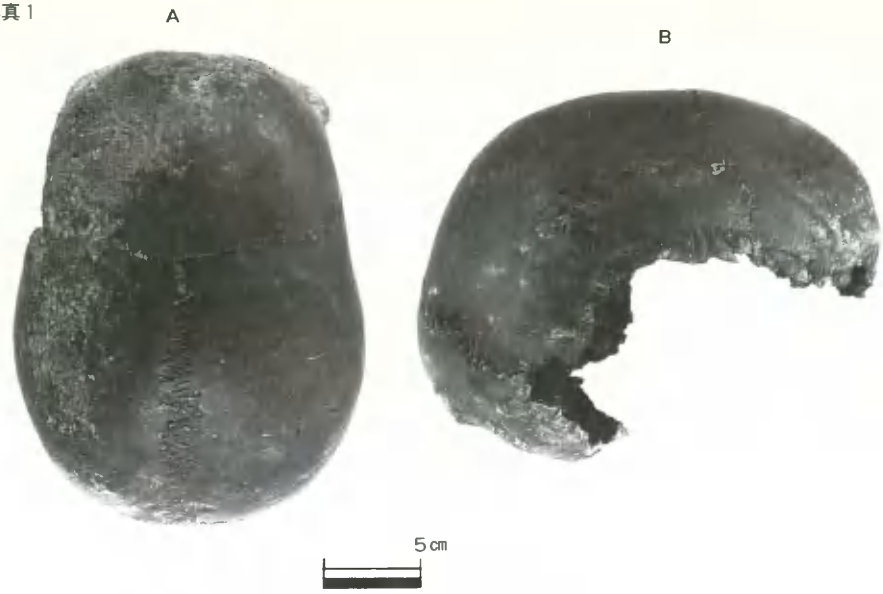


写真 2

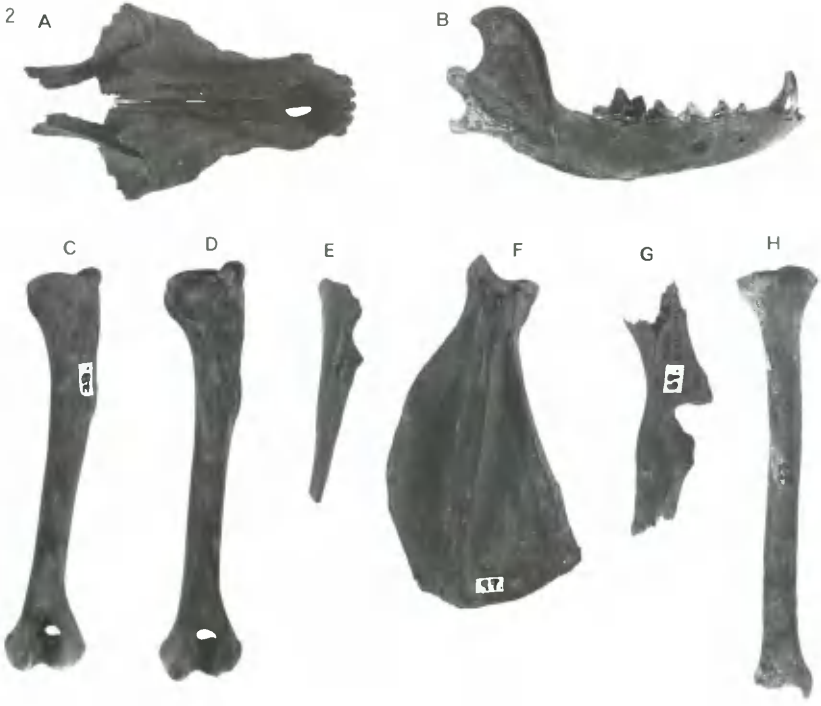


表1　米田遺跡出土の頭蓋骨の計測値

（＊：推定値）

Martin	計測項目	計測点	鎌倉～室町前半 米田遺跡 女性	中世 材木座遺跡 鈴木（1956） 男性	中世 材木座遺跡 鈴木（1956） 女性	現代 関東地方人 森田（1950） 男性	現代 関東地方人 森田（1950） 女性
1	頭蓋最大長	g－op	179 ＊	184.2	177.9	178.9	170.8
8	頭蓋最大幅	eu－eu	127 ＊	136.5	131.8	140.3	135.9
	長幅示数（8／1）	（8／1）	70.9	74.2	74.2	78.5	79.7
9	最小前頭幅	ft－ft	96 ＊	93.5	90.5	93.2	91.0
10	最大前頭幅	co－co	103 ＊	114.2	109.0	115.9	111.6
横前頭	横前頭示数（9／10）	（9／10）	93.2	81.9	82.8	80.5	81.5
12	最大後頭幅	ast－ast	108.0	107.8	104.4	108.4	104.2
25	正中矢状弧長	（n－o）	368 ＊	373.7	360.1	371.7	357.6
26	正中矢状前頭弧長	（n－b）	123 ＊	126.5	121.4	127.4	122.1
27	正中矢状頭頂弧長	（b－l）	122	129.4	124.4	125.1	121.0
28	正中矢状後頭弧長	（l－o）	122	117.5	114.6	119.1	114.3
28(1)	正中矢状上鱗弧長	（l－i）	73	77.9	77.0	71.3	68.8
29	正中矢状前頭弦長	n－b	104.3 ＊			111.8	106.5
30	正中矢状頭頂弦長	b－l	111.5			111.8	108.6
31	正中矢状後頭弦長	l－o	96.6	99.3	99.6	100.4	97.0
31(1)	正中矢状上鱗弦長	l－i	68.1	71.4	69.3	67.5	64.1

表２　米田遺跡出土のイヌ頭蓋骨の計測値と比較資料（単位はmm）

（単位はmm、＊は推定値）

	中世 米田遺跡	縄文平均		弥生平均		鎌倉材木座 中世（鎌倉）		米田遺跡 中世(1989)	中世平均		シバイヌ 現生	
	性別不明	♂	♀	♂	♀	♂(Ave)	♀(Ave)	♂	♂	♀	♂(Ave)	♀(Ave)
14：顔長(pr－na)	86.2	82.9	76.4	81.7	77.4	84.2	73.4	87	84.2	74.4	74.6	69.4
15：吻長(1)(pr－o.a)	77＊	72.2	67.5	72.1	67.7	74.8	66.7	73	74.1	66.4	65.0	60.1
16：吻幅（犬歯部）	32.3	34.1	31.5	34.0	31.5	36.5	32.5	40	37.6	32.8	31.5	28.9
17：吻高(na－)	38.1	39.7	36.8	40.2	38.1	41	35.5	45	40.8	36.1	34	32
19：硬口蓋長(pr－sta)	85＊	81.5	77.2	82.5	76.9	86.2		83	84.7	78.1	74.9	70.3
20：硬口蓋最大幅	58＊	57.3	55.2	58.6	54.0	60.2	56.6	62	61.8	56.9	59.2	55.2
21：下顎骨全長(1)(id－goc)	124.7	123.5	113.3	128.0	114.2	127.9	117.9	－	131.3	117.9	114.1	107.0
22：　(2)(id－c.mid)	124.7	123.1	113.7	128.3	114.0	129	115.6	－	131.3	116.3	114.2	107.0
23：下顎枝高	47.2	48.8	43.4	50.6	44.9	52	47.3	－	52.7	47.6	44.6	41.3
24：下顎枝幅（最小値）	31.1	31.3	27.4	35.0	29.0	33.7	29.1	－	32.1	28.5	27.7	25.5
25：下顎体高（M１の中央）	23.6	23.6	21.1	23.5	21.4	24.9	22.3	－	23.3	21.0	18.9	17.2
26：下顎体厚（M１中央下方）	10.2	11.0	9.9	12.2	10.3	11.4	9.9	－	10.9	10.0	9.1	8.2
27：咬筋窩深（下顎枝幅位）	6.6	7.9	6.7		5.2	8.3	7	－	7.4	6.5	5.8	5.3
口蓋示数（20／19）	68.2	71.1	70.3	71.1	70.3	69.8		74.7	73.2	36.6	79.2	78.6
下顎体厚高示数（26／25）	43.2	47.1	46.7	51.8	48.1	45.8	44.4		46.8	47.6	48.3	47.7

表３　米田遺跡出土のイヌの四肢骨の計測値、および比較資料

（単位は㎜、＊は推定値；それぞれ同一個体かどうかは不明）

		中世		縄文期・晩期		江戸			現代	
		米田遺跡		田柄貝塚		三の丸	仙台坂	西新橋	シバイヌ	
		性別不明	性別不明	♂	♀	♂	♂	♂	♂	♀
	肩甲骨	右（97）								
Ｓ１	全長	128 ＊		—	101.10	127.3			108.6	100.6
Ｓ２	関節窩幅	16.6		14.99	13.72				14.9	13.6
Ｓ３	関節窩長	22.7		20.90	19.44				20.2	18.4
Ｓ４	頚部最小幅	22.0		21.47	19.02				20.0	18.5
Ｓ５	下部幅	26.7		25.37	22.60				23.8	21.9
	上腕骨	右（28）	右（98）							
Ｈ１	全長	142.5	146.8	131.28	117.34	162.5	172	142.6	123.0	114.5
	上端最大幅	22.8	24.8	22.7	20.9		32	23.5	21.8	20.1
Ｈ２	中央最小幅	11.1	11.8	11.19	10.13	13.3	15.9	12	9.4	8.7
Ｈ３	中央最大幅	14.0	15.3	14.98	12.90	17.1	19.4	17.1	11.9	11.1
Ｈ４	下端最大幅	28.3	29.0	28.36	25.88		37.2	26.5	26.1	24.3
Ｈ２／Ｈ３	上腕骨中央断面示数	79.3	77.1	74.75	78.70	77.8	82.0	70.2	79.2	78.7
Ｈ３／Ｈ１	中央頑丈示数	9.8	10.4	11.42	10.77	10.5	11.3	12.0	9.7	9.7
	尺骨	右（79）								
	切痕中央矢状径	11.5		12.2	10.9		17.6	13.5	11.6	10.9
	骨盤	右（69）								
Ｐ２	腸骨厚	9.6		8.25	—				7.4	6.8
Ｐ３	腸骨最小幅	19.4		15.35	14.65				14.4	13.5
Ｐ４	寛骨臼最大長	21.1		18.46	—				17.0	16.1
Ｐ２／Ｐ３	腸骨断面示数	49.5		53.76	51.11				52.6	50.3
	脛骨	右（70）								
Ｔ１	全長	151.4		141.80	125.58		188.8	164.3	135.1	125.2
Ｔ２	上端最大幅	29.4		28.90	28.05	32.0	37.8	30	26.8	25.2
Ｔ３	上端最大矢状径	29.2		30.07	28.45	33.4	41.5	33.4	26.0	24.7
Ｔ４	中央横径	11.3		10.92	9.98	13.0	15.7	12.1	10.0	9.3
Ｔ５	中央矢状径	11.4		10.63	9.48	13.6	14.1	12	9.8	9.1
Ｔ６	下端最大幅	20.4		20.10	18.20		25	20.8	17.9	16.7
Ｔ２／Ｔ３	脛骨上端示数	100.7		96.27	98.73	95.8	91.1	89.8	103.5	102.2
Ｔ４／Ｔ５	中央断面示数	99.1		102.86	105.46	95.6	111.3	100.8	102.9	102.1
Ｔ４／Ｔ１	中央頑丈示数	7.5		7.71	7.79		8.3	7.4	7.4	7.4

付載2　米田遺跡出土の獣骨

獨協医科大学　第一解剖学教室
櫻井秀雄・茂原信生

Ⅰ）はじめに

米田遺跡は、岡山市街の北東の百間川沿いに広く展開する遺跡群のひとつである。1983年～1985年にかけて発掘調査が行なわれた百間川米田遺跡の北側に位置している。百間川を挟んだ対岸の集落遺跡で、鎌倉時代から室町時代にかけての遺跡である。遺跡内には、建物跡、井戸跡や多数の土壙が確認されている。また、遺跡北側部分は当時、川が流れていたようで、川の中からは生活に使われた多量の土器類が出土している。これらの遺物と共に人骨、犬骨、獣骨が合せて100余点出土した。本報告は、獣骨についてのものである。

Ⅱ）出土獣骨の状態

出土した獣骨は、全体に保存状態は良好で、骨表面の剝落や骨質の吸収のみられるものはなかった。出土総数は95点で、このうち同定できたものは84点である（同定率88%）。完全な状態で出土した骨が12点あった。また、解体痕のある骨が8点、骨髄食の痕跡をとどめる骨が11点確認された。焼けた骨は1点のみが確認されている。計測方法は Driesch (1976) にしたがった。

Ⅲ）出土動物の種名

出土した動物は6目7科8種であった。それぞれの動物骨の出土点数を種名の後の（　）内に示した。

両生綱　Amphibia
　両盤凹亜目　Diplasiocoela
　　アカガエル科　Ranidae
　　トノサマガエル？　(*Rana nigromaculata*) (20)

爬虫綱　Reptilia
　カメ目　Testudinata
　　スッポン科　Trionychidae
　　スッポン　*Trionyx sinensis* (11)

哺乳綱　Mammalia
　クジラ目　Cetacea の一種(2)

　偶蹄目　Artiodactyla

ウシ科　Bovidae

ウシ　*Bos taurus* (51)

シカ科　Cervidae

ニホンジカ　*Cervus nippon*（1）

イノシシ科　Suidae

イノシシ　*Sus scrofa*（1）

奇蹄目　Perissodactyla

ウマ科　Equidae

ウマ　*Equus caballus* (16)

食肉目　Carnivora

イタチ科　Mustelidae

イタチ　*Mustela itatsi*（1）

Ⅳ）動物ごとの出土状況

①トノサマガエル

井戸跡内から出土した。もともと骨質も薄く弱いので、かなりもろく壊れやすい状態である。破損の少ない主な骨が20点あった。このなかで、２本の管状の骨を並べた形の長骨が検出された。これはカエルの骨にみられる特徴的な形質である。ヒキガエルの骨よりかなり小型であり、大きさから比定するとトノサマガエルと考えられるが、断定はできないので一応？とした。長骨の出土点数から２～３個体分の骨である。

②スッポン

11点出土している。いずれも背甲（甲羅）が分離した状態の破片で、１個体分の背甲には数片足りない。同一個体のものと考えられる。解体痕など人為的な痕跡はみられない。

③クジラ

２点出土している。骨表面の緻密質が全てなくなっており、海綿質が全面露出している。厚さ４cmで、縦８cm、横10cmほどの箱状の骨が１点と、もう１点はその半分ほどの大きさである。緻密質がなくなっているので部位の精確な判断ができないが、海綿質の厚さから頭骨の一部と考えられる。

④ウシ

51点出土している。今回発掘された出土骨のうちで最も量が多い。骨の種類も多く、ほぼ全身の部位が確認されているが、大腿骨は１点も出土していない。四肢骨は、出土点数は多いが完全な状態のものは少ない。解体痕や骨髄食の痕跡がかなり多くみられた。また、中手骨が１点焼けた状態で出土している。下顎骨の出土点数から判断できる最小個体数は３体であるが、これらの成獣の下顎骨と適合しない若い骨が検出されている。したがって最小個体数は成獣３体、若年獣１体である。３点の下顎骨を計測したが、切歯部が欠損しており推定値である（表３）。３点の下顎骨はそれぞれ性別が不明であるが、これらのウシの大きさはロノ島牛オスや見島牛メス（林田1964、1967）の平均値に近い数

値である。百間川米田遺跡出土の中世のウシ（茂原・櫻井：1989）ともほぼ同大である。下顎骨以外ではほとんどの長骨は骨端が欠損しており、中足骨の計測しかできなかった。中足骨は最大長201㎜で、百間川米田遺跡出土のもの(194㎜）と同じぐらいである。前述の下顎骨の状況と一致しており、本遺跡出土のウシは、黒毛和種より小型のウシであったと思われる。

⑤ニホンジカ

右橈骨が完全な状態で１点出土している。骨端は癒合しており、成獣のものである。解体痕が数ケ所でみられた。最大長は184㎜であった（表４）。比較した現生標本のなかでも最も小型のシカに近い数値である。

⑥イノシシ

右下顎骨の一部が１点出土している。下顎角の部分で５㎝ほどの破片である。現生成獣標本とほぼ同じ大きさであったが、他の部分や歯の出土がないので、成獣のものかどうかは不明である。

⑦ウマ

16点出土している。ウシに次いで出土数が多い。解体痕が認められた骨は１点だけでウシにくらべて少ない。橈骨や中足骨に縦半分に割った痕跡のあるものが３点みられた。中手骨と中足骨で計測を行なった（表５・６）。中手骨は、小型馬のトカラ馬と同大である。百間川米田遺跡のウマ（中型馬）よりは小型である。中足骨は、２点ともトカラ馬の数値に近い。百間川米田遺跡の小型のものに近い大きさである。したがって本遺跡出土のウマは、トカラウマと同大の小型馬であると推測される。

⑧イタチ

左脛骨が１点出土している。欠損している部分はなく、また解体痕などの傷痕も認められない。

Ⅴ）解体痕について

解体痕は主にウシに集中している。ウマでは、解体痕は１点の骨にのみみられたが、資料数も少なく、今回の出土骨だけからウマの利用状況は判断できない。しかし、ウマの骨の方が破損や傷の程度がウシより少ない傾向はうかがえる。

百間川米田遺跡の出土獣骨でも多くの骨から明瞭な解体痕がみとめられた（茂原・櫻井：1989)。両遺跡の獣骨にみられる解体痕の形状や数に大きな違いはみられない。骨全体の印象では、深い大きな傷より肉を切り取る際に生じるような細かい傷が多く見受けられた。また、百間川米田遺跡のウシとウマでは解体痕の出現度に大きな差はみられなかったが、本遺跡ではウシの方が明らかに多い。

Ⅵ）まとめ

本遺跡は1989年に報告された百間川米田遺跡と近接した場所にある。出土時代も同じ時期で出土獣骨についても共通した傾向がみられた。まとめると以下のような３点になる。

①骨の保存状態が良好である。これは土壌環境が同じであることが大きく作用している。

②ウシ、ウマの出土量が突出して多い。百間川米田遺跡では全獣骨のうちウシが45％、ウマが14％を占める。米田遺跡では、ウシが54％、ウマが17％である。どちらの遺跡もウシとウマで半分以上を占める。

③ニホンジカとイノシシの出土量が極めて少ない。

中世の遺跡からの獣骨出土報告はまだまだ少なく、本遺跡の類例の検討には至らないが、狩猟中心

の生活から家畜を飼う定住型生活が安定している時期であったと思われる。ウシやウマは出土骨の比率としては多いが、食用家畜として考えた場合には絶対量は少ない。飼育や流通などの面で充分な条件が整わない時代環境を考慮すれば、ウシやウマは貴重な食料でもあったと思われる。出土骨が利用された動物の全量でないと考えられるので本遺跡は、ウシ、ウマなど残滓の廃棄場所の一部である可能性が高い。本遺跡は独立した遺跡ではなく、広い範囲に多数の集落が展開する複合遺跡であることから、生業形態を考える上でも多数の近隣遺跡の状況との比較検討が必要である。今後、周辺への発掘調査がさらに幅広い年代におよべば生活状況の変移もさらに詳しく明らかになるものと考える。

参　考　文　献

Driesch, A. von den (1976): A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Mus. Bull, 1: 1—137

林田重幸（1956）：日本古代馬の研究。人類学雑誌、64；197—211.

林田重幸（1964）：ロノ島におけるいわゆる野生牛について。日本在来家畜調査団報告、第1号；27—29.

林田重幸（1967）：見島牛の体型。日本在来家畜調査団報告、第2号；62—66.

加藤嘉太郎（1974）：家畜比較解剖図譜上巻、第7版、養賢堂。

西中川駿・松元光春（1981）：出土した家牛の頭蓋および下顎骨の記載。「伊皿子貝塚遺跡」；478—485.

斉藤勇夫・黒木正雄・村上隆之（1972）：御崎馬の死亡調査と遺骨の測定、第3報；骨の測定について。宮崎大学農学部研究報告、19；295—304.

茂原信生・江藤盛治・櫻井秀雄・芹澤雅夫（1989）：百間川米田遺跡（中世）出土の獣骨。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告、74；348—372.

写　真　説　明

写真1：米田遺跡出土のウシ

1・2：頬骨、3：下顎骨、4：上腕骨、5：肩甲骨、6：橈骨、7：中手骨

写真2：米田遺跡出土のウシ・ニホンジカ・イノシシ・ウマ

（1～7：ウシ、8：ニホンジカ、9：イノシシ、10・11：ウマ）

1・2：脛骨、3：中足骨、4：踵骨、5：距骨、6：基節骨、7：中節骨、8：橈骨、9：下顎骨、10：上腕骨、11：橈骨

写真3：米田遺跡出土のウマ・スッポン・トノサマガエル？

（1～5：ウマ、6：スッポン、7：トノサマガエル？）

1：橈骨、2：寛骨、3：中手骨、4・5：中足骨、6：胸甲（甲羅）、7：トノサマガエル？全出土骨

写真1

1

2

5cm

3

4

5

6

7

写真 2

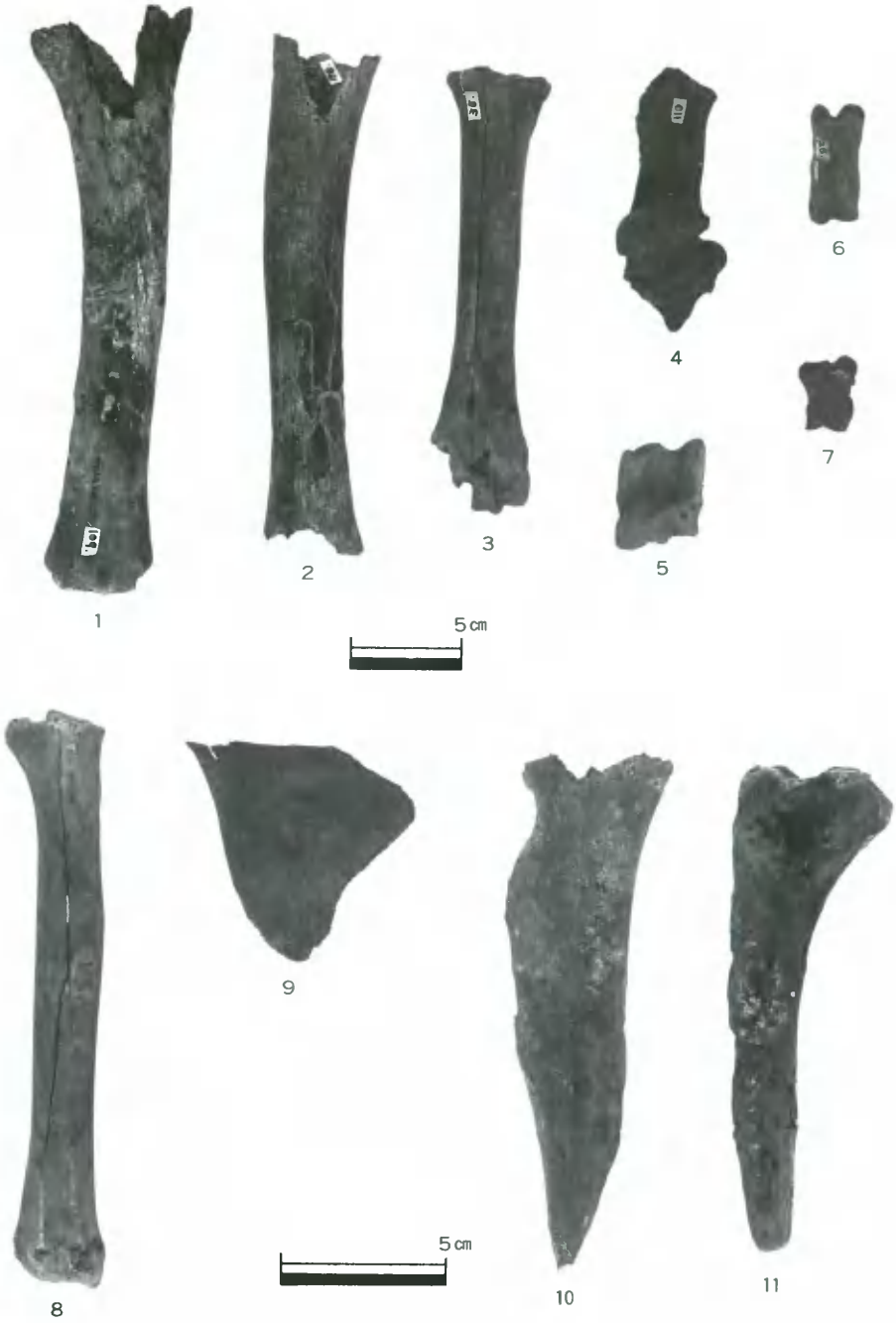


写真 3

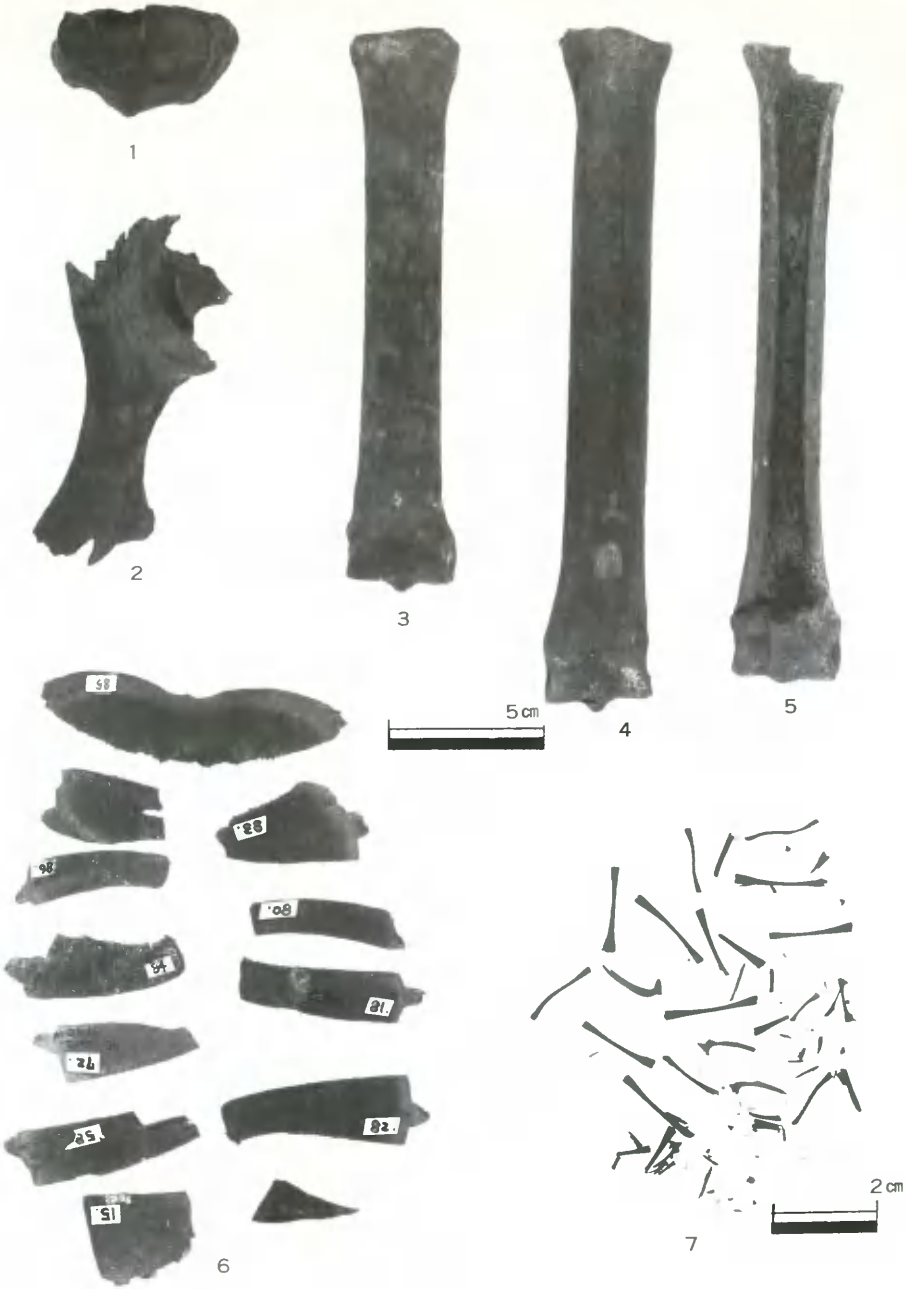


表１　米田遺跡出土の獣骨一覧（No.順）

No.	種名	骨名	R, L	状態	部位								備考
					c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de	
1	ウシ	肩甲骨	R	F			1						
2	ウシ	中手骨	L	F					1	1			若年　焼骨
4	ウマ	中手骨	R	C	1								解体痕
6	ウシ	中手骨	L	F					1	1	1		小型OR仔？
7	イノシシ	下顎骨	R	F									下顎角部
8	ウシ	中足骨	R	F				1	1	1	1		骨髄食　近・遠位端に穿孔
9	トノサマガエル？	四肢骨他											20点
12	ウシ	側頭骨	R	F									岩様部
13	ウマ	上顎第３大臼歯	L	C	1								
14	ウシ	寛骨	R	F									腸骨
15	スッポン	背甲											
16	ウシ	上腕骨	R	F								1	遠位端内側　打割片
17	ウシ	脛骨	L	F					1	1			骨髄食
18	ウマ	中足骨	L	F					1	1	1	1	若年　後面半分　打割片
19	ウシ	上腕骨	L	F					1	1	1		解体痕
21	ウシ	上腕骨	R	F							1	1	解体痕　骨髄食　遠位端に穿孔
22	ウシ	環椎	RL	C	1								解体痕
23	ウシ	脛骨	R	F							1	1	骨髄食　遠位端に穿孔
24	ウマ	橈骨	L	F		1							近位半の縦半分
25	ウシ	基節骨	?	C	1								
26	ウシ	肋骨	?	F									
27	ウマ	寛骨	R	F									寛骨fl部＋坐骨
29	ウマ	橈骨	L	F								1	若年
30	ウシ	頚椎	RL	F									
31	ウシ	肋骨	?	F									
32	ウシ	下顎骨	R	F									歯欠　切歯部欠
33	ウシ	肋骨	?	F									
34	ウシ	中足骨	L	F				1	1	1	1		若年　骨髄食
35	ウシ	中足骨	R	F				1	1	1	1		骨髄食
36	ウシ	胸椎	RL	F									
38	ウシ	腰椎	RL	F									若年
39	ウシ	頬骨	R	F									側頭突起　小型
40	ウシ	肋骨	?	F									
41	ウシ	中節骨	?	C	1								
42	ウシ	頬骨	R	F									側頭突起
44	ウシ	基節骨	?	F					1	1	1	1	解体痕
46	ウマ	寛骨	R	F									寛骨fl＋坐骨
52	イタチ	脛骨	L	C	1								
54	ウシ	肋骨	?	F									
55	ウマ	中足骨	R	F				1	1	1	1		前面
56	ウシ	上腕骨	L	F					1	1	1	1	
57	ウシ？	長骨の一部	?	F									No.59と同一骨？
58	スッポン	背甲											
59	ウマ	上腕骨	R	F					1	1			内側面
60	ウマ	下顎骨	L	F									下顎体舌側面
61	ウシ	第一？腰椎	RL	C	1								
62	ウマ	中足骨	R	C	1								
63	ウシ	肋骨	?	F									
64	ウシ	胸椎	RL	F									棘突起部分
65	ウシ	肋骨	?	F									
67	ウシ	肩甲骨	R	F									後縁
71	ウシ	肋骨	?	F									
72	スッポン	背甲											
73	ウシ	肋骨	?	F									
74	ニホンシカ	橈骨	R	C	1								解体痕
75	ウシ	肋骨	?	F									
76	ウシ	胸椎	RL	F									
77	ウシ	肩甲骨	R	F		1							骨髄食　近位端に穿孔
78	ウシ	脛骨	L	F					1	1	1		骨髄食
80	スッポン	背甲		F									
81	スッポン	背甲		F									
82	スッポン	背甲		F									
83	スッポン	背甲		F									
84	スッポン	背甲		F									
85	スッポン	背甲		F									
86	スッポン	背甲		F									
87	スッポン	背甲		F									
88	ウマ	上顎第２大臼歯	L	F									
89	ウマ	上顎第１大臼歯	R	F									
90	ウシ	橈骨	L	F					1	1	1		尺骨一部付着　小型OR仔？　骨髄食
91	ウシ	尺骨	L	F					1	1			解体痕
92	ウシ	距骨	R	F									解体痕・加工痕
95	クジラ	不明		F									
96	クジラ	不明		F									
104	ウシ	上顎第３小臼歯	L	C	1								
105	ウマ	上顎第２大臼歯	L	C	1								
106	ウシ	下顎骨＋P2－M3	R	F									下顎頭、切歯部欠
107	ウシ	下顎骨＋P2－M3	R	F									下顎角、切歯部欠
108	ウシ	脛骨	R	F						1	1		内側面　解体痕
109	ウシ	脛骨	R	F					1	1	1		骨髄食
110	ウシ	踵骨	L	C	1								
111	ウマ	中足骨	L	F				1	1	1	1		前面半分　打割片
112	ウマ	橈骨	L	F					1	1	1		後面のみ　尺骨一部付着
113	ウシ	橈骨	L	F				1	1	1	1		骨髄食

表２　米田遺跡出土の獣骨一覧（種別）

No.	種　名	骨　名	R，L	状態	部位 c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de	備　考
52	イタチ	脛骨	L	C	1								
7	イノシシ	下顎骨	R	F									下顎角部
30	ウシ	頚椎	RL	F									
22	ウシ	環椎	RL	C	1								解体痕
36	ウシ	胸椎	RL	F									
64	ウシ	胸椎	RL	F									棘突起部分
76	ウシ	胸椎	RL	F									
38	ウシ	腰椎	RL	F									若年
61	ウシ	第一？腰椎	RL	C	1								
26	ウシ	肋骨	?	F									
31	ウシ	肋骨	?	F									
33	ウシ	肋骨	?	F									
40	ウシ	肋骨	?	F									
54	ウシ	肋骨	?	F									
63	ウシ	肋骨	?	F									
65	ウシ	肋骨	?	F									
71	ウシ	肋骨	?	F									
73	ウシ	肋骨	?	F									
75	ウシ	肋骨	?	F									
12	ウシ	側頭骨	R	F									岩様部
39	ウシ	頬骨	R	F									側頭突起　小型
42	ウシ	頬骨	R	F									側頭突起
32	ウシ	下顎骨	R	F									歯欠　切歯部欠
106	ウシ	下顎骨＋P2－M3	R	F									下顎頭、切歯部欠
107	ウシ	下顎骨＋P2－M3	R	F									下顎角、切歯部欠
104	ウシ	上顎第３小臼歯	L	C	1								
1	ウシ	肩甲骨	R	F			1						
67	ウシ	肩甲骨	R	F									後縁
77	ウシ	肩甲骨	R	F		1							骨髄食　近位端に穿孔
2	ウシ	中手骨	L	F					1	1			若年　焼骨
6	ウシ	中手骨	L	F					1	1	1		小型OR仔？
16	ウシ	上腕骨	R	F								1	遠位端内側　打割片
19	ウシ	上腕骨	L	F					1	1	1		解体痕
21	ウシ	上腕骨	R	F							1	1	解体痕　骨髄食　遠位端に穿孔
56	ウシ	上腕骨	L	F					1	1	1	1	
90	ウシ	橈骨	L	F					1	1	1		尺骨一部付着　小型OR仔？　骨髄食
113	ウシ	橈骨	L	F				1	1	1	1		骨髄食
91	ウシ	尺骨	L	F					1	1			解体痕
25	ウシ	基節骨	?	C	1								
44	ウシ	基節骨	?	F					1	1	1	1	解体痕
41	ウシ	中節骨	?	C	1								
14	ウシ	寛骨	R	F									腸骨
17	ウシ	脛骨	L	F					1	1			骨髄食
23	ウシ	脛骨	R	F							1	1	骨髄食　遠位端に穿孔
78	ウシ	脛骨	L	F					1	1	1		骨髄食
108	ウシ	脛骨	R	F						1	1		内側面　解体痕
109	ウシ	脛骨	R	F					1	1	1		骨髄食
92	ウシ	距骨	R	F									解体痕・加工痕
110	ウシ	踵骨	L	C	1								
8	ウシ	中足骨	R	F				1	1	1	1		骨髄食　近・遠位端に穿孔
34	ウシ	中足骨	L	F				1	1	1	1		若年　骨髄食
35	ウシ	中足骨	R	F				1	1	1	1		骨髄食
57	ウシ？	長骨の一部	?	F									No.59と同一骨？
60	ウマ	下顎骨	L	F									下顎体舌側面
89	ウマ	上顎第１大臼歯	R	F									
88	ウマ	上顎第２大臼歯	L	F									
105	ウマ	上顎第２大臼歯	L	C	1								
13	ウマ	上顎第３大臼歯	L	C	1								
4	ウマ	中手骨	R	C	1								解体痕
59	ウマ	上腕骨	R	F					1	1			内側面
24	ウマ	橈骨	L	F		1							近位半の縦半分
29	ウマ	橈骨	L	F								1	若年
112	ウマ	橈骨	L	F					1	1	1		後面のみ　尺骨一部付着
27	ウマ	寛骨	R	F									寛骨臼部＋坐骨
46	ウマ	寛骨	R	F									寛骨臼＋坐骨
18	ウマ	中足骨	L	F					1	1	1	1	若年　後面半分　打割片
55	ウマ	中足骨	R	F				1	1	1	1		前面
62	ウマ	中足骨	R	C	1								
111	ウマ	中足骨	L	F				1	1	1	1		前面半分　打割片
95	クジラ	不明		F									
96	クジラ	不明		F									
15	スッポン	背甲											
58	スッポン	背甲											
72	スッポン	背甲											
80	スッポン	背甲		F									
81	スッポン	背甲		F									
82	スッポン	背甲		F									
83	スッポン	背甲		F									
84	スッポン	背甲		F									
85	スッポン	背甲		F									
86	スッポン	背甲		F									
87	スッポン	背甲		F									
9	トノサマガエル？	四肢骨他											20点
74	ニホンジカ	橈骨	R	C	1								解体痕

表 3　米田遺跡出土のウシ下顎骨の計測値と比較資料（単位：mm）

	時代	No.	最大長	下顎枝高	
米田遺跡	中世	32	(345)	185	
米田遺跡	中世	106	(360)	—	
米田遺跡	中世	107	(340)	188	(茂原・櫻井・他：1989)
百間川米田遺跡	中世		356	150	(林田：1964)
ロノ島牛♂	現生		363		(林田：1967)
見島牛♀	現生		360		(西中川・他：1981)
現生黒毛和種♂	現生		402		(西中川・他：1981)
現生黒毛和種♀	現生		379		

表 4　米田遺跡出土のニホンジカ橈骨の計測値と比較資料（単位：mm）

	時代	最大長	
米田遺跡	中世	184	
千代田区平河町	近世	213	(茂原・櫻井：未発表)
獨協標本 1	現生	210	
獨協標本 2	現生	171	
獨協標本 3	現生	199	

表 5　米田遺跡出土のウマ中手骨の計測値と比較資料（単位：mm）

	時代		No.	最大長	
米田遺跡	中世	中型	4	185	(茂原・櫻井・他：1989)
百間川米田遺跡	中世	中型		208	(斎藤：他：1972)
御崎馬	現生	中型		210 ～ 280	(斎藤：他：1972)
木曽馬	現生	中型		220	(林田：1956)
トカラ馬	現生	小型		188	

表 6　米田遺跡出土のウマ中足骨の計測値と比較資料（単位：mm）

	時代		No.	最大長	
米田遺跡	中世	中型	18	214	
米田遺跡	中世	中型	62	225	(茂原・櫻井・他：1989)
百間川米田遺跡	中世	中型		226	(斎藤：他：1972)
御崎馬	現生	中型		247 ～ 276	(斎藤：他：1972)
木曽馬	現生	中型		260 ～ 270	(林田：1956)
トカラ馬	現生	小型		225 ～ 236	

１．発掘調査着手前の遺跡（西から）

２．１区低位部近世水田（西から）

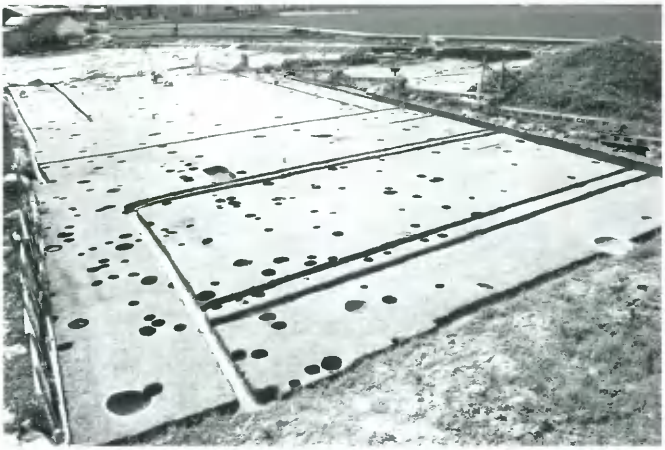
３．２区低位部近世水田（北東から）

図版２

◀１．３区低位部
近世水田
（北東から）

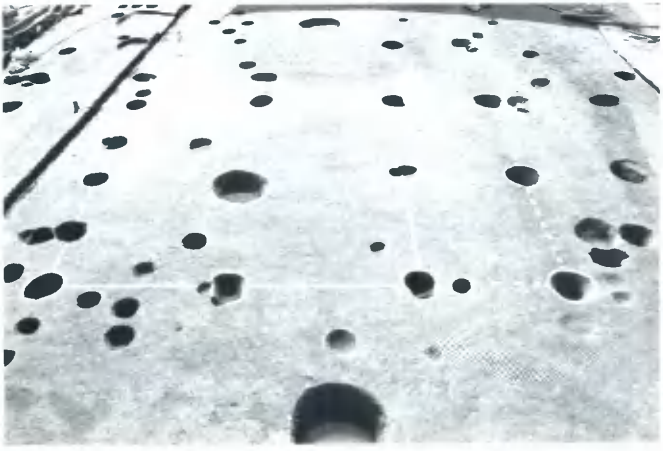
◀２．１区微高地
中央部遺構
検出状況
（南から）

◀３．１区微高地
西半部遺構
検出状況
（東から）



１．１区微高地▶
東半部遺構
検出状況
（東から）

２．１区微高地▶
中央部ＳＢ
01付近
（南から）

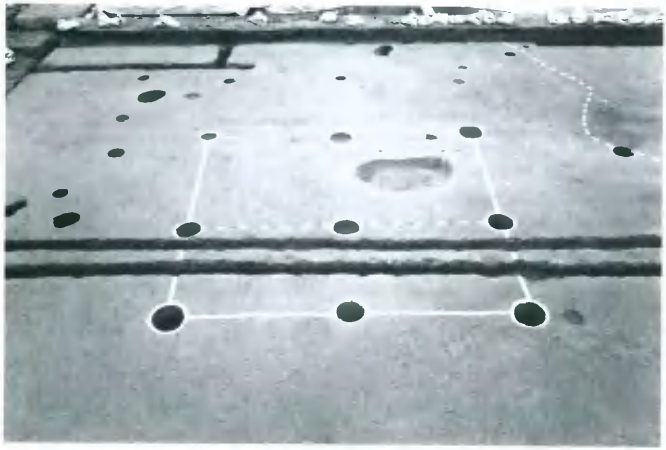


３．１区建物　▶
ＳＢ01
（東から）

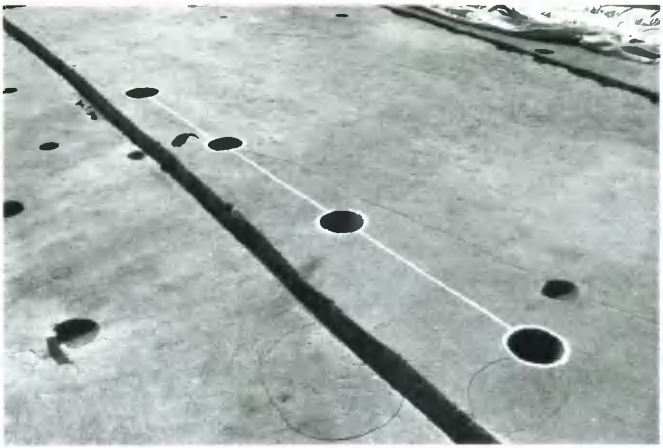
図版４

◀１．２区微高地遺構検出状況（南から）

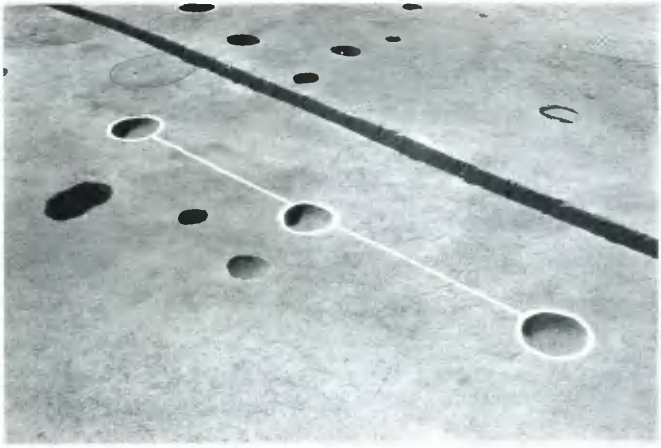
◀２．３区微高地遺構検出状況（東から）



◀３．３区建物ＳＢ02（東から）



１．柱列ＳＣ01 ▶
（東から）



２．柱列ＳＣ02 ▶
（東から）

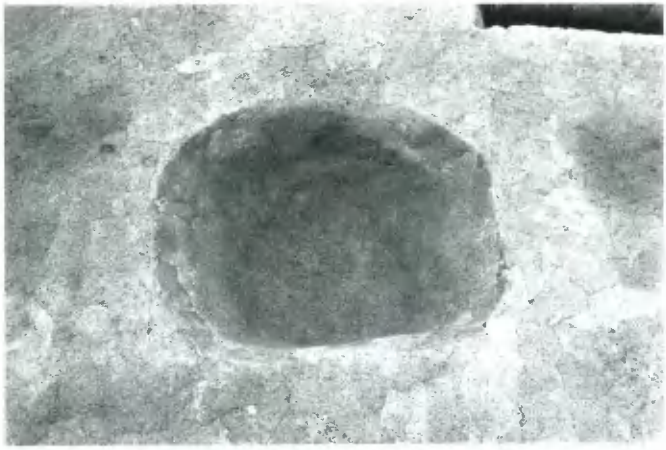
３．溝ＳＤ01 ▶
（南西から）

図版６

◀１．土壙ＳＫ04
（南東から）

◀２．土壙ＳＫ02
（南から）

◀３．土壙ＳＫ14
（南から）



1．土壙ＳＫ20 ▶
（東から）

2．土壙ＳＫ17 ▶
（北から）

3．土壙ＳＫ12 ▶
（南東から）

図版８

◀１．井戸ＳＥ01
上面
（南から）

◀２．井戸ＳＥ01
井側上位部
（南から）

◀３．井戸ＳＥ01
井側と井筒
（南から）

１．井戸ＳＥ01 ▶
井筒内部
（南から）

２．井戸ＳＥ01 ▶
井側と横桟
（南から）

３．井戸ＳＥ01 ▶
井筒に使用
の曲物

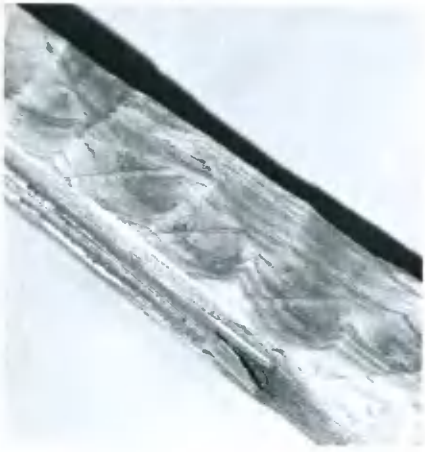
図版10

▲井戸ＳＥ01井側に使われた転用材

▲転用材細部

▲転用材裏側の貫通孔

▲横桟の枘組み



▲横桟に残る工具痕（手斧）

1．微高地上古代溝ＳＤ03（南から）▶

2．土層断面４微高地部分（北西から）▶

3．土層断面３（北西から）▶

図版12

◀1．土層断面2
（南から）

◀2．土層断面4
（北東から）

◀3．1区河道完掘状況と橋梁
（南東から）

1．橋梁遺構 ▶
（東から）

2．橋脚引き抜き作業
（W55：南西から）

3．橋脚細部加工痕
（W55）

図版14

◀1．橋脚水洗作業

◀2．河道中層遺物出土状態（1区：東から）

◀3．河道中層遺物出土状態（1区：東から）

1．３区河道掘下げ作業（３区；西から）▶

2．３区河道木材出土状態（コナラ；北西から）▶

3．２区河道検出櫂転用杭（西から）▶

図版16

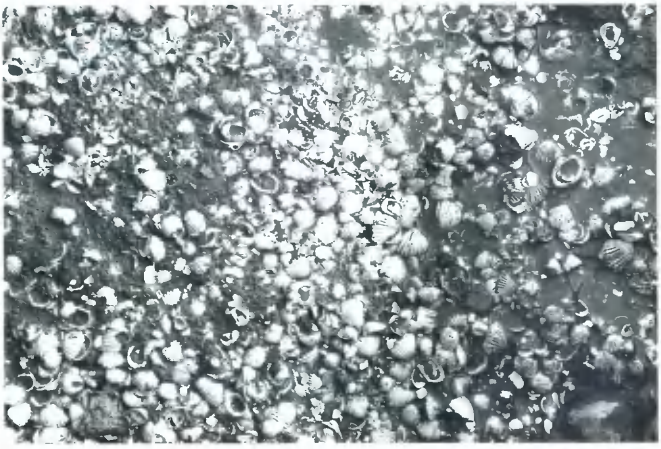
◀1．河道完掘状況
（東から）

◀2．３区河道に広がる貝塚
（北から）

◀3．３区土層断面５
（北西から）

1．２区河道内 ▶
貝塚
（南から）

2．３区河道内 ▶
貝塚
（北から）



3．貝塚上面 ▶

◀1．４区全景
（北から）

◀2．４区微高地部分と堤防断面
（西から）

◀3．４区微高地遺構検出状況
（北から）

1．４区旧堤防南の石垣（南東から）

2．４区石垣と枕胴木（南から）

3．４区低位部下層溝状たわみ（東から）

図版20

W2

W6

W7

W8

W12

箸形木製品

W51

W52

サルノコシカケ

C 2

C 5

C22

S 5

S 8

S 4

1

98凸面

7

8

10

11

12

13

18

14

15

図版22

19

28

30

33

34

38

44

47

48

49

50

51

52

53

81

84

96

112

125

126

137

138

127

129

141

131

154

142

169

164

155

178

157

238

210

239

245

218

図版24

202

273

276

284

285

286

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　101

米　田　遺　跡

米田排水機場建設（湛水
防除事業東岡山地区）に
伴う発掘調査

平成７年３月27日　印刷
平成７年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備
文化財センター
岡山市西花尻1325－３

発　行　岡山県教育委員会

印　刷　友野印刷㈱
岡山市高柳西町１－23